

岩手における環状列石関連遺跡調査報告書

—洋野町西平内 I 遺跡発掘調査報告書—

岩手県立博物館考古部門

Archaeological Research Report of the Jomon Stone Circle Sites in Iwate

Report of Nishihiranai 1 Site Hirono Town

Archaeological Section of Iwate Prefectural Museum

2024年3月
March 2024

岩手県教育委員会・岩手県立博物館
Iwate Prefectural Board of Education Iwate Prefectural Museum

刊行にあたって

岩手県立博物館は、昭和 55 年の開館以来、県民の学術文化の拠点のひとつとして活動してまいりました。博物館の諸活動のうち調査研究は最も基本的な活動のひとつであり、欠くことができないものであります。当館では、調査研究活動の成果を公表すべく「岩手県立博物館調査研究報告書」を刊行しており、今回で第 37 冊を数えることができました。

今回、ここに報告いたしますのは、当館考古部門の調査研究「岩手における環状列石関連遺跡調査」の一環として実施した、洋野町西平内 I 遺跡の調査成果です。西平内 I 遺跡は平成 26・27 年度に実施された三陸道関連発掘調査において、沿岸地域では初めて縄文時代の環状列石が確認され注目を集めました。

この調査成果を受け、岩手県教育委員会からの委託により、地元洋野町教育委員会と当館が共同して遺跡の内容確認調査、範囲確認調査を進めてまいりました。今回の調査成果が環状列石の実態解明に向けた一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成にあたり、関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し厚く御礼申し上げます。

令和 6 年 3 月

岩手県立博物館

館長 高橋 廣至

例

- 1 本書は、岩手県立博物館考古部門の調査研究活動（特定研究）「岩手における環状列石関連遺跡調査」の一環として実施した、岩手県洋野町種市第37地割地内に所在する西平内Ⅰ遺跡の内容確認調査報告書である。
- 2 本事業は、国庫補助事業により岩手県教育委員会の委託を受けて、岩手県立博物館が実施した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。
事業主体：岩手県教育委員会
公益財団法人岩手県文化振興事業団
調査機関：岩手県立博物館（考古部門）
調査協力機関：洋野町教育委員会
調査指導：熊谷常正氏（盛岡大学名誉教授）
- 4 野外での分布調査・発掘調査は令和元年度～令和4年度に実施した。調査面積合計139㎡、ボーリング調査対象面積合計は約7,370㎡である。なお、各年度の調査期間、調査面積、調査担当者等は第Ⅰ章2節に記載した。
- 5 室内整理作業、報告書作成は野外調査各年度および令和5年度に実施した。
- 6 野外調査に従事した作業員は以下のとおりである。
庭瀬チサ子、玉澤ハナエ、坂本恵美子、西由美子、庭瀬幸子、庭瀬麗子、大下良子、楳内カツエ
- 7 本書の作成には、濱田宏・金子昭彦・米田寛・高木晃があたり、第Ⅲ章1節を濱田、第Ⅲ章2節を米田、第Ⅴ章を金子、その他の執筆と編集を高木が担当した。また熊谷常正氏から寄稿いただき第Ⅶ章に掲載した。
- 8 遺構の計測、図化は株式会社CUBIC製遺構実測支援システム（遺構くん）を用いた。

言

- 9 遺跡全域の詳細測量図は洋野町教育委員会から提供を受けた測量データを使用した。
- 10 本文中、土層図における土色表示は、日本農林水産省監修「新版標準土色帳」を使用した。
- 11 出土した礫の石材については、柳沢忠昭氏（花崗岩研究会）に肉眼同定を依頼した。
- 12 出土炭化物の放射性炭素年代測定（AMS）を株式会社加速器分析研究所に委託し、測定結果を第Ⅳ章4節に掲載した。
- 13 これまで県埋蔵文化財センター報告書他で「集石遺構」「集石」という名称で示した遺構について、本報告書では「組石遺構」「組石」とする。理由は第Ⅰ章2節に記載した。
- 14 調査及び報告書作成にあたり、次の機関・個人から御指導・御協力を賜った（順不同・敬称略）。
 - (1) 機関
文化庁文化財第二課、洋野町教育委員会、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、（一社）洋野町シルバー人材センター
 - (2) 個人
信田義朋、久保田武弘、林下義則、千田政博、小平忠孝、斉藤慶吏、古屋敷則雄、小林克、赤坂朋美、杉山一樹、中澤秀男、須川翼、中村孝
- 15 調査成果は各年度に開催した現地公開資料等で公表しているが、本書の内容を正式なものとする。
- 16 本事業における調査記録および出土品は、岩手県立博物館が保管している。

目 次

本文目次

I 「岩手における環状列石関連遺跡の調査」事業の概要		IV 調査結果	
1 事業目的	1	1 試掘調査	15
2 事業実施経過	1	2 ハンドボーリング調査	31
II 西平内 I 遺跡の環境		3 出土遺物	32
1 地形・地質	5	4 AMS年代測定	36
2 基本層序	5	V 北東北配石遺構集成	
3 歴史的環境	8	1 収集要領・表の見方	39
III 西平内 I 遺跡の調査史		2 所感	39
1 三陸道関連調査の概要	11	VI 総括	52
2 洋野町教育委員会調査の概要	14	VII 西平内 I 遺跡の意義	55
		報告書抄録	83

挿図目次

第1図 西平内 I 遺跡の位置	4	第10図 2020年度調査区(1)	23
第2図 遺跡周辺の地形	6	第11図 2020年度調査区(2)	24
第3図 周辺の段丘区分	7	第12図 2021・22年度調査区	25
第4図 基本層序概念図	6	第13図 2021年度調査区(1)	26
第5図 周辺の遺跡分布図	9	第14図 2021年度調査区(2)	27
第6図 三陸道調査区主要部	12	第15図 2022年度調査区	28
第7図 調査区全体図	20	第16図 出土遺物	34
第8図 調査区全体図(北半)	21	第17図 組石遺構規模	52
第9図 調査区全体図(南半)	22	第18図 西平内 I 遺跡の構造推定	53

表目次

表1 周辺の遺跡	9	表5 県博調査区組石石材一覧	30
表2 三陸道調査区組石遺構一覧	13	表6 遺物出土地点集計表	35
表3 調査区名・遺構名整理	19	表7 遺物観察表	35
表4 県博調査区組石一覧	29	表8 配石遺構集成	45～51

写真図版目次

写真図版 1	2019 年度調査 (1)	59	写真図版 13	2021 年度調査 (4)	71
写真図版 2	2019 年度調査 (2)	60	写真図版 14	2021 年度調査 (5)	72
写真図版 3	2019 年度調査 (3)	61	写真図版 15	2021 年度調査 (6)	73
写真図版 4	2019 年度調査 (4)	62	写真図版 16	2021 年度調査 (7)	74
写真図版 5	2019 年度調査 (5)	63	写真図版 17	2021 年度調査 (8)	75
写真図版 6	2020 年度調査 (1)	64	写真図版 18	2021 年度調査 (9)	76
写真図版 7	2020 年度調査 (2)	65	写真図版 19	2022 年度調査 (1)	77
写真図版 8	2020 年度調査 (3)	66	写真図版 20	2022 年度調査 (2)	78
写真図版 9	2020 年度調査 (4)	67	写真図版 21	2022 年度調査 (3)	79
写真図版 10	2021 年度調査 (1)	68	写真図版 22	2022 年度調査 (4)	80
写真図版 11	2021 年度調査 (2)	69	写真図版 23	出土遺物 (1)	81
写真図版 12	2021 年度調査 (3)	70	写真図版 24	出土遺物 (2)	82

I 「岩手における環状列石関連遺跡の調査」事業の概要

1 事業目的

岩手県立博物館では岩手県教育委員会からの委託により、県内遺跡調査事業の一環として特定テーマに基づく調査研究事業を実施してきた。その第一弾として平成13（2001）年度から平成30（2018）年度まで「前平泉文化関連遺跡調査事業」として、衣川流域、人首川流域、紫波町周辺、沿岸南部地域等での詳細分布調査、遺跡内容確認発掘調査を進めてきた。調査成果は岩手県立博物館調査研究報告書第21・26・33・34冊として公表している。

この度、三陸沿岸地域における東日本大震災復興事業関連発掘調査が行われる中で、洋野町西平内I遺跡において縄文時代後期に構築された環状列石の一部が確認され、遺跡全体の様相把握が必要とされたこと、あわせて各地の縄文時代環状列石遺跡調査が進展し、環状列石成立や展開に関わる知見が蓄積されつつあること等から、令和元（2019）年度から令和5（2023）年度の5カ年を実施期間として新たに「岩手における環状列石関連遺跡の調査」事業を行うこととなった。

本事業実施計画に記載した事業目的は以下のとおりである。

「岩手県立博物館では、岩手県教育委員会からの委託により、令和元年度以降岩手県における縄文時代後期の環状列石を有する遺跡について考古学的な調査を実施し、本県の埋蔵文化財の保護と活用を進める。」

この間、西平内I遺跡では洋野町教育委員会が平成28（2016）年度に三陸道関連調査区の北側部分にハンドボーリング調査を実施したところ、石列が環状に全周することが判明した。規模は長軸30m短軸26mと推定され、三陸沿岸地域では初めて確認された縄文時代の環状列石であるという価値の評価により、平成30年度に町の史跡に指定されることとなった。

その後、令和元年度から4年度にかけて、

遺跡の範囲確認及び史跡整備を目的とした町教育委員会による調査が行われ、環状列石を構成する石列の状態、遺構群を被覆する整地層の状況に関する情報が蓄積されている。

こうした状況を踏まえて、本事業の具体的な目標としては、当初の3カ年に町教育委員会との協力体制をとった上で西平内I遺跡の発掘調査を行い、遺跡の内容や性格を把握すること、また環状列石の直前期、もしくは終末期以降の一般集落遺跡の調査も行い、環状列石成立前後の社会環境の変化、気候変動、人々の生活とそれとは切り離すことの出来ない精神文化の解明を目指すことを明記した。

実際には令和元年度から令和4年度までの4カ年を西平内I遺跡野外調査に充て、令和5年度は調査成果の整理と、北東北地域での配石遺構集成を行い、本報告書を作成した。

2 事業実施経過

(1) 令和元年度（2019年度）

- ・受託期間：
令和元年7月31日～令和2年1月31日
- ・受託金額：1,102,330円
- ・野外調査期間：令和元年9月2日～13日（実働10日間）
- ・調査面積：29m²
- ・室内整理期間：令和元年11月1日～30日
- ・担当者：濱田宏 学芸第三課長

金子昭彦 主任専門学芸員

初年度は洋野町教育委員会と合同で調査にあたり、環状に巡る配石遺構の確認、列石上部を覆う2種類の整地層の被覆範囲の確認の二つを目的として5カ所の調査区（19A～E区）を設定した。調査成果は以下のとおり。

- ・各トレンチで大小の礫の並びを確認、全体として配石は弧状に展開するものと判断される。町教委によるボーリング調査成果と整合する。
- ・2枚の整地層の推定被覆範囲を把握した。配石全体を覆うものではないと判断される。
- ・列石の石質鑑定結果から近隣の渋谷川周

辺、もしくは海岸付近で採取可能な石材の利用が判明した。

- ・環状列石礫群の確認面で焼土粒とともに出土した炭化物6点(当館分1点)に対してAMS年代測定を実施した。すべて古墳時代を中心とした年代測定値が報告されたが、考古学的に推定される環状列石の年代観と乖離があり、試料混入等による結果と判断した。

なお、上記の令和元年度の調査結果については洋野町教育委員会が調査記録類、出土遺物の整理を行い、令和2年3月に洋野町埋蔵文化財調査報告書第9集『西平内I遺跡発掘調査報告書 一環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査』として発刊済である。

(2) 令和2年度(2020年度)

- ・受託期間：
令和2年8月20日～令和3年1月31日
- ・受託金額 1,044,890円
- ・野外調査期間(第一次調査)：
令和2年9月7日～11日、15～18日
(実働9日間)
- ・調査面積：31㎡
- ・野外調査期間(第二次調査)
令和2年11月9日～11日(実働3日間)
- ・調査対象面積：3,000㎡
- ・室内整理期間：
令和2年10月1日～令和3年1月28日
- ・担当者：濱田宏 学芸第三課長
金子昭彦 上席専門学芸員

第一次調査として、三陸道南側の尾根筋を調査対象として選択し、町教育委員会によるボーリング調査で礫の反応が出た地点を対象に4カ所の調査区(20A～D区)を設定、内容確認調査を実施した。また引き続いて第二次調査として南側尾根筋とその東西斜面の合計面積3千㎡を対象にボーリング調査を実施した。調査成果は以下のとおり。

- ・内容確認調査のうちA・B・D区では単独の礫、少量の遺物等が出土した。
- ・C区では大小十数個からなる組石(20-1号組石)を検出。組石の脇では土坑のプランと

その壁際に周溝を確認した。土坑の短軸幅は60cm程度で、集石に伴う墓壇の可能性がある。

- ・ボーリング調査結果は88カ所に礫反応があった。分布は北西斜面側を主体とし、上位の平坦面にかけて広がる。今回確認した礫群を総合すると全体が環状とはならないものと判断される。

(3) 令和3年度(2021年度)

- ・受託期間：
令和3年8月2日～令和4年3月4日
- ・受託金額：999,310円
- ・野外調査期間：令和3年9月6日～17日
(実働10日間)
- ・調査面積：40㎡
- ・室内整理期間：
令和3年10月1日～令和4年3月3日
- ・担当者：濱田宏 学芸第三課長
金子昭彦 学芸第一課長
米田寛 主任専門学芸員

前年度のボーリング調査の結果を受けて、石の反応が顕著であった北西向き斜面地に5×8mの調査区(21A区)を設定し、組石遺構の分布状況等の確認を行った。また北西部斜面地を選択しその一部にボーリング調査を実施した。調査成果は以下のとおり。

- ・組石遺構11基が調査区全体に分布する状態を確認した。また縄文時代後期前葉を主体とする土器片約100点が出土し、土器集中2カ所を検出した。
- ・調査地より北西側の斜面地で行ったボーリング調査の結果、礫反応を10カ所で確認し、谷頭に礫分布が広がることが判明した。

(4) 令和4年度(2022年度)

- ・受託期間：
令和4年8月26日～令和5年3月24日
- ・受託金額：1,079,012円
- ・野外調査期間(第一次調査)：
令和4年9月6日～9日(実働4日間)
- ・調査面積：39㎡
- ・野外調査期間(第二次調査)

令和4年11月14日～20日（実働6日間）

・調査対象面積：4,370㎡

・室内整理期間：

令和4年9月10日～令和5年3月24日

・担当者：高木晃 学芸第一課長

金子昭彦 学芸第三課長

米田寛 主任専門学芸員

4年目の調査は遺跡南側を対象として、前年度検出した組石群の広がりを確認する目的で第一次調査、南側遺跡範囲を把握するためのボーリング調査を第二次調査として実施した。調査成果は以下のとおり。

・前年度の21A区の南側に接する地区を対象に13×2.5mの範囲で拡張する調査区を設定し、2～3個の礫で構成される組石遺構2基を検出した。またこの西側斜面でも組石遺構3基を検出した。

・遺跡南側尾根部の3,870㎡を対象としたボーリングを行った結果、斜面下方に向かい礫反応が希薄になることを確認した。

・遺跡南西側谷部の緩傾斜～急傾斜地500㎡を対象にボーリングを行い、過去の本線調査区で検出された組石遺構集中区域が更に西側に延びることを確認した。

なお、第二次調査期間中の11月19日に洋野町教育委員会主催の現地見学会が開催され、当館調査分として第一次調査の状況を説明した。

(5) 令和5年度（2023年度）

・受託期間：

令和6年2月1日～令和6年3月29日

・受託金額：1,340,218円

・担当者：高木晃 学芸第一課長

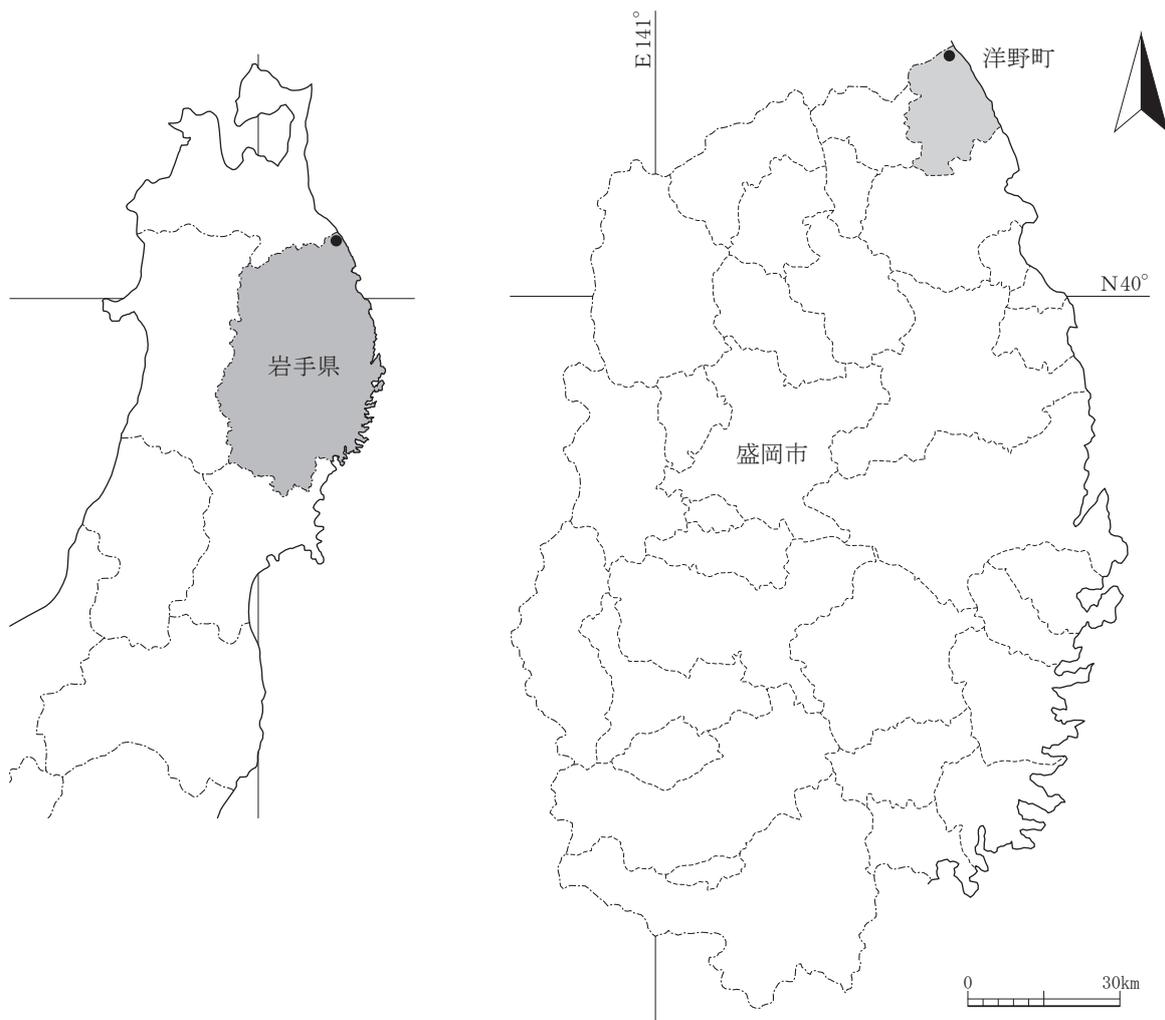
金子昭彦 学芸第三課長

米田寛 主任専門学芸員

前年度までの4カ年にわたる野外調査、室内整理の記録類編集、出土遺物の凶化作業に加えて北東北に所在する縄文時代配石遺構集成を行い、調査報告書を作成した。

なお、令和5年5月26日に県教育委員会生涯学習文化財課、洋野町教育委員会、調査指導熊谷常正氏、県立博物館の4者が、今後

の調査計画、報告書作成計画を主眼として事業計画に関する協議を行った。この席上で遺構名称、地区名についての整理統一方針が話し合わせ、これまで三陸道関連調査報告書、及び各年度事業実施報告等において「集石」、「集石遺構」と表現した遺構種別名称を「組石」、「組石遺構」と変更することとした。大きな理由は、「集石」が縄文時代草創期～早期に多く見られる調理施設を指す場合が一般的であるため、これとの混同を避けることが第一にあり、あわせて、人為的に何らかの目的を持って礫を組み合わせた遺構であることを明示すべきとの考え方による。これにより各年度事業実施報告等で使用されてきた遺構名、調査区名称を変更し表3（19頁）に示した。



1:25,000 地形図「階上岳」(地理院地図)

第1図 西平内I遺跡の位置

II 西平内 I 遺跡の環境

1 地形・地質

(1) 遺跡周辺の地形

西平内 I 遺跡が所在する岩手県九戸郡洋野町は岩手県北沿岸、青森県境に位置し、北は青森県階上町、南は久慈市、西は九戸郡軽米町・九戸村などの市町村に接し、東は太平洋に面している。

西平内 I 遺跡は太平洋岸から直線距離で約1.5km、青森県境からも約1.5kmの丘陵上に立地し、北緯40度25分38秒、東経141度40分47秒地点の周囲に広がる。遺跡の西側は、階上岳を主峰とする山塊から発し東流して太平洋に注ぐ渋谷川に面しており、東側は遺跡の北で渋谷川に合流する支流の緩い谷地形に続く。両河谷に挟まれ南から北に向かって舌状に張り出した尾根筋に遺跡が広がり、遺跡付近の標高はおよそ65～60mの範囲にある。

西側の渋谷川に面した斜面は最大斜度40°に達する急傾斜の段丘崖となっており、河床面から20mほどの比高差がある。一方東側は勾配10°程度の緩斜面地である。遺跡が広がる尾根は頂部に平坦面を持ち、三陸道が東西に横断する鞍部を挟み、南側と北側に標高65m前後の緩い丘状の高まりがある。ここではそれぞれ北丘、南丘と呼称する。環状列石は北丘の最高標高点から北側にかけての緩斜面に位置する。また、三陸道関連調査区を挟んだ南側の県立博物館調査区は南丘に立地する。

なお、三陸道調査前の調査区の状況は、昭和に入り植林された杉林と雑木の生い茂る山林で、地権者によると大きな地形改変を伴う土地造成は行っていないとのことである。

周辺を含めた段丘区分を第3図に示した。従来、高位から九戸段丘・白前段丘・種市段丘・玉川段丘に区分されていたが、松山(2004)は種市段丘について高度25～50mの種市段丘と、高度40～70mの川尻段丘に細分した。

その後更に川尻段丘を白前段丘の低位面に組み入れ、高位の白前段丘とともに白前段丘を区分し直した(松山2013)。

ここで示された段丘区分に従えば、西平内

I 遺跡が立地する尾根は、白前段丘高位面から低位の川尻段丘にかけて広がっている。

(2) 遺跡周辺の地質

洋野町の地質は、町東側のJR八戸線と海岸線の間を除き花崗閃緑岩で占められ、それ以外の地区は、角浜地区から渋谷川河口付近までがデイサイト～流紋岩質溶岩や火山碎屑岩、その地域から有家川河口付近までは礫岩や凝灰岩を伴う砂岩(種市層)を基盤とする。これら基盤岩上には、段丘堆積物の砂礫層・砂層・泥層などがのり、さらにこの上を火山灰や軽石起源の褐色火山灰層群と黒色土(クロボク)が覆う。

褐色火山灰層群は、下位から九戸火山灰層、高館火山灰層、八戸火山灰層の3つに区別される。九戸火山灰層は、旧種市町域では2m以上の厚さをもつが、軽石層の分布や層序は明らかでない。高館火山灰は、後期更新世の火山碎屑物などから構成された地層で、主に十和田火山起源のものから構成される。

八戸火山灰層は、火山碎屑物層とその上の火砕流堆積物の2つから構成され、実年代は約15,000年前とされる。青森県南東部では、火山灰層と軽石層が互層となり、下位から6層に区別されるが本遺跡での対比はできていない。

岩手県北から青森県東南部にかけての完新世火山碎屑物としては、下位から十和田南部浮石層、小国軽石層、十和田中振火山灰層、十和田b降下火山灰層、十和田a降下火山灰層などの十和田火山起源のものと、より新期の白頭山火山灰層がある。西平内 I 遺跡ではこれらのうちいわゆる地山の褐色土層に八戸火山灰層が介在し、上層の黒褐色土中に十和田南部浮石が含まれる。本遺跡では基本層序Ⅲ～Ⅳ層に十和田南部テフラ由来の浮石粒が含まれ、Ⅴ層は十和田八戸火山灰層起源の褐色土で構成される。

2 基本層序

三陸道調査区、北丘の洋野町教育委員会と県立博物館の合同調査区を含めた遺跡の基本

層序は概ね共通している。土層概念図を第4図に示した。なお三陸道調査区と北側の調査区内の層序については、それぞれの報告書に記載があるため、ここでは詳細は省略する。

全体として見れば、上位から現表土であるI層、II層黒褐色土層、III層褐色土層、IV層黒～暗褐色土の漸移層、V層褐色土基盤層という層序関係は、遺跡主要部に概ね共通して見られる。三陸道調査区と北側調査区の一部に分布範囲を持つ2枚の整地層は、I層とII層の間に介在し、上に間層を挟まない。

整地層1の黄褐色土層は、IV層以下の浮石粒を含む暗褐色～褐色土とは異なり、全く浮石粒を含まない。こうした点から、人手により持ち込まれた土壌と解釈されている(岩手県埋蔵文化財センター2017)。

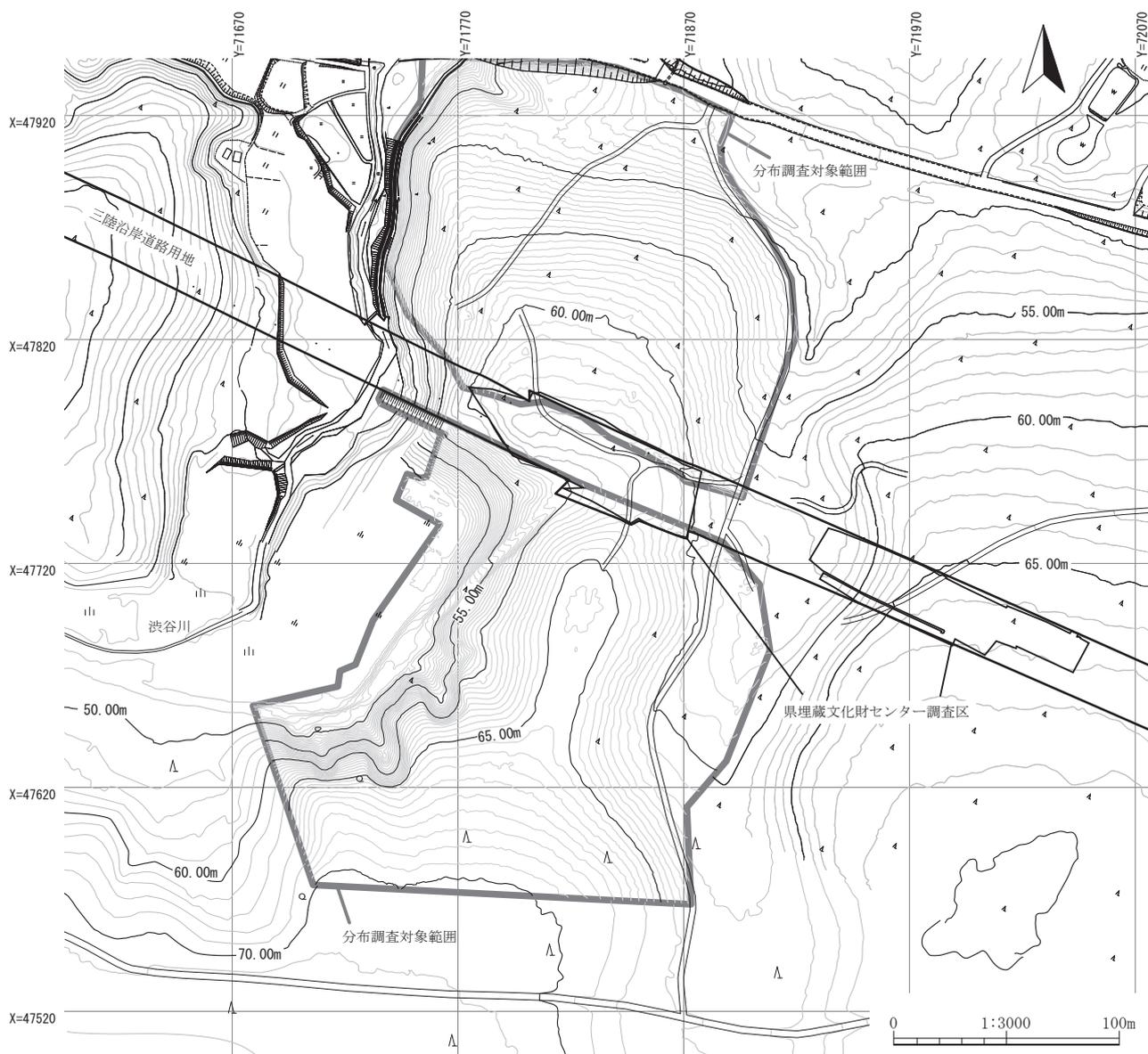
整地層2は黒褐色粘土質シルトを基調としており、上部は整地層1の黄褐色土粘土質シルトとの混合土と判断される。また、整地層2と基本層序II層の層界は部分的に水平となっていることから、II層上面を整地した上で整地層2により造成された可能性があるが、断定はできていない。

文献

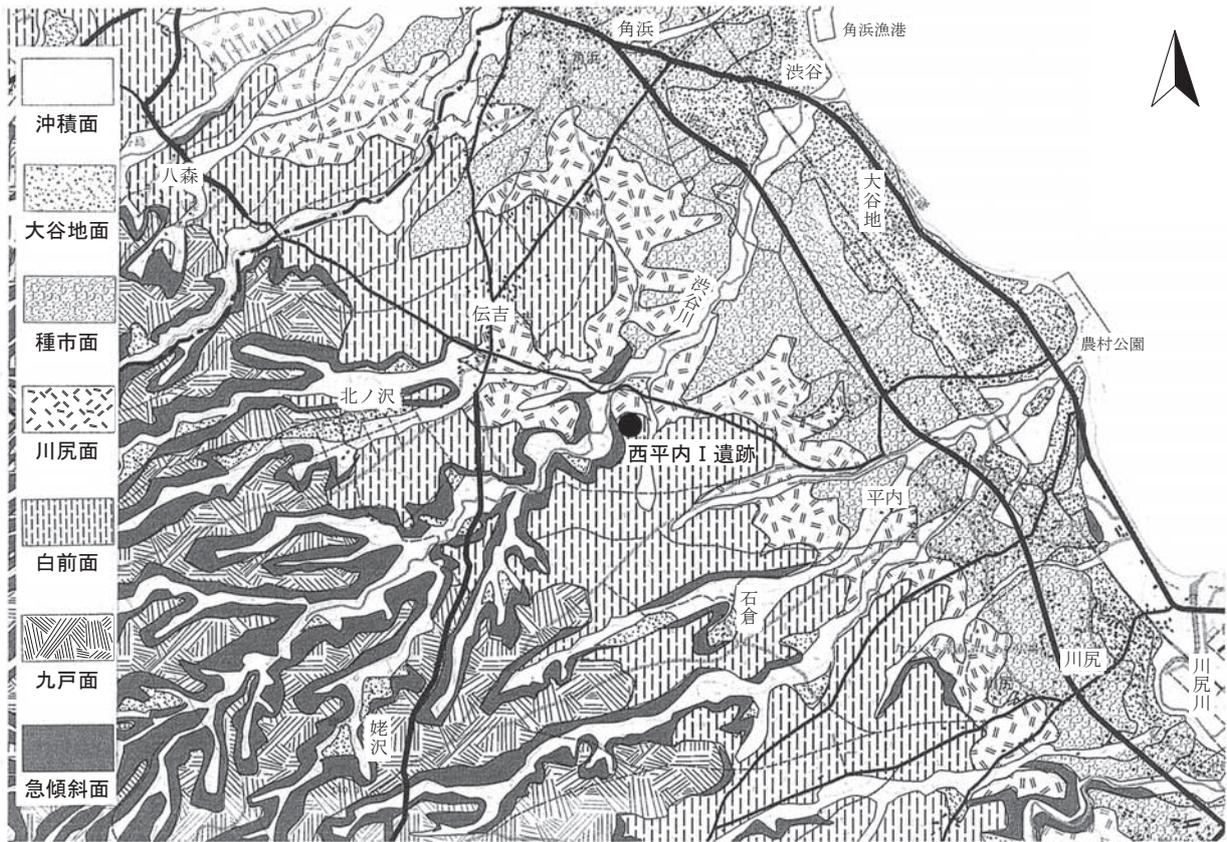
松山力 2004「平内II遺跡の地学的環境」『平内II遺跡発掘調査報告書』種市町埋蔵文化財調査報告書第1集

松山力 2013「平内II遺跡の地学的環境」『平内II遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集

岩手県埋蔵文化財センター2017『西平内I遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集



第2図 遺跡周辺の地形



第3図 周辺地形区分

I層	現表土 (森林腐食土 上部 I a 層は植物根繁茂)
整地層 1	(黄褐色土 三陸道北側調査区に分布)
整地層 2	(黒色土 三陸道北側調査区に分布)
II層	黒褐色土 (配石遺構構築面)
III層	褐色土 (十和田南部浮石粒含む 配石遺構構築面下部)
IV層	黒～暗褐色 (十和田南部浮石粒含む 漸移層)
V層	褐色土 (八戸火山灰層 基盤層)

第4図 基本層序概念図

3 歴史的環境

本項の記載は、洋野町教育委員会『西平内I遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第9集に準ずる。洋野町内に所在する遺跡は、令和元年（2019）4月現在、岩手県遺跡台帳に219遺跡が登録されている。町内では平成23年（2011）以降、三陸沿岸道路建設や再生可能エネルギー事業等に係る試掘調査により新規発見の遺跡が増加している。

旧石器時代の遺跡としては、中野地区の尺沢遺跡が登録され、ナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺跡数は、全体の7割以上に及ぶ。草創期の遺跡として板橋II遺跡、鹿糠浜1遺跡があり、爪形文土器が出土している。早期～前期の遺跡として、ゴッソー遺跡、大宮II遺跡、大宮I遺跡、宿戸遺跡、中野城内遺跡、上のマッカ遺跡、北ノ沢1遺跡（16）、鹿糠浜1遺跡、小田ノ沢I遺跡などがある。尺沢遺跡では、日計式の押型文土器が出土し、同時期とされる石器も出土している。また、岩手県埋蔵文化財センターによる平成6年度（1994）のゴッソー遺跡発掘調査では日計式土器、魚骨回転文土器等が出土している。宿戸遺跡では、早期中葉～前期前葉の竪穴住居跡が多数検出され、白浜式から寺の沢式までの土器が出土した。北ノ沢1遺跡の調査では、円筒下層d2式から上層b式にかけての土器の捨て場であることが確認された。

中期の遺跡として、千敷平遺跡、ゴッソー遺跡、上のマッカ遺跡、北ノ沢1遺跡（16）などがある。

後期の遺跡として、平内II遺跡（26）、上水沢II遺跡、西平内1遺跡（25）、南川尻遺跡（53）、サンニヤ1遺跡（54）、北鹿糠遺跡、下向I遺跡、続石遺跡などがある。平内II遺跡（26）からは屋外炉、集石、焼土遺構、溝状土坑が検出されている。上水沢II遺跡からは後期前葉～後葉の竪穴住居跡が11棟発見された。西平内I遺跡は本書第三章を参照されたい。

晩期の遺跡として、たけの子遺跡、大平遺跡、ニサクドウ遺跡、戸類家遺跡、田ノ沢遺跡などがある。

町内には縄文時代の貝塚が多く存在し、ホックリ貝塚、八木貝塚、小子内貝塚、黒マッカ貝塚がある。ホックリ貝塚では、縄文時代の製塩土器が発見された。このほか縄文時代の製塩土器は、ゴッソー遺跡、たけの子遺跡、南平内I（36）遺跡からも出土している。

弥生時代の遺跡として、大平遺跡、大宮II遺跡、大宮I遺跡、平内II遺跡（26）、上水沢II遺跡、北玉川I遺跡などがある。先述した平内II遺跡では、前期の竪穴住居跡が2棟検出されている。北玉川I遺跡では、中期の竪穴住居跡が4棟検出された。上水沢II遺跡では後期の竪穴住居跡が1棟検出され、土器がコンテナ約1箱分出上している。

古墳～飛鳥時代の遺跡については、南鹿糠I遺跡の発掘調査において、竪穴住居跡が検出されている。袖山遺跡では、剣形の蛇紋岩製の石製模造品が表面採集されている。5世紀代の可能性がある。

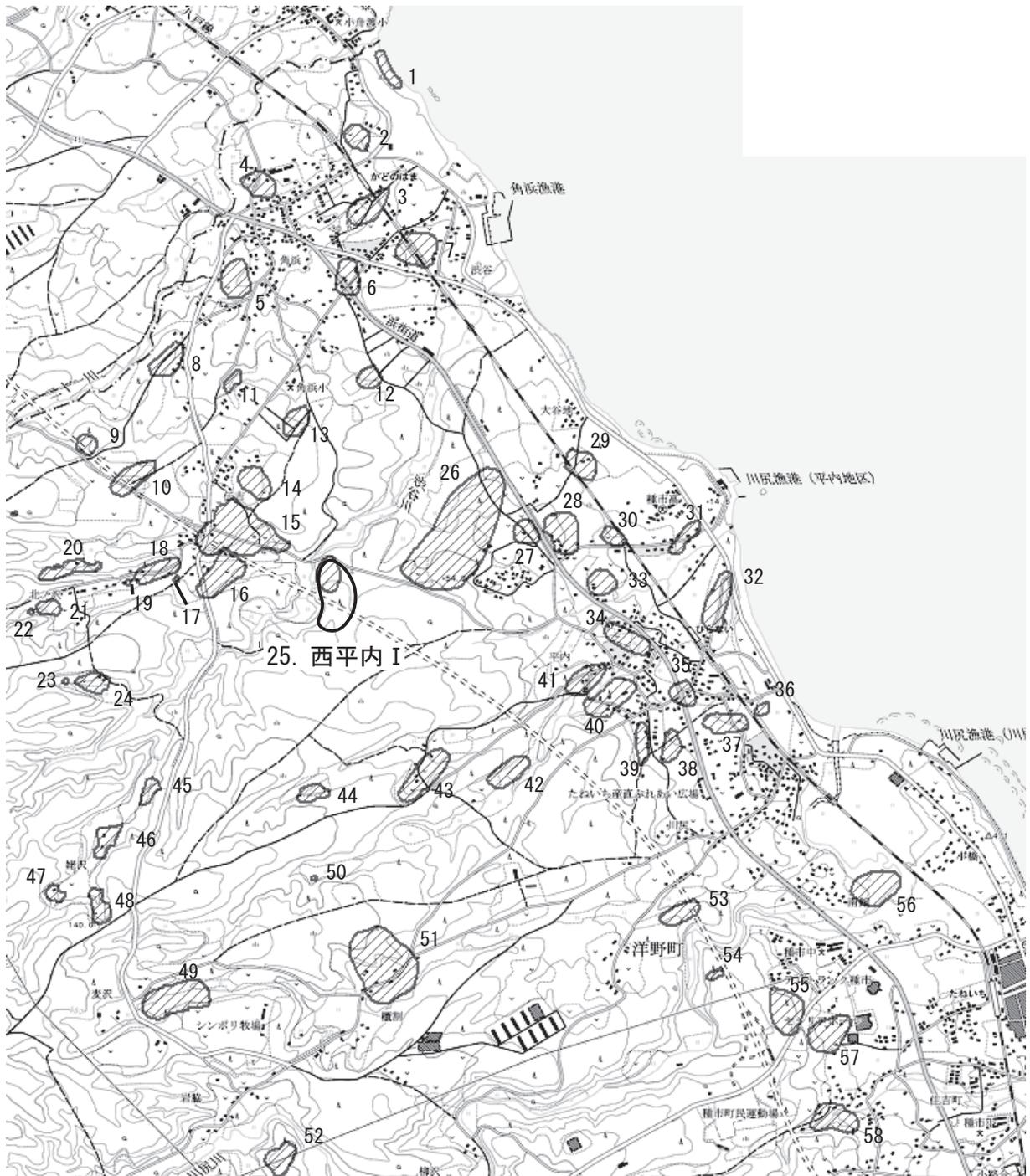
奈良・平安時代の遺跡として、城内遺跡、ニサクドウ遺跡、二十一平遺跡（1）、八森遺跡、鹿糠浜II遺跡、サンニヤII遺跡（55）、館野遺跡などがある。サンニヤII遺跡では、8世紀後半から9世紀前半の時期の竪穴住居跡が3棟検出されている。上のマッカ遺跡の発掘調査において、土師器と製塩土器を伴う竪穴建物跡が検出されている。また、床面からは2基の炉跡が検出されており、土師器の年代から10世紀後半～11世紀の製塩工房と考えられる。

主な中世の遺跡として、城館跡が27遺跡登録されている。種市の城内地区には種市氏の居城である種市城跡が所在する。種市氏は三戸南部氏の家臣として活躍した。

近世には盛岡藩及び、盛岡藩支藩の八戸藩として、商業、林業、漁業、製塩業、製鉄業、造船業が栄えた。特に製鉄は原料である砂鉄と燃料の薪炭材が豊富であったため盛んに行われた。製鉄の中心地は大野で、玉川山、金取山、葛柄山、水沢山、大谷山、川井山、滝山の七山があった。

〈文献〉

洋野町教育委員会 2020『西平内I遺跡発掘調査報告書』
洋野町埋蔵文化財調査報告書第9集



第5図 周辺の遺跡分布図

※ 岩手県遺跡情報検索システム(平成28年度版)に加筆

表1 周辺の遺跡(1)

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地
1	IF38-0098	二十一平	製塩遺跡	古代	製塩土器、土製支脚、土師器	種市第41地割
2	IF38-1042	堆中山II	散布地	縄文	縄文土器、礫器	種市第41地割
3	IF38-1072	アイヌ森	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器(前～晩期)、縄文晩期後葉～弥生前期の土器、石器、土師器	種市第39地割
4	IF37-1367	堆中山I	散布地	縄文	石斧	種市第41地割
5	IF37-1386	角浜	散布地	縄文	縄文土器	種市第42地割
6	IF38-2001	角川目II	散布地	縄文	縄文土器	種市第39地割
7	IF38-1086	角川目I	散布地	縄文	縄文土器(前・中・晩期)、石斧、敲石、礫器	種市第39地割
8	IF37-2343	田ノ端I	散布地	縄文	縄文土器(後期)	種市第42地割
9	IF37-2343	田ノ端II	狩り場、散布地	縄文	陥し穴、縄文土器、フレイク	種市第44地割地内
10	IF37-2392	伝吉II	散布地	縄文	縄文土器(前期)、石鏃	種市第43地割
11	IF37-2356	笹花I	散布地	縄文	縄文土器	種市第43地割
12	IF38-2053	笹花II	散布地	縄文	縄文土器(後期)	種市第43地割
13	IF37-2379	笹花III	散布地	縄文	縄文土器	種市第43地割
14	IF37-2397	笹花IV	散布地	縄文	縄文土器、石斧、敲石、礫器	種市第43地割

表 1 周辺の遺跡 (2)

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地
15	IF37-2396	伝吉 I	散布地	縄文・古代	縄文土器 (早・前・後期)、剥片石器、礫石器、土師器等	種市第 43 地割
16	IF47-0345	北ノ沢 I	散布地	縄文	縄文土器 (中期)、石鏃、削搔器、石斧、敲石、剥片	種市第 45 地割
17	IF47-0344	北ノ沢 V	製鉄関連	不明 (近世か?)	鉄滓	種市第 45 地割
18	IF47-0333	北ノ沢 II	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	種市第 45 地割
19	IF47-0341	北ノ沢 VI	製鉄関連	不明 (近世か?)	鉄滓	種市第 45 地割
20	IF47-0239	伝吉 III	散布地	縄文	縄文土器	種市第 44 地割
21	IF47-0258	北ノ沢 III	散布地	縄文	縄文土器	種市第 45 地割
22	IF47-0257	北ノ沢 VII	製鉄関連	不明 (近世か?)	鉄滓	種市第 45 地割
23	IF47-0299	北ノ沢 VIII	製鉄関連	不明 (近世か?)	鉄滓	種市第 45 地割
24	IF47-0390	北ノ沢 IV	散布地	縄文・古代	縄文土器 (前期)、土師器	種市第 45 地割
25	IF48-0041	西平内 I	散布地	縄文	縄文土器 (後期)、石斧、剥片	種市第 37 地割
26	IF48-0017	平内 II	散布地	縄文・弥生・近世	縄文土器 (中期末～後期前葉)、弥生土器 (前期後葉)、石器、鉄製品	種市第 43 地割
27	IF48-0110	北平内 V	散布地	縄文・弥生	縄文土器 (後・晩期)、縄文晩期後葉～弥生前期の土器	種市第 38 地割
28	IF48-0121	北平内 IV	散布地	縄文	縄文土器 (後期)、剥片	種市第 38 地割
29	IF38-2192	北平内 I	散布地	縄文	縄文土器、石斧、礫器	種市第 38 地割
30	IF48-0123	北平内 III	散布地	縄文	縄文土器	種市第 38 地割
31	IF48-0127	北平内 II	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	種市第 38 地割
32	IF48-0158	浜平内	散布地	縄文	縄文土器 (早・晩期)、石斧、敲石	種市第 36 地割
33	IF48-0143	北平内 VI	散布地	縄文	縄文土器、石斧、敲石	種市第 38 地割
34	IF48-0174	平内 IV	散布地	縄文・古代	縄文土器 (前期)、石斧、敲石、土師器、須恵器	種市第 35 地割
35	IF48-0197	平内 V	散布地	縄文	縄文土器 (前期)、石斧、礫器	種市第 35 地割
36	IF48-1200	南平内 I	散布地	縄文	縄文土器 (晩期)、製塩土器	種市第 33 地割
37	IF48-1119	南平内 II	散布地	縄文	縄文土器、剥片石器	種市第 32 地割
38	IF48-1126	南平内 III	散布地	縄文	縄文土器、剥片	種市第 32 地割
39	IF48-1115	東平内 I	散布地	縄文	縄文土器、石斧、敲石、礫器、剥片	種市第 34 地割
40	IF48-0194	平内 III	散布地	縄文	縄文土器 (中期)、磨石	種市第 34 地割
41	IF48-0170	平内 I	散布地	縄文	縄文土器 (前・中期)、剥片	種市第 34 地割
42	IF48-1039	東平内 II	散布地	縄文	縄文土器	種市第 34 地割
43	IF48-1025	石倉	集落跡	縄文・古代	縄文土器 (後期)、敲石、礫器、土師器	種市第 37 地割
44	IF48-1040	西平内 II	散布地	縄文	縄文土器 (前期)、敲石	種市第 37 地割
45	IF47-1342	姥沢 IV	散布地	縄文	縄文土器 (中期)、削搔器、ピエスエスキュー、剥片	種市第 47 地割
46	IF47-1360	姥沢 III	散布地	縄文	縄文土器 (前・後期)、削搔器、石斧、剥片、古銭	種市第 47 地割
47	IF47-1288	姥沢 II	散布地	縄文・古代	縄文土器、石斧、土師器	種市第 47 地割
48	IF47-1390	姥沢 I	散布地	縄文	縄文土器 (後期)、石鏃、石斧、剥片	種市第 47 地割
49	IF47-2334	千敷平	集落跡	縄文	縄文土器 (前・中・晩期)、石棒、剥片	種市第 48 地割
50	IF48-1080	東平内 III	製鉄関連	不明 (近世か?)	羽口、鉄滓	種市第 34 地割
51	IF48-2023	櫃割	散布地	縄文	石棒	種市第 30 地割
52	IF57-0309	小手野沢金山	砂金採取跡	近世	石垣	種市第 51 地割
53	IF48-1197	南川尻	散布地	縄文	縄文土器、石器	種市第 28 地割
54	IF48-2128	サンニヤ I	散布地	縄文	縄文土器	種市第 25 地割
55	IF48-2231	サンニヤ II	集落跡	古代	竪穴住居跡・土坑、縄文土器・土師器	種市第 25 地割地内
56	IF48-1276	南館	城館跡	中世	堀跡 (破壊)	種市第 28 地割
57	IF48-2234	横手	散布地	縄文・古代	縄文土器 (晩期)、土師器	種市第 24 地割
58	IF48-2283	トチの木	散布地	縄文	縄文土器 (後・晩期)	種市第 21 地割

Ⅲ 西平内 I 遺跡の調査史

1 三陸道関連調査の概要

三陸沿岸道路は宮城、岩手、青森各県の太平洋沿岸を結ぶ延長 359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けた復興道路として位置づけられ、令和 3 (2021) 年に全線が開通した。この道路建設に伴い洋野町内では合計 21 カ所、合計 15 万㎡の発掘調査が実施されており、その一つが西平内 I 遺跡である。

調査は国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託により(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施し、平成 26 (2014) 年度・平成 27 (2015) 年度の 2 カ年で合計 5,500㎡の発掘調査が行われた。調査成果は『西平内 I 遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 673 集)として平成 29 (2017) 年に発刊されている。この調査では縄文時代後期の内外二重構造を持つ組石遺構群と弧状石列、またこれらを覆う 2 枚の整地層が検出され、注目を集めた。

遺跡が立地する尾根は北側に現地表面標高 63.2 m、南側に同標高 65.6 m の緩い高まりがあり(以下、北丘・南丘とする)、三陸道関連調査区はその間を結ぶ同標高 62 m の鞍部から、北丘の南斜面にかけての緩斜面を東西に横断する形状となっている。内帯弧状石列は北丘の頂部平坦面を囲むような位置に検出され、外帯配石遺構群は鞍部西側の緩斜面に分布する。

外帯は合計 62 基の組石遺構(報告では「集石」と呼称)から構成される。組石遺構は 4～5 個程度から 30 個程度の礫が概ね楕円形基調に集積したもので、規模は長軸 80～200cm、短軸 50～150cm 程度が多い。また組石の下部土坑は全体の 75% にあたる 42 基で検出された。これらは配石墓の可能性を持つものを含むと判断されているが、人骨や明確な副葬品の確認には至らず断定されていない。

内帯の弧状石列は総数 180 個の礫で構成され、本体の弧状石列に加えて南西部に長 4 m のトゲ状石列が付属する。このトゲ状石列の

方向は階上岳山頂を向く。弧状石列は、全体が直径 25～30 m 前後の環状列石の南側一部であり、全体の 1/4～1/5 程度を調査したものと想定された。

外帯・内帯を構成する礫は砂岩・花崗岩・花崗閃緑岩の 3 種で全体の 8 割程度に達し、遺跡西側を流れる渋谷川河床の角礫が主に用いられたと考えられる。一方、海岸付近から運搬された可能性が高い円礫も一定割合で含まれる。

整地層は上層の整地層 1 (黄褐色土層) と下層の整地層 2 (黒褐色土層) からなり、南西側を中心に内帯と外帯の一部を覆う状態で検出された。整地層の層厚は 10～20cm 程度で人為的に配石群を被覆したものと考えられる。なお、整地層 1 内から採取した試料 3 点の AMS 年代測定結果は縄文晩期中葉～平安時代の年代観を示しており、整地土の被覆造成が行われた時期を確定するには至っていない。

内帯の外周には掘立柱建物跡群が並ぶ。これらは 4 本柱もしくは亀甲形の 6 本柱の構造を持ち、内帯から約 3 m の間隔をあけて配列する。また内帯南西部では竪穴住居跡、炉跡、フラスコ状土坑等が分布しているが、これらと内帯石列・外帯組石遺構群の重複関係によれば、住居跡、土坑群は組石遺構群よりも古い段階の遺構とみなされる。

以上の各種遺構の重複、新旧関係を元に、調査区内全体の土地利用変遷については以下のようにまとめられる。

- 1 竪穴住居の構築と廃棄
(縄文後期初頭)
- 2 土坑群の構築
(縄文後期初頭～前葉)
- 3 内帯環状列石の構築・掘立柱建物の構築
(縄文後期初頭～前葉)
- 4 外帯配石墓群の形成
(縄文後期初頭～前葉)
- 5 整地層 1 による被覆造成
(縄文後期前葉)
- 6 整地層 2 による被覆造成
(縄文晩期中葉以降)

表2 三陸道調査区組石遺構一覧

石材凡例
 砂：砂岩 花：花崗岩 花閃：花崗閃緑岩 花斑：花崗斑岩 閃：閃緑岩 凝：凝灰岩 頁：頁岩
 デ：デイスサイト ヒ：ヒン岩 ア：アブライト ホ：ホルンフェルス ハン：はんれい岩 チャ：チャート

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	礫総数	主要 構成礫数	下部土坑	礫石材	出土遺物	備考
1号集石	220	75	9	9		砂(主)・花・花閃	土器片、石製円盤	
2号集石	170	100	30	18	あり	砂(主)・花・花閃	土器片、土製円盤、石製円盤、砥石	
3号集石	170	110	20	20		砂(主)・花・花閃	土器片、ミニチュア土器	
4号集石	122	60	10	10	あり	砂(主)・花閃(主)	土器片、石斧未製品	
5号集石	140	80	7	7	あり	砂・花閃	土器片、異形石器	
6号集石	192	90	10	10	あり	砂・花閃・デ	土器片、土製円盤、石鏃、石斧未製品	立石
7号集石	285	90	30	6	あり	砂(主)・花・花閃・デ・凝	土器片、不明土製品、剥片石器、礫石器	
8号集石	102	84	15	15	あり	砂(主)・花・花閃	土器片	
9号集石	90	50	9	5	あり	砂・花・花閃	土器片、剥片石器	
10号集石	215	110	11	6	あり	砂・花閃	土器片	
11号集石	160	160	18	15	あり	砂(主)・花・花閃・ハン	土器片、土製円盤、石斧未製品、石鏃	立石
12号集石	92	55	7	7	あり	砂(主)・花閃	土器片、石製円盤	立石
13号集石	105	70	8	5	あり	砂(主)・花閃	土器片、石製円盤	
14号集石	160	60	4	4		砂	土器片	
15号集石	108	74	14	13	あり	砂(主)・デ	土器片、石鏃	
16号集石	75	48	4	4	あり	花閃(主)・砂	土器片	
17号集石	115	90	11	9	あり	砂(主)・花閃・花・ヒ・凝	土器片	立石
18号集石	150	65	5	5		砂・花・花閃	土器片	
19号集石	330	150	7	7		砂・花・花閃	土器片、石製円盤、礫石器	
20号集石	155	85	26	20	あり	砂・花・花閃・デ・凝	土器片、石斧未製品	
21号集石	180	180	4	4		花閃・頁	土器片	
22号集石	142	80	12	6	あり	花・ヒ	土器片	
23号集石	164	130	16	16	あり	砂・花・花閃・デ	土器片、礫石器	
24号集石	240	120		あり		砂・花・花閃	土器片、ミニチュア土器	
25号集石	95	90	15	15	あり	砂・花・花閃・ヒ	土器片	
26号集石	115	110	15	15	あり	砂・花・花閃・頁	土器片	
27号集石-1	87	85	10	10	あり	砂・花閃・デ	土器片、土製円盤	
27号集石-2	116	55	10	10	あり	砂・花・花閃	土器片、土製円盤	
28号集石	176	110	30	30	あり	砂・花・花閃・デ	土器片	
29号集石	164	72	13	13	あり	砂(主)・花閃(主)・デ・ア	土器片	
30号集石	140	70	20	20	あり	砂(主)・花(主)・閃・は	土器片、礫石器	墓標
31号集石	160	120	30	30	あり	砂(主)・花(主)・花閃(主)	土器片	墓標
32号集石	90	85	10	10	あり	砂(主)・花(主)・花閃(主)	土器片	
33号集石-1	132	95	15	15	あり	砂(主)・花閃(主)・花・は	土器片	立石
33号集石-2	180	90	13	13	あり	砂(主)・花斑	土器片	
34号集石	80	70	4	4	あり	砂・花・花閃・ホ	土器片	
35号集石	100	45	4	4		砂・花閃	土器片	
36号集石-1	122	90	7	7	あり	花・花閃・閃	土器片	立石
36号集石-2	94	50	6	6		花・花閃・ヒ	土器片	
37号集石	70	58	10	10	あり	砂(主)・花(主)・花斑	土器片	
38号集石	114	74	8	8	あり	砂・花・花閃	土器片	
39号集石	120	120	14	14	あり	砂・花・花閃・ハン	土器片、石斧未製品	
40号集石	117	65	13	13	あり	砂(主)・花(主)・花閃・閃	土器片、異形石器	
41号集石	135	50	6	6		花閃・ア	土器片	
42号集石	188	155	23	23	あり	花閃(主)・ア(主)・砂・花・ハン	土器片	
43号集石	120	120	12	12	あり	花・花閃	土器片	
44号集石	94	70	12	12	あり	花(主)・砂・花閃・デ・ヒ・ア	土器片、石匙	
45号集石	180	110	20	20	あり	花閃・ア・デ	土器片、石斧未製品	
46号集石			2	2		花・花閃	土器片	
47号集石	140	140	17	17	あり	花(主)・砂・花閃	土器片	
48号集石	82	74	8	8	あり	砂(主)・花・花閃・閃	土器片	立石
49号集石	100	60	4	4	あり	花(主)・ア	土器片	
50号集石	150	110	7	7		花閃・ア	土器片、石斧未製品	
51号集石			2	2		花閃	土器片	
52号集石			2	2		花閃	土器片、礫石器	
53号集石	70	40	8	8	あり	ア	土器片	
54号集石	92	50	10	10	あり	ア(主)・花・ホ	土器片、石斧	
55号集石	96	82	4	4	あり	花・花閃・ア・デ	土器片	
56号集石			3	3		花閃・ア	土器片、石鏃	
57号集石	120	85	9	9		ア(主)・花閃	土器片、異形石器	
58号集石	370	300	50	50	あり	花閃(主)・ア(主)・ホ・チャ	土器片、鐔形土製品、土製円盤、礫石器	
59号集石	150	50	9	9	あり	砂(主)・花閃	土器片、石製円盤、有孔石製品	

2 洋野町教育委員会調査の概要

平成 26・27 年度に実施された三陸道建設工事に伴う発掘調査の結果、前述のように縄文時代後期初頭～前葉の集落跡、配石遺構群が検出され、なかでも「内帯石列」は環状列石の一部を構成している可能性が想定されることから注目を集めた。この石列が実際に環状列石を構成するかどうかという点は遺跡の位置づけを大きく左右する部分であり、今後の遺跡の適切な管理にも関わる事項でもあるため、洋野町教育委員会では国庫補助金を導入して三陸道調査区北側民有地のハンドボーリング調査を実施し、遺跡の内容確認を図ることとなった。

調査は平成 28（2016）年度に実施され、その成果は洋野町埋蔵文化財調査報告書第 4 集『西平内 I 遺跡ハンドボーリング調査報告書 配石、集石遺構の地中確認調査』として平成 31（2019）年 3 月に発刊された報告書で公表された。以下、報告書記載に即して概要を記載する。

ボーリング調査は鋼鉄製 T 字形ボーリング棒（長 1 m 径 9 mm で先端を尖らせ持ち手側には長 24cm の直交する横棒を溶接したもの）を用いて全て人力で行われた。作業員 10 名前後が一行に並び一定間隔で地中を刺突する作業を繰り返し、地中の礫反応点に目印の杭を設置、電子平板により分布図を作成した。調査対象範囲は当初 20,000㎡を予定していたが、諸条件等により実際は 11,954㎡について実施された。このうち 483㎡は三陸道南側の尾根筋を対象としており、後日岩手県立博物館が行ったボーリング調査対象地区と一部重複する。

調査成果は以下のようにまとめられている。

- ・三陸道調査で検出された弧状石列の延長線上に連続する礫分布が確認され、全体では長軸 30 m 短軸 26 m 規模で楕円形を呈する環状列石が埋没遺存しているものと判断される。
- ・列石に付属するトゲ状の石列と想定される、環状列石中央から放射状の方向を向く礫の直線的な分布が複数箇所確認された。

- ・環状列石南東部に位置する 58 号集石の北東 3 m の地点に、同程度の規模と推定される礫反応の密集地点を確認した。
- ・三陸道南側調査区においても礫反応密集地点を複数確認した。

報告書では上記の調査成果をまとめて、三陸沿岸では初の発見となる環状列石が遺存していると記載された。また、三陸道関連調査において外帯配石墓群と認識された集石遺構の带状分布域については、その延長上に 58 号集石の北東で確認された集石遺構以外に目立った礫反応点がないことから、環状列石を取り囲み北側に環状に巡る可能性は低いとされた。さらに、三陸道南側でも一定の礫反応集合が認められ、南側に広がる段丘平坦面に遺跡範囲が広がる状況が想定されている。

なお、礫反応点の分布状況を見ると、遺跡北側斜面地のうちでは北東側において密度が高い状況が見受けられる。環状列石周囲の遺構分布が均質な同心円状になるものではなく、斜面方向によって変わることを示すと考えられる。

これらの成果を元に、平成 30（2018）年度には西平内 I 遺跡は洋野町史跡として指定された。町では岩手県教育委員会の指導の下、遺跡内容確認、範囲確認を目的とした調査を計画し、令和元年度以降に岩手県立博物館との合同調査を行うこととなった。

このうち令和元年度調査成果については令和 2（2020）年に洋野町埋蔵文化財調査報告書第 9 集『西平内 I 遺跡発掘調査報告書 環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査』として発刊された。

令和元年度調査は環状列石の一部となる可能性が高い地点 3 カ所と、整地層の範囲確認を目的とした調査区 2 カ所を対象とした調査が行われ、想定通りの礫の配列が確認された。

また、整地層は環状列石全体を覆うものではなく、その南半を被覆することも判明した。

令和 2 年度は環状列石東側の外周における掘立柱建物の確認、令和 3・4 年度は環状列石北東部のトゲ状列石の検出、令和 5 年度は列石北側の遺構・遺物分布状況の確認という

目的でそれぞれ調査が行われている。成果はこれまでの経緯等もまとめて、令和6年度に発刊が計画されている調査報告書に掲載の予定である。

IV 調査結果

1 試掘調査

(1) 令和元年度（2019年度）調査

野外調査初年度は洋野町教育委員会と合同で、ボーリング調査結果から推定される環状列石の検出、及び列石上部を覆う整地層の検出確認を目的とした調査を実施した。調査成果の詳細は令和2年3月に洋野町埋蔵文化財調査報告書第9集『西平内I遺跡発掘調査報告書－環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査』として公表済みであるため、ここでは概略のみ記載する。

調査区は列石を横断する位置で3カ所(A・B・Cトレンチ)、整地層の確認を目的として列石西側斜面と中央空白域に各1カ所(D・Eトレンチ)を設定した。調査面積は合計29㎡である。なお、本報告書では調査区名についてAトレンチを19A区等と変更呼称する。

19A・19B・19C区では予想通り環状列石を構成する配置の大小の礫群を確認した。全体として環状列石が残存していることが明らかとなりボーリング調査の結果を裏付けた。使用される礫の石材は花崗岩、花崗斑岩が主である。また被熱痕が観察される礫が含まれる。

整地層の痕跡は19C区で整地層1・2が確認された他、19D区と19E区のいずれも南丘において、第2層黒褐色土層の中に整地層1に由来する可能性がある褐色土が含まれる。

19C区では列石の構築面にあたる第5層黒褐色土層（基本層序Ⅲ層相当）中から炭化材と焼土粒の集中ブロックが検出され、この区域から採取した炭化材6点についてAMS放射性炭素年代測定を実施している。このうち5点の測定結果は町教委発行報告書に掲載さ

れている。残る1点（測定試料番号No.1）は県立博物館が採取、測定を行ったもので本書第IV章4節に測定結果を掲載する。結果は暦年較正年代(1 σ)536～595cal ADの範囲とされ古墳時代後期に相当する。想定される環状列石構築年代との乖離が大きいことから、後年の試料混入等が要因ではないかと考えられる。

(2) 令和2年度（2020年度）調査

〈全体の概要〉

前年度は町教育委員会と合同で三陸道北側を対象とした調査を行い、環状列石の一部の確認に結びつく成果を得た。その継続調査は令和2年度からは町教委が行うこととなり、県立博物館は三陸道南側に同様な遺構分布が見られるかどうかを主な目的として内容確認調査を進めることとなった。

南丘から続く尾根筋においては、先に町教委のボーリング調査で礫反応点が集中する区域を複数認識している。特に密集する尾根東側緩斜面の地点を選択し2つの調査区を設定(20A区、20C区)、また南丘頂部平坦面に1カ所(20B区)、そこから南に続く尾根上平坦面に1カ所(20D区)を設定し、それぞれ掘削を行った。

20A区は3×2.5mの調査区で、単独の礫の散漫な分布が確認された。南西側の一部について基盤のV層まで掘り下げ、基本層序の確認、記録を行っている。

北に隣接する20C区(4×3m)では南半に20-01組石を検出し、下部遺構と推定されるプランも確認した。

南丘に近い20B区(4×1.5m)では単独の礫複数を確認、また土器片の出土が比較的多く見られた。

南側の20D区(4×1.5m)は特に礫や遺物の出土は確認していない。

〈20-01組石〉

20C区南半に所在する。現地表から20cmほどの掘り下げで礫群の上部が露出し、全体は約40cmの掘削で検出された。長さが1m

前後で巨礫と呼べる大きさのS1・S8・S10・S11の4個が概ね東西の軸上に並び、S1とS8・S10の間に中小の亜角礫が充填されている。特にS4～S6は折り重なるような状態で出土した。S1は調査区南西隅にあり全体を露出させていないが、調査区西側ではボーリング調査による礫反応点が本遺構の軸線上にいくつか分布していることから推定しても、本遺構が更に西側に伸びている可能性が高い。なお、南側にS12～S13の小角礫が分布するが、これは本遺構の一部かどうかはやや疑わしい。

規模は少なくとも長軸方向で2.6mで、三陸道南側で確認した組石遺構のうちでは最大規模である。

使用されている礫の石材はS4・S5のホルンフェルス、S12の流紋岩を除くと花崗岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩が主となっており、S1花崗岩の表面には被熱痕が観察される。

本遺構の北側礫接地面はⅢ層褐色土が広がるが、S11に隣接してⅡ層黒色土が落ち込むプランを検出した。礫の直下は掘り下げていないため不確実な部分を残すものの、S8・S11を囲むような状態で楕円形に近い掘り込みプランの一部とみられるため、組石下の土坑の可能性が高いと想定している。

(3) 令和3年度(2021年度)調査

〈全体の概要〉

3年目となる調査は三陸道南側尾根の北西斜面を対象として選択した。前年度のボーリング調査では尾根頂部(南丘)から北～北西斜面にかけてまとまった礫反応点を確認しており、特に標高61～63m付近に礫反応点が集中する区域中心部に調査区(21A区)を設定し掘削することとした。

調査区は8×5m規模で東西方向の長方形に設定し、全体を平均20cm程掘り下げた結果、合計11基の組石遺構、単独で所在する礫複数、土器集中2カ所を検出した。組石遺構の分布は調査区全体に広がり、斜面上部にあたる南東側に大きめの組石遺構がみられる。また、組石遺構が確認された場所は礫反

応点とほぼ一致し、ハンドボーリング調査の有効性を改めて裏付けた形となる。

遺物は調査区西側に土器出土が多めにみられ、特に大破片やその場でつぶれた状態の土器片が含まれる。

また、調査区西側の斜面に旧道と推定される段差と法面が北東～南西方向に伸びており、この落ち際において基本土層確認用の調査区を設定、1m四方ほど掘削し土層記録を行った。この地点での土層堆積状況は上位から木根が繁茂する現表土I a層、表土下半の黒褐色土I b層、To-Nb粒を含む黒褐色土Ⅱ層、To-Nb粒を含む褐色土Ⅲ層、黒褐色土Ⅳ層、To-H粒を含む褐色土Ⅴ層の順に分層される。概ね斜面の傾斜に沿った堆積状況だが、Ⅱ層以下には旧道の掘削が及んでいることが読み取れる。

〈21-01組石〉

21A区南東隅付近に所在する。現地表から10cmほどの掘り下げで礫群の上部が露出し、全体は約30cmの掘削で検出された。13個の礫で構成されこのうちS4～S12が楕円形範囲にまとまり主要部とみられる。西側に離れたS1～S3、南東側にS13がある。主要部は外側をS4・S7・S10・S12の角礫で口の字状に囲み、内部にS8・S9の扁平な亜円礫が配置される。規模は全体でみると1.4×1.0m程度となるが、主要部分は0.9×0.6mの大きさである。

使用されている礫の石材は花崗閃緑斑岩、花崗閃緑岩、花崗岩が主で、S11のアプライトを含む。S10では被熱変色部分が観察される。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-02組石〉

21A区北東隅付近にあり21-03組石と近接する。地表から10cmほどの掘削で確認した。S1～S6の亜角礫6個が楕円形範囲にまとまる。21-01組石とはことなり方形の石囲とはならず同程度の大きさの礫を集めたような状態である。規模は北西～南東の長軸方向で0.9m、直交する短軸方向で0.6m程度。

使用されている礫の石材は花崗岩、花崗閃緑岩で、S2には被熱痕が観察される。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-03 組石〉

21A 区東側で、21-01、21-02 組石の中間付近に所在する。これも 10cm ほどの掘り下げで礫群の上部が露出し、全体は約 30cm の掘削で検出された。大小あわせて 9 個の礫からなり、円形に集中させている。このうち北西～南東に並ぶ S1・S5・S6 の 3 個がやや大きめの角礫で、他はその隙間に密接する状態となっている。

規模は 0.7 × 0.6 m 程度で、使用されている礫の石材は S5 のアプライト以外は全て花崗岩である。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-04 組石〉

21A 区東側に位置し、21-01、21-03 組石に近接する。21-03 組石との間には切り株があり、抜根、掘り下げを行っていないことから、北東側は未確認の礫が隣接する可能性を含む。

組石は 5 個の亜角礫を小範囲に集中させた状態で、S1 以外は礫のサイズも小さい。全体の規模は約 0.4 m 四方程度。礫の石材は砂岩、アプライト、花崗岩がみられる。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-05 組石〉

21A 区中央部南側に所在する。21-01 組石、21-04 組石と 21-06 組石の中間にあり、礫 4 個がやや散漫に分布する。他と異なり、人為的に礫を配置した状態と判断し難い面もあるが、組石遺構の一種として記録した。1 m 近い S1 亜角礫と S2・S3 の扁平な円礫、S4 の亜角礫が 1.2 × 0.7 m の範囲に並ぶ。使用されている礫の石材は花崗閃緑斑岩、花崗岩、デイサイトである。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-06 組石〉

21A 区中央部南側にあり、東側で 21-05

組石、西側で 21-08 組石に近接する。合計 7 個の礫を石囲状に配置した状態である。地表から 20cm ほどの掘り下げで確認した。

斜面方向に沿った北西～南東に細長い楕円形状に礫が囲み、両端に S3・S6、側縁に S4・S7 が配置される。規模は 0.8 × 0.6 m 程度。

使用されている礫の石材は S1・S2 がホルンフェルス、他は花崗岩・花崗閃緑岩である。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-07 組石〉

21A 区南西部の調査区際にあり、南側は未掘削部分に伸びるため全体形状はわからない。隣接する 22A 区を 2022 年度に調査したが、手違いによりこの組石南側の確認には至らなかった。北側に 21-08 組石が近接する。地表から 20cm 程掘り下げた面で 3 個の礫を確認し、それぞれ密接する状態であったため組石遺構の一部と判断した。大きさ 20～30cm 程の亜角礫 3 個が約 50cm 程度の範囲に集まる。

使用されている礫の石材はアプライト、砂岩、花崗閃緑岩と一様ではない。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-08 組石〉

21A 区南東部に位置し、南東側に 21-06 組石、南西側に 21-07 組石、さらに北西側に 21-10 組石が近接する。大きめの亜角礫 3 個が 0.6 m 程の範囲に集まる状態だが、隣接する切り株部分に広がる可能性もある。S1 は S3 に乗りかかる状態となっており、S3 が更に斜めに深く埋没しているかも知れない。使用されている礫は 3 個ともアプライトで、花崗岩、花崗閃緑岩は含まれない。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-09 組石〉

21A 区西端に位置する。礫 2 個が距離を置いたもので、80cm ほど離れているため一体として組石と捉えられるかどうか、やや微妙である。また西側の S1 は調査区境にあり、更に外側に関連する礫が分布する可能性も考

えられる。S1はアプライト、S2は花崗閃緑岩の亜角礫。なお、この周囲には土器片が複数散在し、礫に密接したものも含まれる。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-10 組石〉

21A区西側に位置し、南東側に21-08組石、南西側に21-09組石が所在する。調査区東側の21-03組石等と同様に小範囲に一定の大きさの礫が集中する状態で検出された。西側にS7がやや間隔をあける。S1～S6は20～40cm程度の角礫、亜角礫で、約0.6m四方の範囲に集まる。また隣接する切り株部分に更に未確認の礫が分布する可能性もある。

使用されている礫の石材S3の流紋岩、S7のアプライト以外花崗岩、花崗閃緑岩が使われている。組石下位の遺構有無は不明である。

〈21-11 組石〉

21A区北西部にあり調査区北壁に接する位置にある。南側の切り株を挟み礫3、土器集中2が検出されている。30cm程の角礫が2個近接しており組石遺構の可能性があると捉えられた。なお北側は調査区外に礫分布拡大の可能性もある。

2個の礫は花崗岩で、15cm程度の間隔をあける。組石下位の遺構有無は不明である。

(4) 令和4年度(2022年度)調査

〈全体の概要〉

前年度に実施したトレンチ(21A区)の調査において合計11基の組石遺構が検出され、三陸道南側エリアの北西斜面においても、組石遺構が一定以上の密度で分布する状況と捉えられた。これらの分布域が21A区調査区を中心とした局所的なものか、あるいはいずれかの方向に分布範囲が拡大するのか、といった点の把握を目的として、21A区の南側に隣接したエリアに新規に13×25mのトレンチ調査区(22A区)を設定し調査を行った。

地表面からのボーリング調査でこの区域で

は4点の礫反応点を確認していたが、掘削の結果、複数の礫で構成される組石はトレンチ東西端付近に2基(22-01組石・22-02組石)、他に単独で埋没する礫4個(礫5～8)がトレンチ東側に偏在する状態で検出された。

掘削の深さは20～30cm程で、I層下位のII層黒褐色土中に礫の上部が見え始め、全体をIII層褐色土上面まで掘り下げた段階では礫上半が露出、礫下半は埋まっている状態である。

続いて、21A区の西側斜面で同様に礫反応点を確認した地点を中心に、組石検出用の小規模な調査区を3カ所設定し掘り下げた。それぞれ2×1m程度の規模である。その結果、21A区に隣接する22B区では22-03組石、22A区の西側延長線上で旧道法面落ち際に設定した22C区からは22-04組石、また22D区では22-05組石を検出し、それぞれ全体を露出させ記録した。なお、22D区は前年度に基本土層確認用に掘削した地点の南西側に隣接する。

〈22-01 組石〉

22A区東端に近い位置に所在する。現地表から10cmほど掘り下げた段階で、やや扁平な2個の角礫が近接している状態で検出した。規模は48×24cm。北東～南西方向で礫が近接する。なお、北西側には単独で出土した礫5～7が散在する。

使用されている礫の石材はいずれも花崗岩である。組石下位の遺構有無は不明である。

〈22-02 組石〉

22A区の西端に近い位置にあり、現地表下10～15cmで礫群上部が露出し、30cmほど掘り下げた段階で全体が検出された。S1～S5の5個の亜角礫が集中し、S6の亜円礫のみやや離れる。礫の集中は北東～南西方向に軸を持つ細長い範囲に連なり、規模は88×72cm。棒状の角礫、亜角礫が主に用いられ、このうちS4は上部が突出する立体的な礫である。

使用されている礫の石材は花崗岩に加え、花崗閃緑岩、花崗斑岩、ホルンフェルスを含む。組石下位の遺構有無は不明である。

〈22-03 組石〉

現地表下約 10～15cm で礫の上部が露出し全体は 30～40cm 程を掘り下げた。大きめの垂角礫が 4 個、斜面下方にあたる北西側が開く C 字状に配置された状態である。規模は長軸 1 m、短軸 0.6 m で礫の間隔は広い。

使用されている礫の石材は花崗岩を主として花崗閃緑岩を含む。組石下位の遺構有無は不明である。

〈22-04 組石〉

北西に向かい下る斜面に位置し、現地表下約 20cm で上部にある S1 が露出し、全体は約 50cm の掘り下げで検出された。扁平な角礫 7 個が重なり合うように、北西-南東の斜面方向に沿って細長く集中する。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.7 m。S1 が S4 の上に、また

S6 が S7 の上に接して重なる状態となっており、元は S1・S6 は仕切り板のように直立させて設置されたものかもしれない。

礫の石材は全て花崗岩が用いられる。組石下位の遺構有無は不明である。

〈22-05 組石〉

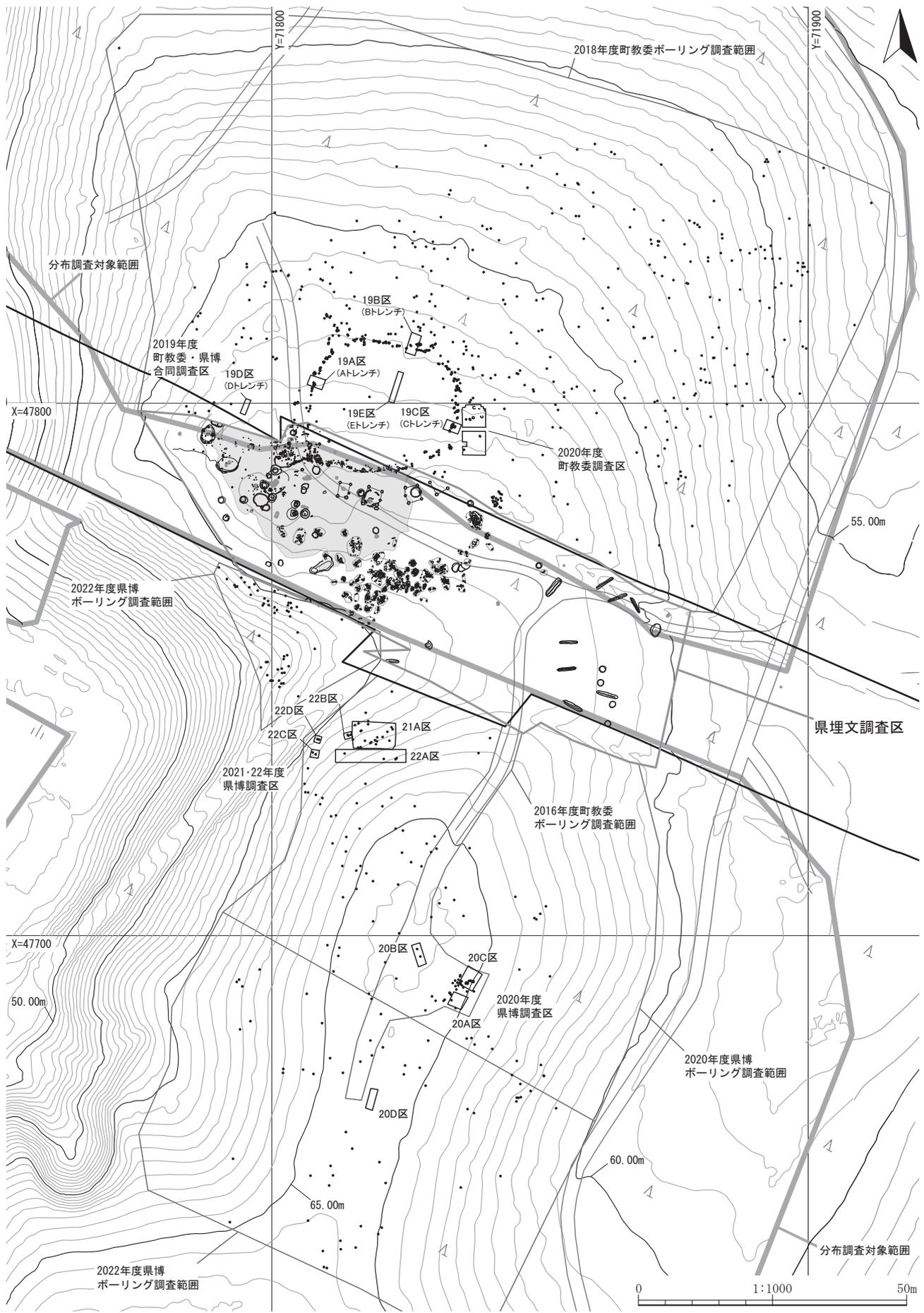
現地表下約 10cm で全体が検出された。長楕円形や棒状角礫等 7 個が口の字状に組み合わされた形状である。規模は長軸 1.2、短軸 0.8 m で全体が斜面傾斜と同じく北西側に向かって傾斜する。斜面上方にあたる南東側では長 50cm の扁平礫 (S3) が仕切り状に立てかけられ、口の字内部には扁平礫 (S5) が配置される。北西側に突出する長楕円礫 (S8) は上部が現地表面上に露出していたもので、旧道法面の掘削時に原位置から移動した可能性がある。

使用されている礫の石材は花崗岩を主として花崗閃緑岩を含む。組石下位の遺構有無は不明である。

表 3 調査区名・遺構名整理

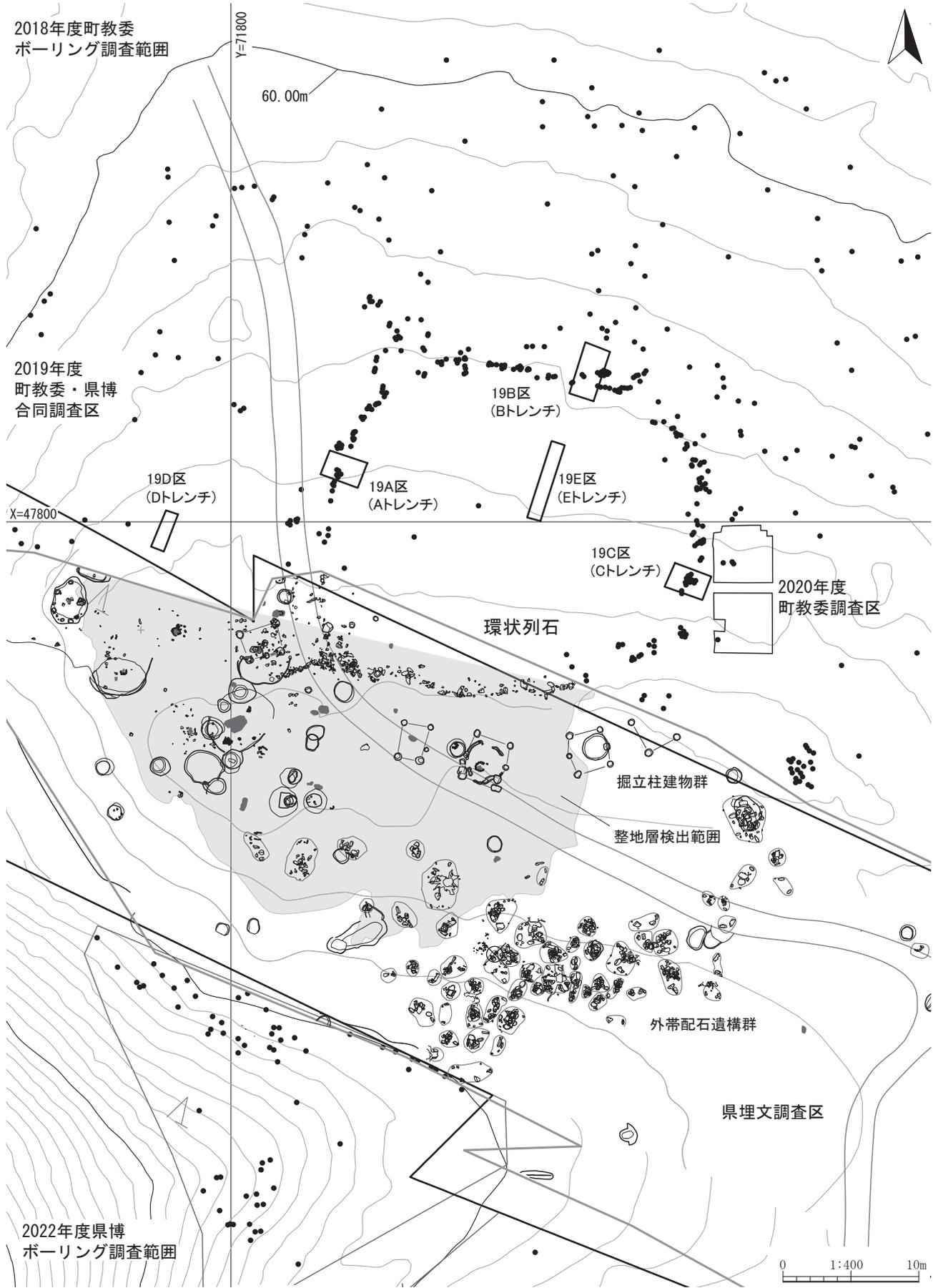
調査年度	現場名称	調査区名(改訂)	規模(m)
2019	Aトレンチ	19A区	3×2
	Bトレンチ	19B区	4×2
	Cトレンチ	19C区	3×2
	Dトレンチ	19D区	4×1
	Eトレンチ	19E区	5×1
2020	Aトレンチ	20A区	3×3
	Bトレンチ	20B区	4×1
	Cトレンチ	20C区	4×3
	Dトレンチ	20D区	4×1
2021	調査区	21A区	8×5
2022	21年度南隣接区	22A区	13×2.5
	14号集石トレンチ	22B区	2×1
	15号集石トレンチ	22C区	1.5×1.5
	16号集石トレンチ	22D区	1.5×1.5

調査年度	現場名称	遺構名(改訂)	調査区
2020	Cトレンチ集石	20-01組石	20C区
	Cトレンチ土坑	20-01土坑	20C区
2021	1号集石	21-01組石	21A区
	2号集石	21-02組石	21A区
	3号集石	21-03組石	21A区
	4号集石	21-04組石	21A区
	5号集石	21-05組石	21A区
	6号集石	21-06組石	21A区
	7号集石	21-07組石	21A区
	8号集石	21-08組石	21A区
	9号集石	21-09組石	21A区
	10号集石	21-10組石	21A区
	11号集石	21-11組石	21A区
2022	12号集石	22-01組石	22A区
	13号集石	22-02組石	22A区
	14号集石	22-03組石	22B区
	15号集石	22-04組石	22C区
	16号集石	22-05組石	22D区

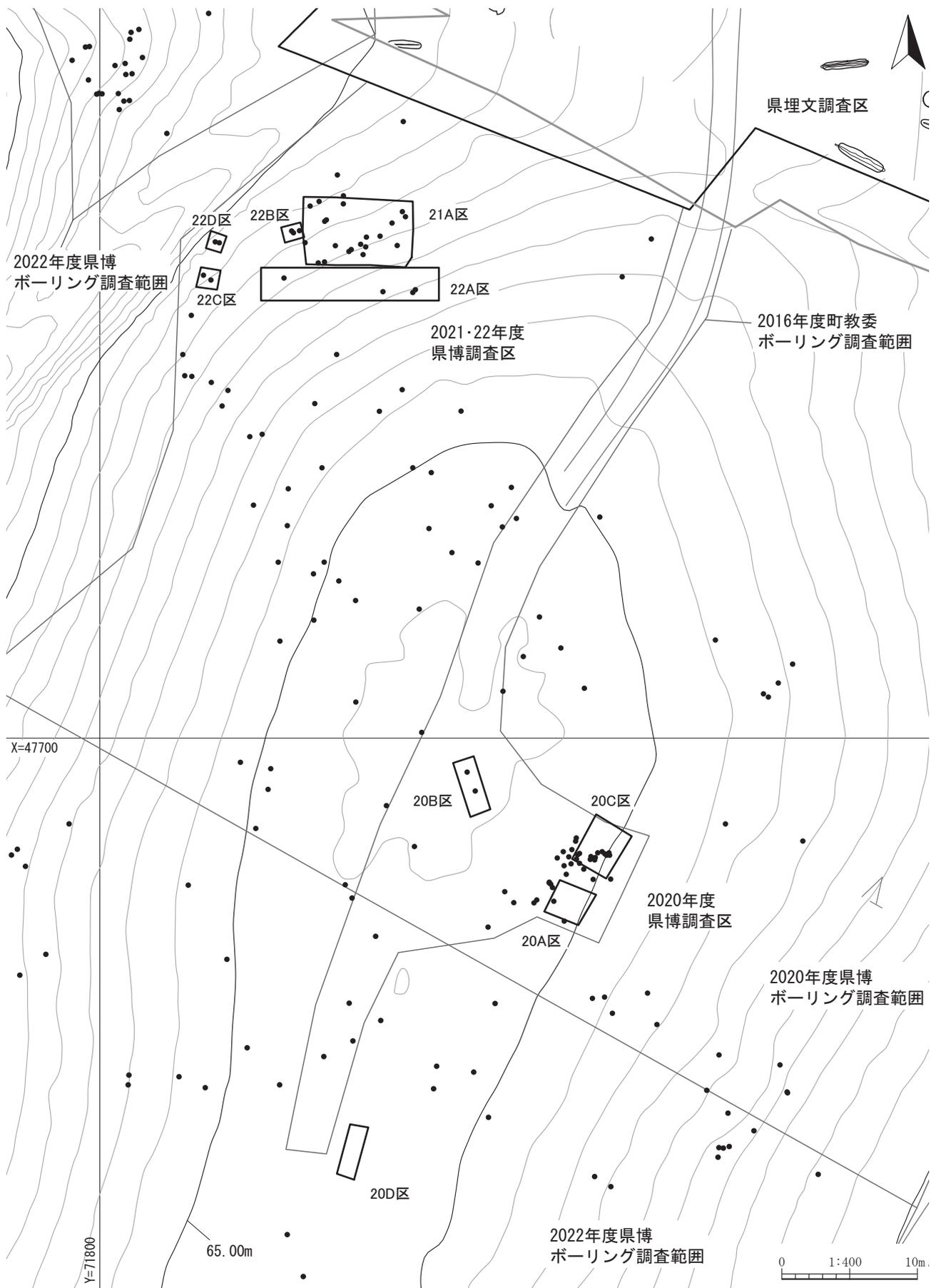


第7図 調査区全体図

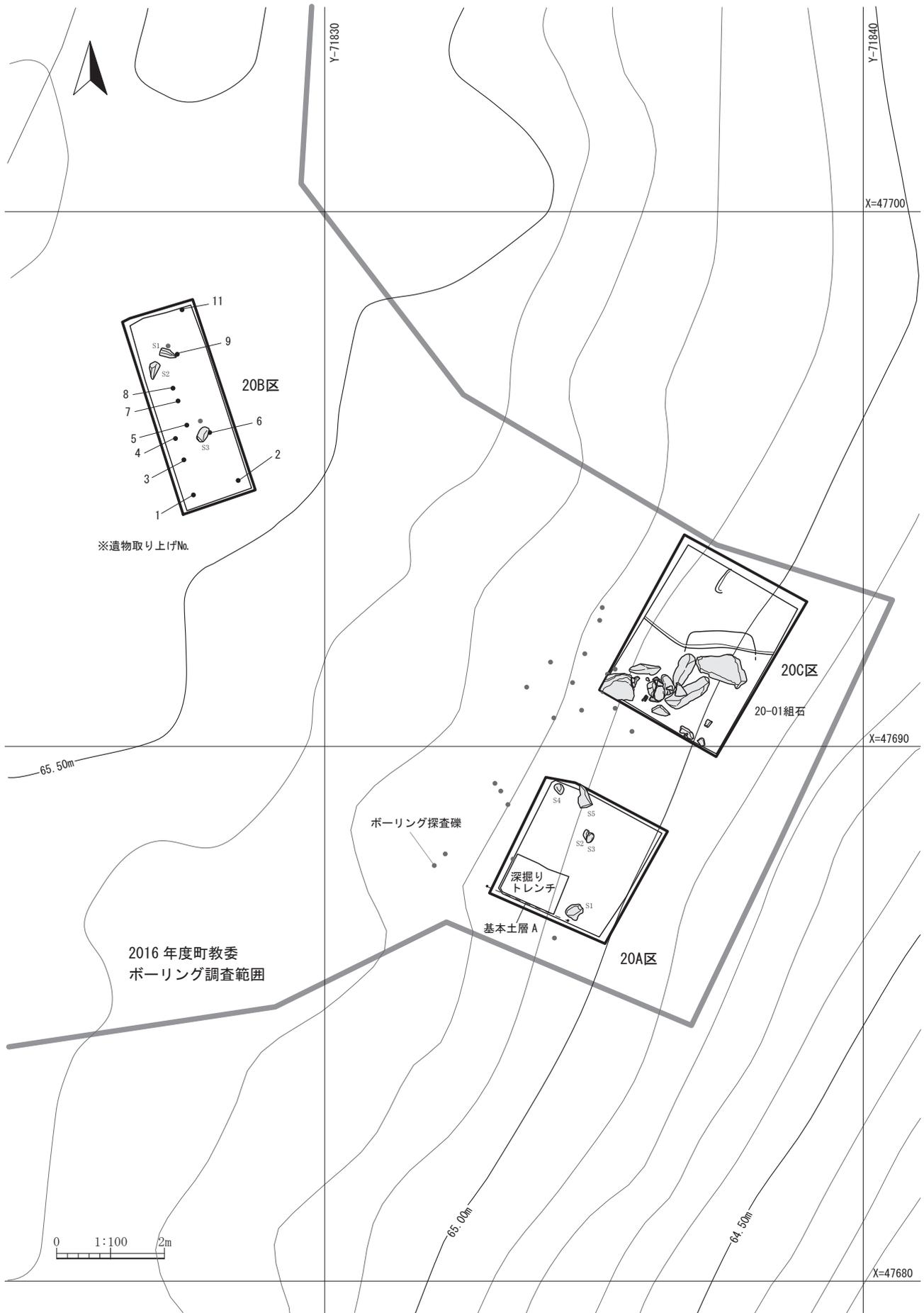
※ドットはボーリング調査の礫反応点



第8図 調査区北半全体図

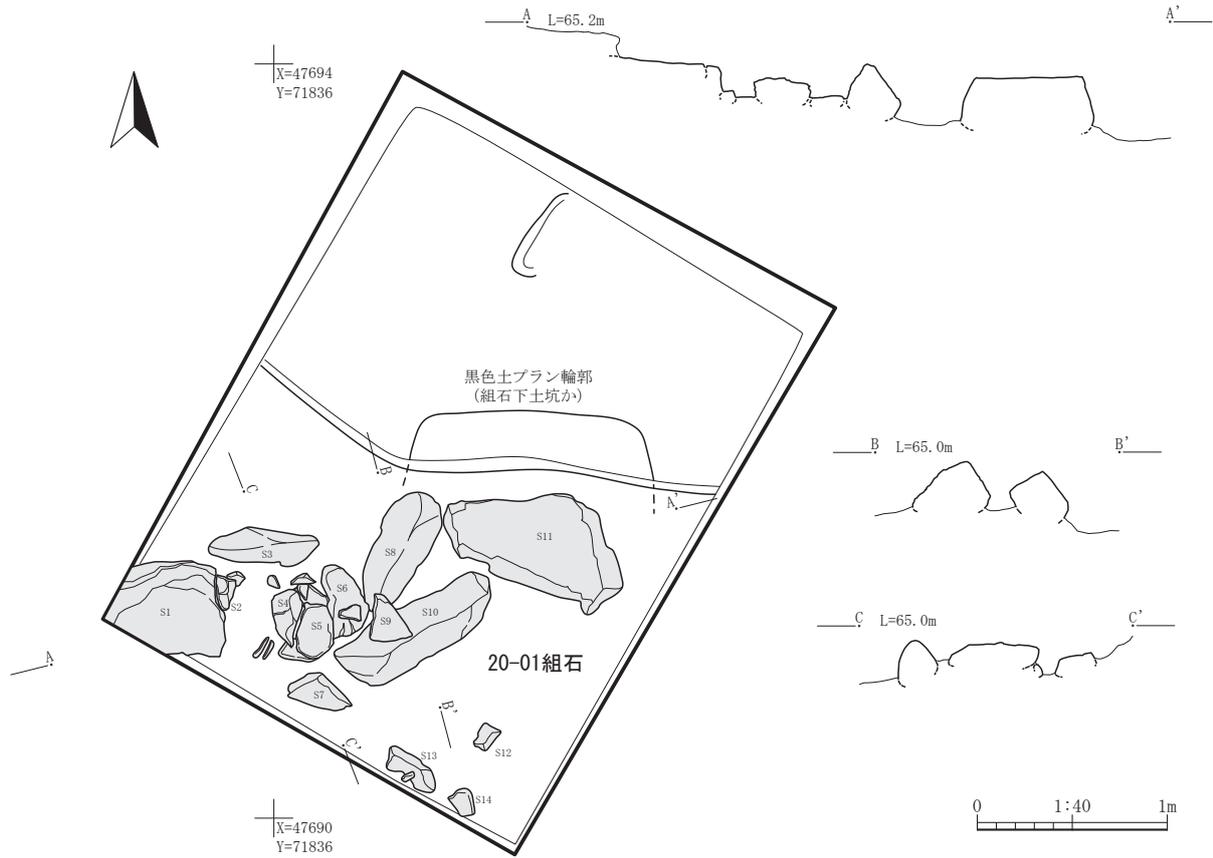


第9図 調査区南半全体図

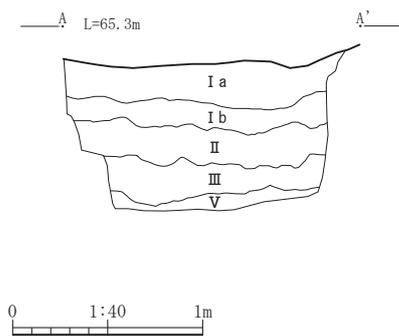


第10図 2020年度調査区(1)

20C区(R2トレンチC)



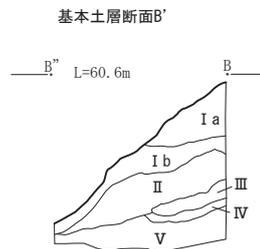
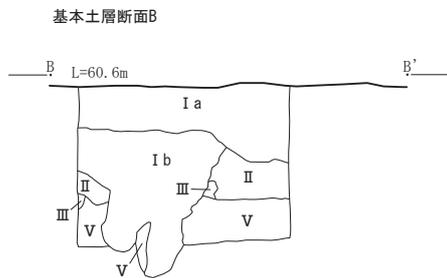
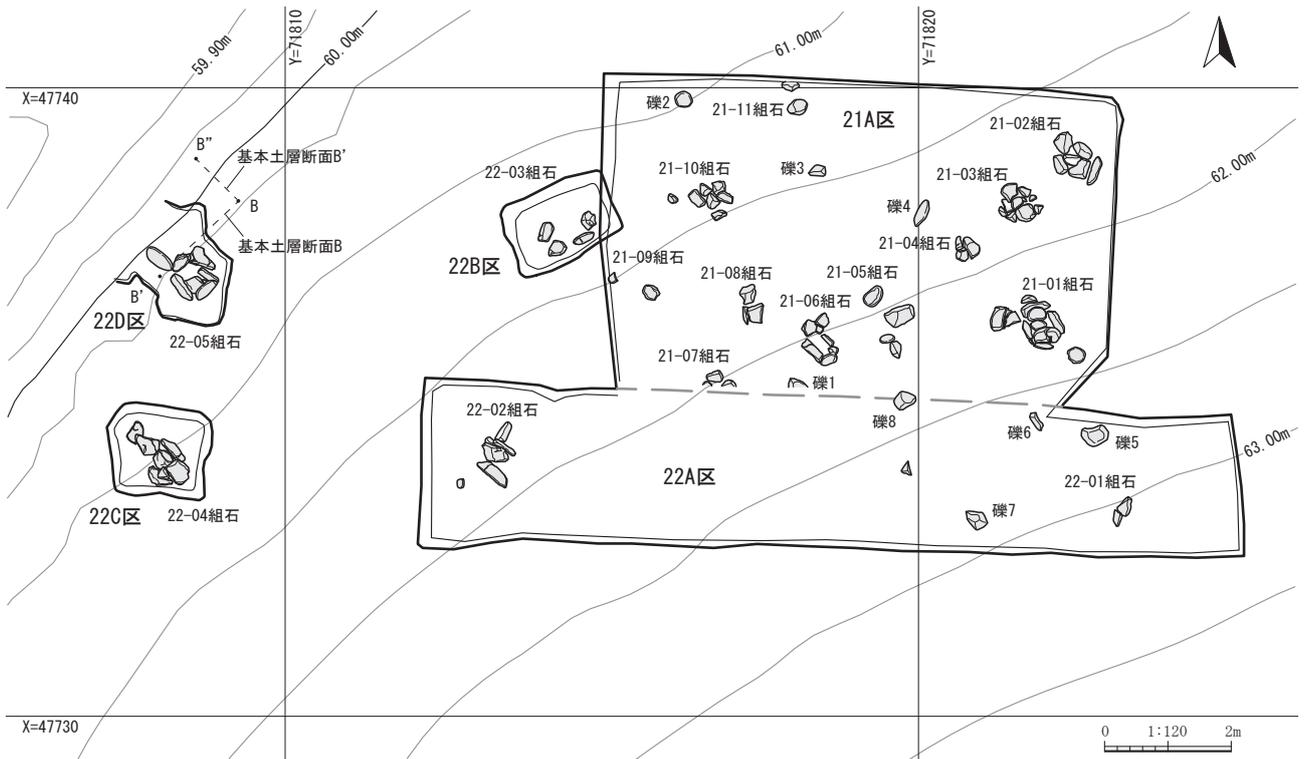
基本土層断面A (20A区南西壁面)



基本土層

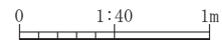
- I a 黒褐色シルト 10YR2/2 木根多 しまり微
- I b 黒褐色シルト 10YR2/2 しまり弱
- II 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中 To-Nb粒1%
- III 褐色シルト 10YR4/4 しまり強 To-Nb粒3%
- V 褐色シルト 10YR4/6 しまり強 To-H粒10%

第11図 2020年度調査区(2)

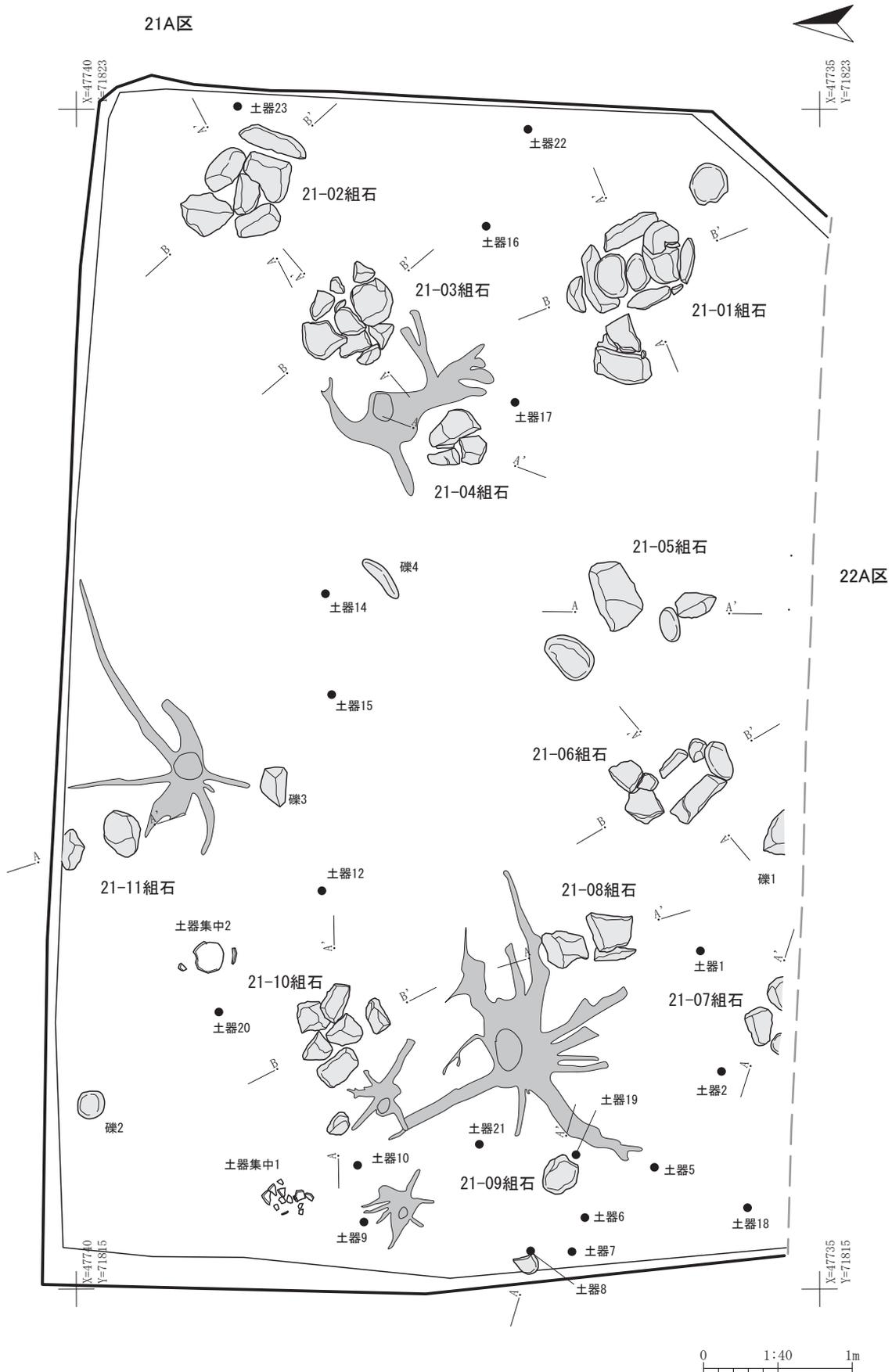


基本土層

- I a 黒褐色シルト 10YR2/2 木根多しまり微
- I b 黒褐色シルト 10YR2/2 しまり弱
- II 黒褐色シルト 10YR2/3 しまり中 To-Nb粒1%
- III 褐色シルト 10YR4/4 しまり強 To-Nb粒3%
- IV 黒褐色シルト 10YR2/2 しまり強
- V 褐色シルト 10YR4/6 しまり強 To-H粒10%

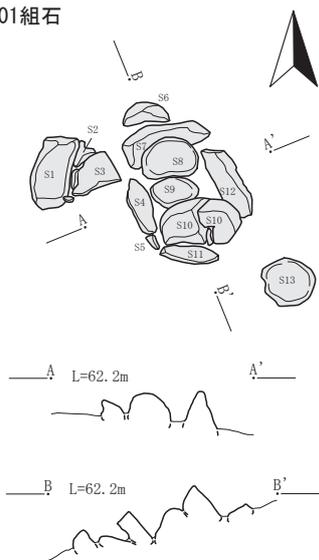


第12図 2021・22年度調査区

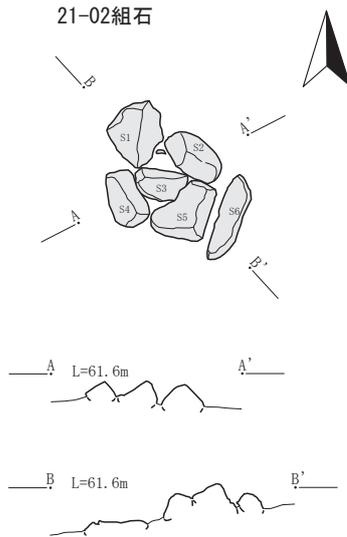


第13図 2021年度調査区(1)

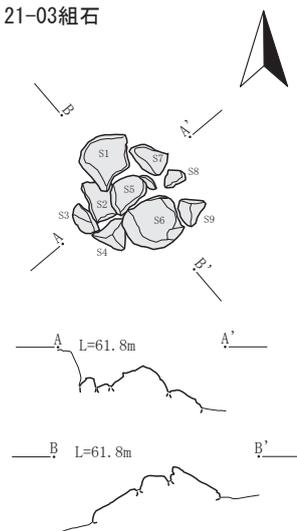
21-01組石



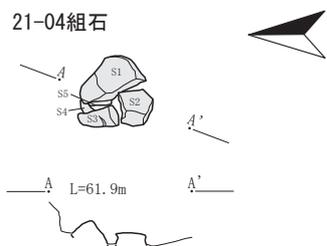
21-02組石



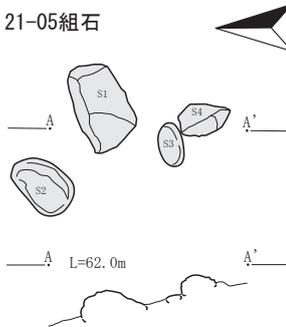
21-03組石



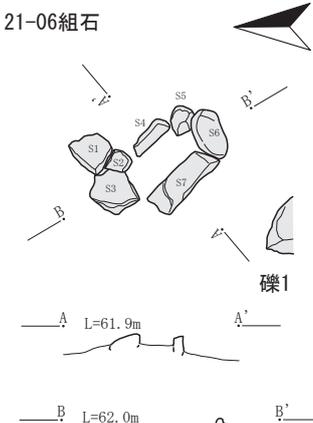
21-04組石



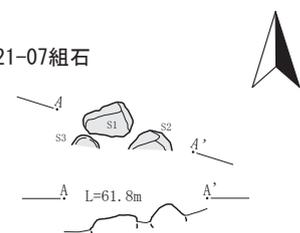
21-05組石



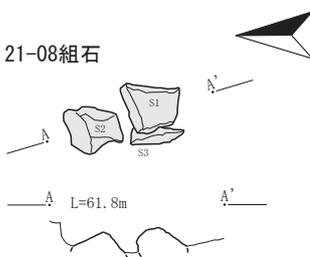
21-06組石



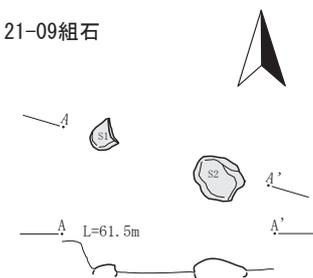
21-07組石



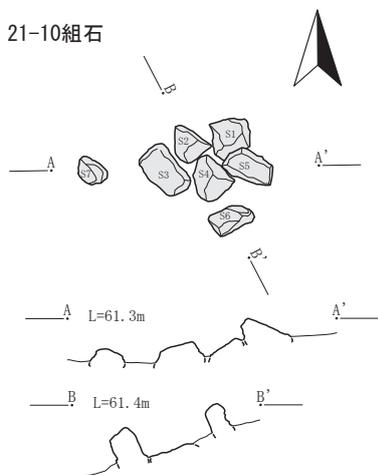
21-08組石



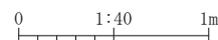
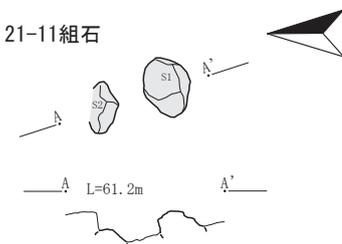
21-09組石



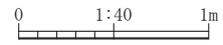
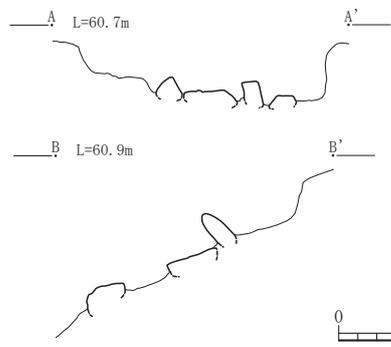
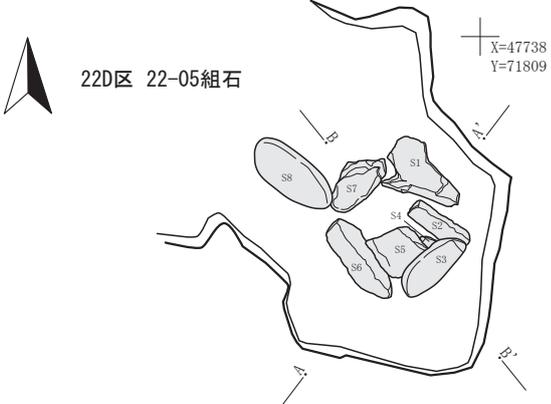
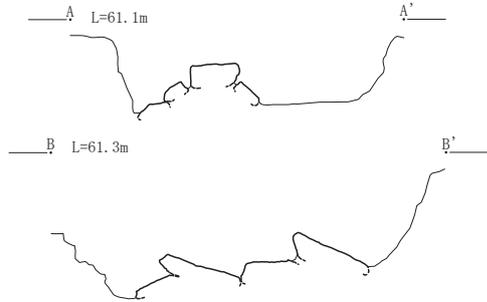
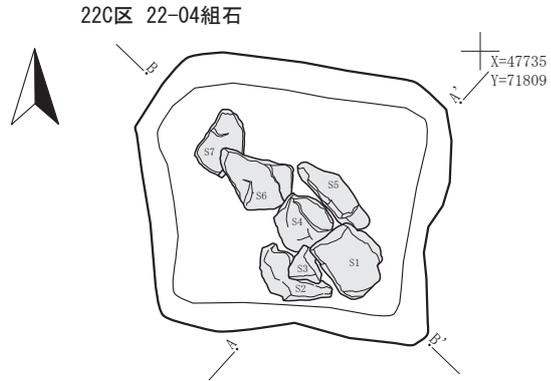
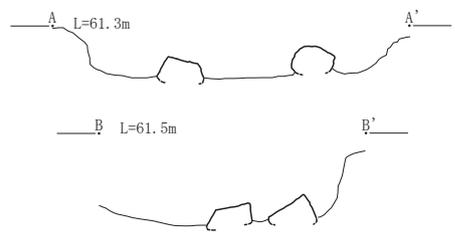
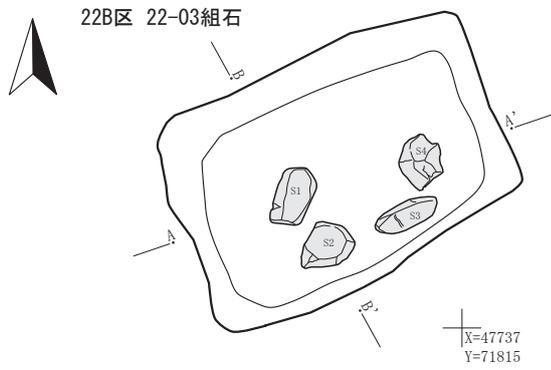
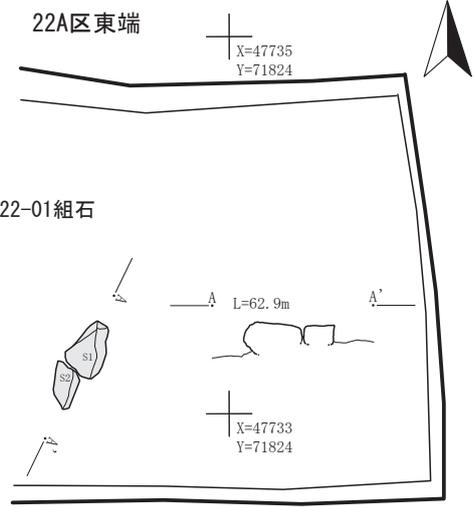
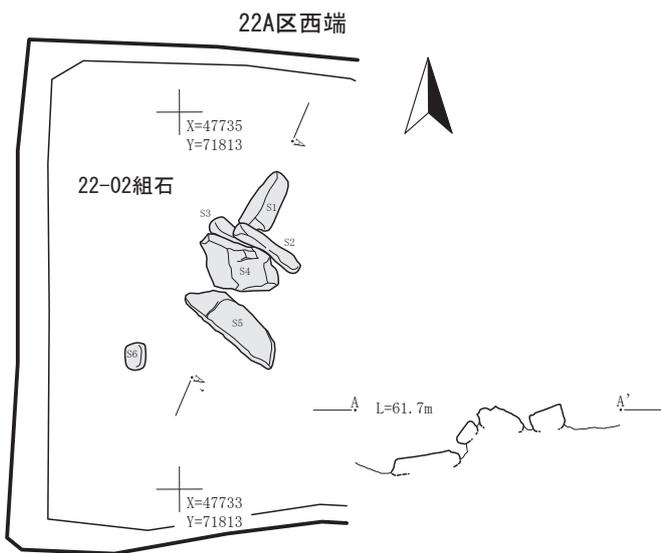
21-10組石



21-11組石



第14図 2021年度調査区(2)



第15図 2022年度調査区

表4 県博調査区組石一覧

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	礫総数	主要構成礫数	下部土坑	配石墓	備考
20-1 組石	260	100	20	10	あり	可能性あり	
21-1 組石	140	100	13	8	不明		
21-2 組石	92	60	6	6	不明		
21-3 組石	72	60	9	9	不明		
21-4 組石	44	40	5	3	不明		
21-5 組石	120	72	4	4	不明		礫散在
21-6 組石	80	60	7	7	不明		
21-7 組石	52	24	3	3	不明		半分調査区外
21-8 組石	60	36	3	3	不明		
21-9 組石	90	26	1	1	不明		一部調査区外か
21-10 組石	100	60	7	7	不明		
21-11 組石	60	32	2	2	不明		一部調査区外
22-01 組石	48	24	2	2	不明		
22-02 組石	88	72	6	5	不明		
22-03 組石	96	56	4	4	不明		
22-04 組石	120	68	7	7	不明		
22-05 組石	120	80	8	7	不明		

表5 県博調査区組石石材一覧

遺構名	礫番号	石材	備考	遺構名	礫番号	石材	備考		
21-1 組石	S1	花崗閃緑岩	被熱痕あり	21-7 組石	S1	アブライト			
	S2	花崗閃緑岩			S2	砂岩			
	S3	花崗岩			S3	花崗閃緑岩			
	S4	ホルンフェルス		21-8 組石	S1	アブライト			
	S5	ホルンフェルス			S2	アブライト			
	S6	花崗斑岩			S3	アブライト			
	S7	花崗斑岩		21-9 組石	S1	アブライト			
	S8	花崗閃緑岩			S2	花崗閃緑岩			
	S9	花崗斑岩		21-10 組石	S1	花崗閃緑岩			
	S10	花崗閃緑岩			S2	花崗閃緑岩			
	S11	花崗斑岩			S3	流紋岩			
	S12	流紋岩			S4	花崗閃緑岩			
	S13	花崗岩			S5	花崗閃緑岩			
	S14	花崗岩			S6	花崗岩			
S7	アブライト	21-11 組石	S1		花崗岩				
S12	花崗閃緑斑岩		S2	花崗岩					
20A 区	S1	花崗斑岩		21A 区	礫 1	アブライト	被熱痕可能性あり		
	S2	花崗岩			礫 2	花崗閃緑斑岩			
	S3	花崗岩			礫 3	アブライト			
	S4	花崗岩			礫 4	ホルンフェルス			
	S5	花崗斑岩		22-1 組石	S1	花崗岩			
S1	花崗閃緑斑岩	S2	花崗岩		被熱痕あり				
20B 区	S1	花崗斑岩		22-2 組石	S1	花崗岩			
	S2	花崗斑岩			S2	花崗閃緑岩			
	S3	花崗斑岩			S3	花崗斑岩			
21-1 組石	S1	花崗閃緑斑岩			S4	ホルンフェルス			
	S2	花崗閃緑斑岩			S5	花崗岩			
	S3	花崗閃緑斑岩			S6	花崗岩		被熱痕可能性あり	
	S4	花崗閃緑斑岩		22-3 組石	S1	花崗岩			
	S5	花崗閃緑斑岩			S2	花崗岩		被熱痕あり	
	S6	花崗閃緑岩			S3	花崗斑岩			
	S7	花崗閃緑斑岩			S4	花崗閃緑岩			
	S8	花崗閃緑岩		22-4 組石	S1	花崗岩	被熱痕あり		
	S9	花崗閃緑岩			S2	花崗岩			
	S10	花崗岩			被熱痕あり	S3		花崗斑岩	
	S11	アブライト		22-5 組石	S1	花崗岩			
	S12	花崗閃緑斑岩			S2	花崗岩			
	S13	花崗岩			S3	花崗閃緑岩			
21-2 組石	S1	花崗岩	被熱痕あり	S4	花崗岩				
	S2	花崗岩		S5	花崗岩				
	S3	花崗岩		S6	花崗岩				
	S4	花崗岩		S7	花崗岩				
	S5	花崗閃緑岩		22A 区	礫 5	花崗岩			
	S6	花崗閃緑岩			礫 6	花崗岩			
21-3 組石	S1	花崗岩	ベグマタイト貫入	礫 7	花崗斑岩	弱変成			
	S2	花崗岩		礫 8	チャート				
	S3	花崗岩		21-4 組石	S1		砂岩		
	S4	花崗岩			S2		アブライト		
	S5	アブライト			S3		アブライト		
	S6	花崗岩			S4		花崗岩		
	S7	花崗岩			S5		砂岩		
	S8	花崗岩			21-5 組石		S1		花崗閃緑斑岩
	S9	花崗岩				S2	花崗閃緑岩		
21-4 組石	S1	砂岩	S3			デイサイト			
	S2	アブライト	S4			花崗岩			
	S3	アブライト	21-6 組石	S1	ホルンフェルス				
	S4	花崗岩		S2	ホルンフェルス				
	S5	砂岩		S3	花崗閃緑斑岩				
	21-5 組石	S1		花崗閃緑斑岩	S4			花崗岩	
		S2		花崗閃緑岩	S5			花崗岩	
S3		デイサイト		S6	花崗閃緑岩				
S4		花崗岩		S7	花崗岩		被熱痕あり		
21-6 組石	S1	ホルンフェルス	被熱痕あり						
	S2	ホルンフェルス							
	S3	花崗閃緑斑岩							
	S4	花崗岩							
	S5	花崗岩							
	S6	花崗閃緑岩							
	S7	花崗岩							

2 ハンドボーリング調査

(1) 令和2年度(2020年度)調査

平成28(2016)年度に、三陸道北側一体の区域を対象として洋野町教育委員会が実施したハンドボーリング調査の成果を踏まえ、同じ方法で三陸道南側の尾根筋一体での礫分布を確認する目的で実施したものである。

調査は3日間、8名体制で実施し、合計約3,000㎡を対象として行った。調査方法は町教育委員会の調査と同じく、鋼鉄製ボーリング棒を使用し、複数名が一行に並んで一歩ずつ地中を刺突し礫反応を確認するというものである。確認した礫反応点には木杭を打設し、電子平板測量によって座標値を記録した。なお、刺突の間隔は前後左右ともに概ね0.5m程度としているが、木根や立木により厳密な配置とはなっていない。

対象として選択したのは、三陸道南側の標高65.6mを最高地点とする「南丘」の周囲と、そこから北に延びる緩い尾根筋の両側に広がる東西の緩斜面である。尾根筋には営林用の作業道があり、この周辺を含む483㎡は既に平成28年度の町教委ボーリング調査が行われていたため、この外側を対象として実施した。

結果は第7～9図に示すように中央の南丘頂部平坦面を中心として、一部東西の斜面地に礫反応点が分布する。特に今年度の20A区、20C区の周辺に礫反応点が集中すること、そこから南東側の斜面に礫分布が伸びており、上部平坦面からの礫の転落等に起因する可能性が想定されること、南丘頂部平坦面の北西側斜面地に礫反応点分布が拡大しており、特に標高61～62m付近に礫集中域が確認されること、北東斜面と西斜面は希薄となること等が判明した。

これらのうち、北西斜面の礫集中区域は次年度の令和3年度(2021年度)に実際に調査区を設定して掘削調査を行い、複数の組石遺構を検出している。

一方、これらの分布では三陸道北側で明らかとなったような環状列石は確認できず、また、三陸道調査区外帯配石遺構群のような密集域の存在も指摘できない。

(2) 令和3年度(2021年度)調査

三陸道南側調査の2年目は主に21A区の掘削を中心として調査作業を行ったが、これと平行して前年度に礫反応点分布を確認した北西斜面裾の周囲を拡大して、谷頭部分を中心に予備的なボーリング調査を3名体制で1日間実施した。

この結果、三陸道用地境界に沿った北西部の斜面地にも礫反応点を確認されることが判明し、次年度に改めて集中的にボーリング調査を行うこととした。

(3) 令和4年度(2022年度)調査

3年目は令和2年度のボーリング調査対象範囲に隣接する、南丘から南側に伸びる尾根筋とその東西両側斜面地の4,370㎡と、三陸道用地に接する500㎡の合計4,870㎡を対象として実施した。調査は6日間、8名体制、調査方法は令和2・3年度と同一である。

尾根筋の調査対象区は、令和2年度の終了ラインから更に南に延長したエリアである。東西の斜面両側末端は明らかに礫反応が希薄となったため、東側は緩い谷部に接続する傾斜変換線付近、西側は渋谷川に落ち込む急崖の落ち際傾斜変換線までを目安としている。

結果は、尾根頂部平坦面では北半とほぼ同等の密度で散漫な礫反応点の分布を把握した。一方、斜面部では局所的に礫反応点複数が集まる場所があるものの、南に向かうにつれて希薄となり、ほぼ礫反応も得られなくなるという状況を確認した。

三陸道用地に接する西側斜面地は、前年度に礫反応点の分布を確認したことから、追加して調査対象範囲とした。この区域は直下の渋谷川沿いの低地から比高差12～15mの急崖を隔てた傾斜地で、浅い谷地形の谷頭に相当する。南東部の旧道による掘削地形境界から、北側の三陸道用地境界に挟まれた三角形の対象範囲である。

この区域では予想以上に濃密な礫反応点の分布が確認され、かつそれらは南北2カ所にまとまりを見せる。北側の集中区域は三陸道用地境界に沿って東西に帯状に連なってお

り、平面分布は三陸道調査区の外帯配石墓群から西側に続いた状態と見受けられる。礫反応点が複数近接してまとまりを見せることから、同様の組石遺構群の存在が推測される。ただしこれらが立地する場所は現在の地表面で傾斜約 20～25 度に達する斜面地であり、三陸道調査区と同様な配石墓群が構築された場所かどうかという点では、やや疑問も残る。今回は掘削による調査を行っていないため、現時点では確定的なことは言えない。

南側の集中区域は谷頭から南側の斜面にかけて局所的にまとまり、5～6m 四方ほどの範囲に集中する。北側と同様の傾斜地に分布することから、原位置を留めた組石遺構が存在するかどうかは判断し難い。この区域の礫集中について第 VI 章総括で触れる。

3 出土遺物

ここでは令和 2 (2020)～令和 4 (2022) 年度に実施した三陸道南側の調査における出土遺物について、一括して報告する。全体に遺物量は少なく、合計で土器 52 点 (個体数ではなく破片点数)、円盤状土製品 1 点、石器の可能性のある礫 4 点がある。なお、三陸道北側調査区の令和元年度調査出土資料については、町教委発行報告書内で報告されている。

出土地点別に集計した結果を表 6 に示す。20B 区、21A 区が突出しており、南丘中央平坦面の周囲に遺物が多いことがわかる。なお、遺物の取り上げに際しては極力出土地点の記録につとめたが、層序一括で取り上げたもの、表採資料や排土から回収したものを含む。

土器は全体のうち大きさ 1 cm 程度以下の細片を除く 52 点を登録した上で個体の判定を行い、合計 16 個体を確認し図化掲載している。全体を通じては 2 点を除き縄文時代後期初頭～前葉に位置づけられるものであり、三陸道関連調査での出土傾向と同様である。以下個別に特徴等を記載する。

No. 1 は 21A 区西側の土器集中 1 から得られた破片が口径 21cm の深鉢上半に復元された。全周に対する残存率は約 50% である。器形は、括れた頸部から口縁部が外反して立

ち上がり、胴上部が緩く張り出す。内面に現れた粘土帯継ぎ目と水平方向の割れ口、及び断面での観察から、幅 3 cm 程の粘土帯の外傾接合となっていることがわかる。施文は頸部から口縁部に沈線文が施される。頸部と口縁端部を水平に巡る沈線で区画し、その間を横長で内部が無文となる矩形の沈線文で充填、全体としては帯縄文による梯子形のモチーフを形成している。縄文と沈線の先後関係を見ると沈線施文後に縄文が施されており、縦位の帯縄文は原体を縦に回転させた充填縄文が使用される。縦位の帯縄文は 5～6 単位と推定される。外面の一部は二次被熱により橙色に変色しており、内面は焼け弾けによる凹凸が著しい。

No. 2 は 21A 区東側から出土した略完形の小型鉢である。内湾して立ち上がる比較的単純な器形で、底縁は外方に鋭く張り出す。施文は地文の R 撚糸文のみで、回転方向は基本的には条が斜行するように斜めに角度を持つが、一部は縦位に回転した圧痕と重複し、網目状を呈する部分もある。内面は横方向のナデ状調整痕が顕著で、底面にはササの葉の圧痕が残る。一部が二次被熱により橙色に変色する。

No. 3 は平行沈線による曲線的な文様が施された深鉢胴部破片で、図示した他に無文部の小片がある。1 本ずつやや粗雑に引かれた沈線間に 1 段の L 縄文が充填される。内面は丁寧な縦方向のミガキ調整が顕著。胎土に砂粒が多く、器表にも多数現れている。

No. 4 は外傾する薄手の深鉢口縁部片で 2 点の同一個体を図化した。他に胴部破片 1 点がある。口縁部直下に竹管状施文具による 2 本の平行沈線が巡り、その下部は 1 段の L 縄文が縦位に施される。口唇端部は面取りされ角張る。外面に吹きこぼれの炭化物が付着する。No. 5 は基本的には 3 本 1 組の平行沈線文が展開する深鉢胴部破片で、全体としては胴部がやや内湾して張り出す器形になると推定される。破片 10 片が接合しないことから正確な文様展開は把握し難いが、無文地上に入り組む渦巻状のモチーフが横位に展開し、枝線が縦

横に付属する。沈線施文は比較的丁寧で1本ずつ深く引かれている。5e 破片のみ沈線間が盛り上がる隆線状となっており、口縁部には隆線文が展開する可能性がある。破片によっては器表面の焼け弾けによる凹凸が著しい。

No.6は無文の器面に沈線文を持つ小片で、4片が同一個体と判断されうち2片を図化掲載した。特徴はNo.5に類似しており、内部の色調の違いから別個体と判断した。

No.7は深鉢口縁部小片2片で、口唇までLR縄文が横位に施文される。7bは外面の一部が剥落する。

No.8は縦位のR撚糸文が施された胴部破片で、3片同一個体と認識しうち2片を図化掲載した。8a破片は外面に炭化物が付着する。

No.9もNo.8と同様にR撚糸文が施された胴部破片。図示した2片以外に細片が4片ある。

No.10は焼け弾けにより器面が荒れた状態の深鉢胴部破片。LR縄文が縦位に施文される。

No.11は底径14.5cmの大型の深鉢底部破片で、底縁の上から外に開く器形となっている。外面の地文はR撚糸文が施され、底面には2枚の木葉痕が交差した圧痕が残る。ササの可能性が高いが摩滅により明確には観察されない。

No.12は内湾する器形の無文胴部破片で、割れ口付近に隆線の痕跡が見られる。図示の天地は不確実である。

No.13は小～中型の深鉢底部で接合しない3片が同一個体と判断される。図示した部分では外面無文で丁寧に磨かれる。

No.14は底径9cmの底部破片で2片がある。底縁は丸みを帯びて立ち上がり、内面中央が盛り上がる。底面には何らかの圧痕の痕跡がわずかに残るが磨り消しにより不鮮明である。

No.15は縄文時代早期中葉の貝殻条痕文土器口縁部片で、外傾する口唇外面側に斜位の刻目が連続して施される。内外面とも横位の貝殻条痕が施される。条痕は2～3mm程度の幅が広い原体が使用されている。

No.16は球胴形の深鉢胴部破片で、地文のLR縄文の上から結節隆線によるU字状、渦巻き状の文様が加えられる。結節隆線が一部

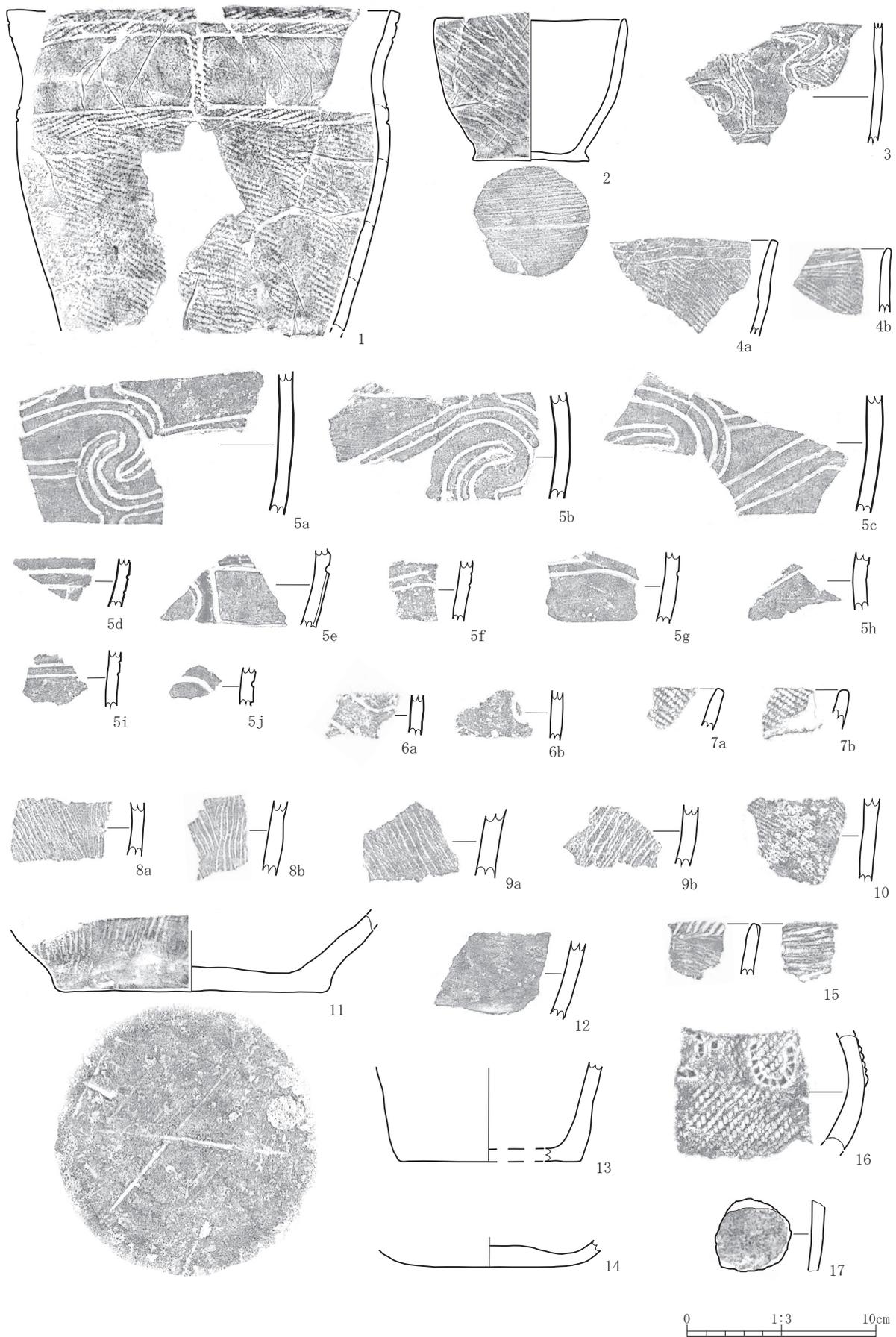
剥落している部分では、器面に刻目の圧痕が観察される。胎土に繊維は含まれない。施文の特徴から縄文前期中葉の大木4式に位置づけられる。なお、No.15・16ともに20B区出土である。

土製品は土器片利用円盤状土製品1点がある（No.17）。土器小片の周囲を打ち欠きによって略円形に仕上げたものである。土器は縄文後期初頭に位置づけられる無文部が広い深鉢胴部破片である。図示の上方側割れ口は沈線となっており部分的にLR縄文が観察される。

礫石器の可能性のあるものとして20C区、20D区から合計4点を取り上げている。花崗岩、砂岩の扁平な亜角礫、円礫であるが、敲打痕や摩滅痕に類似する器面の変化はいずれも人為的なものとは判断し難く、礫石器とは認定しなかった。また、剥片石器は出土していない。

この他に直径3～7cmほどの円礫がまとまっている地点がある。20B区、20C区、20D区、21A区から出土しており、合計20点を確認した。他に21A区では直径1～2cm程度の小円礫が15点回収された。チャート、凝灰岩が主で、組石等に利用される石材とは明らかに異なり、摩滅度が強く海成堆積層中に含有されていたものと判断される。遺跡周辺の段丘面では表層地質に同様の円礫は含まれていないことから、海岸付近等の他所で採集した小礫が持ち込まれていた可能性が高い。

三陸道調査区でも同様の円礫が多数出土しており合計3303点に達する。特に15号土坑では堆積土上～中位にかけて1058点が集中して出土した。いずれも摩滅が進んだ円礫であり海水に洗われた状態と推測された。更に特殊な集中の状況から、何らかの祭祀行為に伴い遺跡内で散布された可能性が指摘されている（岩手県埋蔵文化財センター2017）。また同程度の大きさの焼成粘土塊も集中しており、円礫と同様に祭祀に関連した遺物と推測されている（濱田2023）。三陸道南側調査区においても、少なくともその北半では同様の円礫の分布が広がっているものと捉えられるが、特異な出土状況は確認していない。



第16図 出土遺物

表6 遺物出土地点集計表

出土年度	調査区	土器	土製品	石器?	円磔	小円磔
2020	20A区	2				
	20B区	16			3	
	20C区	1		1	10	
	20D区			3	4	
	その他	2	1			
2021	21A区	28			3	15
	その他	1				
2022	22A区					
	22B区	2				
	22C区					
	22D区					

表7 遺物観察表

No.	出土年度	出土地点	特徴	備考	登録番号
1	2021	21A区 土器集中1	後期初頭, 深鉢口縁部~胴部, 口縁部沈線文, 地文 (RL) 口径 21cm		9
2	2021	21A区 土器 16	後期初頭, 小型鉢口縁部~底部, 地文 (R 撚糸文), 底面笹葉圧痕, 口径 10cm, 底径 6cm, 器高 7.5cm		10
3	2020	20B区 土器 10・12・13	後期初頭, 深鉢胴部, 沈線文, 地文 (L 充填)	2片	1
4	2020	20B区 土器 8・11 20B区排土	後期初頭, 深鉢口縁部, 沈線文, 地文 (L 縦)	3片	2
5	2021・22	21A区 土器 2・4・5・6・7・8・10・21 22B区 22-14 組石周囲	後期初頭, 深鉢胴部, 平行沈線文, 口縁部隆線	10片	11
6	2020	20B区 土器 1・4・9・14	後期初頭, 深鉢胴部, 沈線文	4片	4
7	2020	20B区 土器 1・2	後期初頭, 深鉢口縁部, 地文 (RL 横)	2片	3
8	2021	21A区 土器 9・18・23	後期初頭, 深鉢胴部, 地文 (R 撚糸文)	3片	12
9	2021	21A区 土器 12・15・17・20	後期初頭, 深鉢胴部, 地文 (R 撚糸文)	6片	13
10	2020	20B区 土器 5	後期初頭, 深鉢胴部, 地文 (LR 縦), 器面焼け弾け		5
11	2021	21A区 土器集中2	後期初頭, 深鉢底部, 地文 (R 撚糸文), 底面木葉痕, 底径 14.5cm		15
12	2021	21A区 土器 13	後期初頭, 深鉢胴部, 隆線文		14
13	2020	20B区 土器 3・6 (基本層序Ⅲ層)	後期初頭~前葉, 深鉢底部, 無文部, 底径 9.5cm	3片	6
14	2021	21A区 土器集中1	後期初頭, 深鉢底部, 底面磨消, 底径 9cm	2片	16
15	2020	20B区 排土	早期中葉, 深鉢口縁部, 口唇刻目, 内面条痕		8
16	2020	20B区 土器 7	大木 4 式, 深鉢胴部, 結節隆線, 地文 (LR 横)		7
17	2021	21A区	土器片利用円盤状土製品, 径 3.8cm		
	2020	20C区 No.1 磔	破碎した円磔の一部, 砂岩		
	2020	20D区 No.1 磔	扁平な亜角磔, 花崗岩		
	2020	20D区 No.4 磔	扁平な亜角磔, 花崗岩, 表面一部剥落 (非人為加工)		
	2020	20D区 No.5 磔	楕円形亜円磔, 花崗岩		

4 西平内 I 遺跡における 放射性炭素年代 (AMS 測定)

加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

西平内 I 遺跡は、岩手県九戸郡洋野町種市 37 地割地内 (北緯 39° 31' 23"、東経 141° 55' 44") に所在する。測定対象試料は、5 層中で検出された焼土粒・炭化物の集中部から出土した炭化物 1 点である (表 1)。推定される年代は、縄文時代後期初頭から前葉頃である。

(2) 測定の意義

環状列石構築年代を明らかにする。

(3) 化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- ② 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- ③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- ④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- ⑥ グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置

(NEC社製) を使用し、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HO_xII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② 14C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- ③ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい (14C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (14C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- ④ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差

($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv 4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログ

ラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「calBC /AD」または「cal BP」という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の14C年代は $1520 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1σ)は536 ~ 595cal ADの範囲で示される。古墳時代後期頃に相当し(佐原2005)、推定される年代よりもかなり新しい結果となった。

試料の炭素含有率は68%の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-190664	No.1	遺構：焼土粒・炭化物の集中部層位：5層中	炭化物	AAA	-27.43 ± 0.20	1.520 ± 20	82.77 ± 0.25

[IAA登録番号：#9752]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-190664	1.560 ± 20	82.36 ± 0.25	1.518 ± 24	536calAD - 595calAD (68.2%)	430calAD - 493calAD (22.5%) 530calAD - 607calAD (72.9%)

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon*51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon*55(4), 1869-1887
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原真, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学上巻, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon*19(3), 355-363

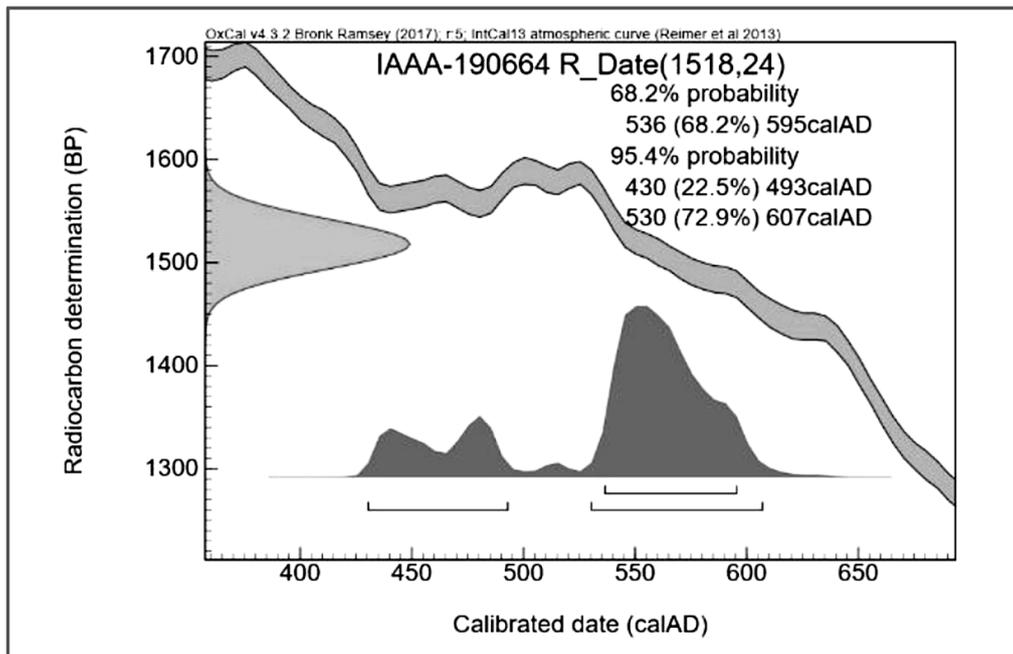


図1 暦年較正年代グラフ (参考)

(調査担当者所見)

今回、放射性炭素年代を測定した試料は19C区において2019年9月12日に採取したものである。測定の目的は大きくは環状列石構築の年代観を探るためであり、列石を被覆して広がる整地層2の下位から採取した炭化物試料を測定することによって、土器等の編年観から推測される縄文時代後期前葉に近い年代値が得られるものと予測していた。

試料は基本層序5層中の焼土粒・炭化物集中部に含まれる炭化物で、調査区壁面から採取した。地表面からの深さは約30cm前後、現地調査時点では表層からの混入の可能性はないと判断している。

測定結果、及び推定された年代値は上記のとおりで、暦年較正年代(1σ)は536～595cal ADの範囲とされ、古墳時代後期に相当する年代である。

本試料と同様に、洋野町教育委員会が19C区の炭化材集中部から採取した炭化物5点を試料として、株式会社加速器分析研究所が放射性炭素年代測定を行った結果も、暦年較正年代(1σ)では最も古い試料(C-C33)が427～535calADの間に3つの範囲、最も新しい試料(C-C25)が606～645calADの

範囲で示され、いずれも古墳時代に相当する年代値が報告されている(洋野町教育委員会2020)。

上記のとおり測定結果は予測と大きく食い違う。この結果をそのまま捉えれば古墳時代後期頃に何らかの目的で人為的に整地層が形成されたという結論に導かれる。一方、本遺跡を含め周辺地域では古墳時代の遺構、遺物は一切検出されていない。洋野町内では南部の八木地区に所在する袖山遺跡から、剣形石製模造品が採集されているのが唯一である(千田2016)。このような状況からは古墳時代後期の人為的な関与も考えにくい。

現時点では試料混入の可能性を捨て切れないものとし、年代測定結果の評価を保留する。将来的に土器付着炭化物等の試料を得て再度年代測定を実施する必要がある。

〈文献〉

- 千田政博 2016 「洋野町袖山遺跡採集剣形石製模造品」『岩手考古学』27,49-52
- 洋野町教育委員会 2020 『西平内I遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第9集

V 東北地方北部における配石遺構

1 収集要領・表の見方

西平内 I 遺跡の環状列石の来歴について手掛かりを得るため東北地方北部三県の配石遺構を集成した(表8)。偏っており、近接地をより念密に、地域区分・表の配列も遠近を重視し、日本海側、太平洋側に分けている。

大規模配石遺構のみならず通常の配石遺構まで含めた集成は、これまでほとんどなされておらず手掛かりが少なく苦勞した。限られた文献から芋づる式を頼りに行わざるを得なくて効率が悪く、他業務の合間に行ったこともあって時間切れとなり、半年かけた割に悉皆収集には程遠い結果となって慙愧に耐えない。岩手県内の集成に限れば悉皆収集も可能だったと思われるが、西平内 I 遺跡の位置を考えれば、あまり意味のない行為と思えた。

また、地域・機関・報告者によって記載の仕方がマチマチで表にまとめるのに多大な時間を要したことも原因である。何より要点が不明確で時期・下坑の有無などの必要な項目にもふれていないわりに解釈に走り検索しにくい報告書も多い。統一的な記載を目指したが、想像以上に多様で、さらに配石遺構自体も多様なため、断念せざるを得なかった。そのため、インデックスとしての役割に徹することとし、できるだけコンパクトにまとめることに専心した。

表中“大”欄は、“大規模配石遺構”の意味で、10m以上を大規模配石遺構とし、その形状を記しており、不定形を“不”、不明なものを“?”とした。

掲載文献は、発行機関等(最初の二文字)と年号(下二桁)で示し、発行機関が県教育委員会の場合は“県教”、県埋蔵文化財センターは“県埋”としている。青森県川原平(1)遺跡では、同じ年度に刊行されている報告書があるため、年号ではなくⅡ、Ⅲ等で表した。なお、「」内は報告者の発言である。表中の註の内容は、本文後に記している。

他県の市町村発行報告書は身近にないもの

が多いため、この方面は、さらに渉獵が十分でなく、また掲載を断念した遺跡が多い。秋田県森吉町教育委員会の報告書も周囲になく、例えば、その中には姫ヶ岱C遺跡第4号住居跡で、深渡遺跡で検出された竪穴住居跡の壁に礫が巡る類例が確認されているようだが(秋田県教育委員会2006=深渡遺跡報告書:p.225)、実見できず割愛した。

2 所感

配石は多様不規則で、意図的なのか判断のつかないものが多いのは、私たちが縄文時代のパタンを認識できないためだろうか。

逆に、積極的に私たちのパタンを当てはめてしまうのが「環状列石」である。「環状列石」とみなされながらも列石が一周しない例が頻繁に見られるのである(表No.5、26、42、85、152)。秋田県高屋館跡(表No.42)と青森県酪農(3)遺跡(表No.85)では、列石が僅かしか見られない。高屋館跡の方は、掘立柱建物跡が求心的な弧状(調査範囲の関係であり、おそらく環状となる)を示しているのでまだ説得力があるが、酪農(3)は掘立柱建物跡も明確な環状を示していない。何より、多様な配石遺構の中で「環状列石」だけを取り上げて検討することに意味があるだろうか。

さらに、「環状」配石に注目するあまり、直径4m前後と推定される弧状配石も特別視している例が非常に多く認められた(特に表No.162の安俵6区遺跡例に代表される)。これらは、石井寛氏の言うとおりの住居跡であろう(石井2003、2009)。ただし、岩手県仏沢Ⅲ遺跡の前期初頭?の例もあり(表No.151)、全てが関東地方の敷石住居起源とは言えないと思われる。

多様な実態の中、僅かな類例として、青森県八戸市丹後谷地遺跡例(表No.101)と岩手県大船渡市長谷堂貝塚例(表No.172)の“狭小扇状”配石、岩手県田野畑村館石野Ⅰ遺跡例(表No.142)と同滝沢市湯舟沢Ⅱ遺跡例(表No.152)の石組、そして、これは竪穴住居の炉で厳密には配石遺構ではない

が、配石炉の一つである「上杉沢型石囲炉」が、岩手県二戸市上杉沢遺跡（表 No.133）と同 宮古市近内中村遺跡例（表 No.145）、そして表には示していないが、同 軽米町水吉Ⅵ遺跡の縄文第5号住居跡（財団法人文化振興事業団 1995）に認められた。上杉沢と近内中村例は晩期中葉（上杉沢は大洞式C1式期、近内中村は大洞C2式期？）、水吉Ⅵ例は晩期初頭の可能性があるが、水吉Ⅵ例が最も古いことになる。

また、日本海側北部には、柱穴状掘方を持つ立石が点在して見られる（表 No.3、41～43）。梯子状に組む「小牧野式配列」が青森県小牧野遺跡（表 No.10）と秋田県伊勢堂岱遺跡（表 No.48）に認められたことは有名だが、これは型式というより、土留めのための形式だとする意見もある（阿部 1998）。

型式学的検討の難しい当地の配石墓に対し、明確な定義手法により分類し系譜を辿ったのが渡部清志氏であるが、その指摘の全てに説得力があるわけでもない（渡辺 1997）。

広く共通する方式として、縁石で囲い、その中を細かい置石で充填するやり方が見られるが、これは土器の充填縄文に共通する方式で当時の流行とも見なせよう。

註

- (1) 第7次調査の結果と六次にわたる確認調査（第1次は緊急調査）のまとめである。2～6次調査のそれぞれにも報告書が刊行されているが、2～5次については写真主体の概報パンフレット状であることもあり、本書では省略したので、各文献名については、平川市教育委員会（2007）を参照願いたい。なお、第6次調査の報告書（平賀町教育委員会 2005）には、大規模配石遺構検出の経緯（ボーリング探査図含む）と組石遺構の詳細な図の集成と遺跡の立地概念図が掲載されている。調査面積合計 2,497㎡。唯一下部調査を行った第1号組石の下から土坑が検出されている。「環状列石」から太師森山に向かって約 40m 東行った中間地点には「組石石棺墓検出区域」が確認されている。太師森山だけでなく岩木山も望めるようである。石棺墓は中期末～後期初頭、「環状列石」は十腰内Ⅰ式期とされている。
- (2) 長谷堂例（（公財）岩手県文化振興事業団 2020：p.114）に比べ、ずっと雑然としていて抜けている範囲も多いが、外縁を縁取りするように石を縦列に並べ、その中を外側の石よりやや小さめの石を南北軸に立てて埋めていくという構造は同じである。その見た目は、集成者には“早瀬”を表現したようにも見える。
- (3) 道路拡幅工事に伴って行われた発掘調査で、大規模配石遺構が確認され、その内容確認のために行われた調査結果に基づく（名川町教育委員会 2004）。緊急調査の報告書は 2002 年に刊行されたようだが、身近になく実見できなかった。
- (4) 列石から離れた場所にも配石遺構、配石土坑あり。石棺（室）状も。列石内組石下土坑から蜃沢式期大型深鉢伏せた状態で出土。その隣の組石下土坑底面から蜃沢式期大型壺押しつぶされた状態で出土。「石室状遺構」底面からコハク玉出土。その他、土坑副葬品?として短冊状（両端に貫通孔）石製品出土。
- (5) 調査結果は、文献、岩田 21 の欄参照。

西平内Ⅰ遺跡に近接する地域には比較的大規模な配石遺構も認められるが（表 No.109、112、117、123、130、131、141、142）、伝統的に影響を受けることの多い青森県八戸方面には相変わらず見られないのが謎である。

さらに、大規模配石遺構のうち後期でも古い方に位置づけられそうなのは、岩手県湯舟沢Ⅱ遺跡（表 No.152）、同 館石野Ⅰ遺跡（表 No.142）、同 荒谷A遺跡（表 No.130）、同 西平内Ⅰ遺跡（表 No.116）、秋田県高屋館跡（表 No.42）、青森県水上遺跡（表 No.109）、同 太師森遺跡（表 No.26）、同 稲山遺跡（表 No.5）と、岩手県北部（一部青森県東南部隣接地）に多く、この中で明確に環状列石となるのは西平内Ⅰ遺跡だけである（金子 2020）。

こうした点から、想像をたくましくすれば、岩手県内で東北地方北部の大規模配石遺構は誕生し、西平内Ⅰ遺跡は環状列石の元祖と見なすこともできよう。すなわち、津軽地方～秋田県北部が元々の中心地ではなく、逆に、西平内Ⅰ遺跡の影響を受けて、これら地域の環状列石が誕生したという可能性も出てくる。

参考文献

- 青森県教育委員会 1976『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集
- 1977『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 1977『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 1978『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第42集
- 1979『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第48集
- 1980『碓ヶ関大面遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集
- 1984『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第79集
- 1984『弥栄平遺跡(2)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 1985『大石平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 1986『大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
- 1986『弥栄平(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第98集
- 1986『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 1987『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 1987『弥栄平(4)(5)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第106集
- 1988『上尾駁(2)遺跡(Ⅰ)』青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 1988『上尾駁(2)遺跡Ⅱ(B・C地区)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
- 1991『富ノ沢(1)・(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第133集
- 1992『沢堀込遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
- 1993『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
- 1995『泉山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第181集
- 1996『西張(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第197集
- 1998『西張(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第233集
- 2000『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
- 2000『三内丸山遺跡XⅣ』青森県埋蔵文化財調査報告書第282集
- 2001『十腰内(1)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第304集
- 2009『砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第466集
- 2011『道仏鹿糠遺跡・藤沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第499集
- 2011『山田(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第508集
- 2012『砂子瀬遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第513集
- 2014『大川添(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第542集
- 2014『砂子瀬遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第543集
- 2014『大川添(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第544集
- 2016『川原平(1)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第564集
- 2016『川原平(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第565集
- 2016『川原平(6)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第567集
- 2017『水上(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第575集
- 2017『川原平(1)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第577集
- 2017『川原平(1)遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第578集
- 2017『道仏鹿糠遺跡Ⅱ・下平窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第586集
- 青森市教育委員会 1983『山野峠遺跡(石棺墓移転に伴う発掘調査)』青森市の埋蔵文化財
- 青森市教育委員会 1991『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 青森市教育委員会 1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 青森市教育委員会 2001『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』青森市埋蔵文化財調査報告書第55集
- 青森市教育委員会 2004『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』青森市埋蔵文化財調査報告書第72集
- 青森市教育委員会 2006『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』青森市埋蔵文化財調査報告書第85集
- 秋田県教育委員会 1980『才の神遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第71集
- 1982『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第91集(駒林、案内Ⅱ遺跡)
- 1983『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集
- 1984『東北縦貫自動車道発掘調査報告書XⅡ』秋田県文化財調査報告書第120集(大岱Ⅱ遺跡)
- 1986『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集(松木台Ⅲ遺跡)
- 1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集
- 1988『玉内遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第171集
- 1988『中小坂遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第177集
- 1990『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ-手取清水遺跡-』秋田県文化財調査報告書第190集
- 1990『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ-高屋館跡-』秋田県文化財調査報告書第198集
- 1990『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-ラフキ遺跡-』秋田県文化財調査報告書第199集

- 1990『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集
- 1994『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XⅦ』秋田県文化財調査報告書第243集
- 1997『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集
- 1998『虫内Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第274集
- 1999『深渡遺跡』秋田県文化財調査報告書第286集
- 1999『潟前遺跡(第1次)』秋田県文化財調査報告書第290集
- 1999『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第293集
- 2000『姫ヶ岱D遺跡』秋田県文化財調査報告書第300集
- 2000『潟前遺跡(第2次)』秋田県文化財調査報告書第306集
- 2001『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書第322集
- 2001『松木台Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第326集
- 2002『桐内A遺跡』秋田県文化財調査報告書第334集
- 2003『向様田A遺跡 遺構篇』秋田県文化財調査報告書第346集
- 2003『向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡』秋田県文化財調査報告書第347集
- 2003『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書第352集
- 2005『向様田D遺跡』秋田県文化財調査報告書第392集
- 2005『日廻岱B遺跡』秋田県文化財調査報告書第394集
- 2006『深渡遺跡』秋田県文化財調査報告書第407集
- 2006『深渡A遺跡』秋田県文化財調査報告書第408集
- 2006『森吉家ノ前A遺跡』秋田県文化財調査報告書第409集
- 2009『向様田A遺跡』秋田県文化財調査報告書第445集
- 2010『向様田D遺跡(第2次)』秋田県文化財調査報告書第452集
- 2010『森吉家ノ前A遺跡(第3次)』秋田県文化財調査報告書第453集
- 2011『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書第464集
- 秋田県埋蔵文化財センター 2007『小又川の一万年』
- 鯉ヶ沢町教育委員会 1985『餅ノ沢石棺墓(発掘調査報告書)』町文化シリーズ10
- 阿部昭典 1998「縄文時代の環状列石」『新潟考古学談話会会報』第18号 新潟考古学談話会
- 阿部義平 1968「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻第1号 日本考古学会
- 石井 寛 2003「東北地方における礫石附帯施設を有する住居址とその評価」『縄文時代』第14号 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 2009「周石型礫石施設の系譜と性格」『縄文時代』第20号 縄文時代文化研究会
- 一戸町教育委員会 1983『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅲ』一戸町文化財報告書第4集(馬場平2遺跡)
- 一戸町教育委員会 1983『一戸バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅳ』一戸町文化財報告書第5集
- 一戸町教育委員会 1993『御所野遺跡Ⅰ』一戸町文化財報告書32集
- 一戸町教育委員会 2015『御所野遺跡Ⅴ』一戸町文化財報告書70集
- 岩木山刊行会 1968『岩木山』
- 岩手県教育委員会 1972『岩手県大船渡市長谷堂貝塚一昭和46年度緊急調査報告一』
- 財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1981『都南村湯沢遺跡』岩手県埋蔵文化財調査報告書第2集
- 1981『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡』岩手県埋蔵文化財調査報告書第21集
- 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市萩内遺跡』岩手県埋蔵文化財調査報告書第32集
- 1983『上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第56集
- 1983『荒谷A遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 1983『岩成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第62集
- 1983『道地Ⅱ遺跡・道地Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第64集
- 1984『嶽Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第78集
- 1985『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財調査報告書第87集
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1985『柿ノ木平Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第89集
- 1986『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集
- 1988『馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第122集
- 1994『向館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第206集
- 1995『柳上遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第213集
- 1995『水吉Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第219集
- 1995『上米内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第220集
- 1995『田代Ⅳ遺跡・田代Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第223集
- 1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書一第2次～第5次調査一』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集
- 1996『寺久保遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第229集
- 1998『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書一第6次～第8次調査一』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集

- 1999『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第296集
 2000『上野平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第333集
 2000『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第336集
 2001『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第367集
 2004『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集
 2004『大橋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第481集
 2007『川口Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第521集
 2008『吉田館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第520集
 2008『板子屋敷3遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第537集
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012『川目A遺跡第5次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第589集
- 2017『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集
 2018『赤浜Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第690集
 2020『田鎖遺跡・田鎖館跡・田鎖車堂前遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第718集
 2020『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第719集
 2021『鹿糠浜Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第727集
- 岩田貴之 2021『樺山遺跡から八天遺跡へ』『岩手考古学会第52回研究大会資料集 環状列石の誕生』
 宇鉄遺跡発掘調査会 1996『宇鉄遺跡』
- 江坂輝弥 1959『青森市久栗坂山野峠遺跡調査』『考古学ジャーナル』No.13 ニューサイエンス社
 江坂輝弥 1959『青森県下北郡札地遺跡』『日本考古学年報』8(昭和30年度) 日本考古学協会
 大槌町教育委員会 1974『崎山弁天遺跡』草間俊一編著
 大野憲司 1990『狐岱遺跡について』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号
 大迫町教育委員会 1979『立石遺跡』大迫町埋蔵文化財報告第3集
 大迫町教育委員会 1986『観音堂遺跡』大迫町埋蔵文化財報告第11集
 大鰐町教育委員会 1986『上牡丹森遺跡発掘調査報告書』大鰐町文化財調査報告書第1集
 奥山 潤 1954『縄文晩期の組石棺』『考古学雑誌』第40巻第2号 日本考古学会
 葛西 励 1975『青森市山野峠石器時代墳墓遺跡について』『北海道考古学』第11輯 北海道考古学
 鹿角市教育委員会 1984『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26
 鹿角市教育委員会 1987『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)』鹿角市文化財調査資料32
 鹿角市教育委員会 2017『特別史跡大湯環状列石総括報告書』鹿角市文化財調査資料第110集
 金子昭彦 2020『十腰内Ⅰ式土器文化における配石の意味』『岩手考古学』第30号 岩手考古学会
 軽米町教育委員会 2020『千本松遺跡発掘調査報告書Ⅰ』軽米町文化財調査報告書第35集
 喜田貞吉 1934『青森県出土の洗骨入土器』『歴史地理』第63巻第6号 日本歴史地理学会
 北秋田市教育委員会 2006『地藏岱A遺跡 橋場岱D・E・F遺跡』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第3集
 北秋田市教育委員会 2007『橋場岱A・C・G遺跡』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第5集
 北秋田市教育委員会 2008『橋場岱B遺跡』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第7集
 北秋田市教育委員会 2011『伊勢堂岱遺跡』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第13集
 北上市 1968『北上市史第一巻 原始・古代(1)』
 北上市教育委員会 1990『樺山遺跡(1989年度)』北上市文化財調査報告第59集
 北上市教育委員会 1992『本宿遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第5集
 北上市教育委員会 1996『樺山遺跡(1992・1993年度)』北上市埋蔵文化財調査報告第25集
 倉石村教育委員会 1998『館町Ⅱ遺跡』倉石村埋蔵文化財調査報告書4
 黒石市教育委員会 1983『花巻遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告・第7集
 黒石市教育委員会 1985『長坂1遺跡発掘調査報告書』黒石市埋蔵文化財調査報告3
 小坂町教育委員会・小坂環状列石調査団 1969『小坂環状列石墳墓』
 小泊村教育委員会 1991『縄文沼遺跡発掘調査報告書』小泊村文化財調査報告第2集(早稲田大学文学部考古学研究室編)
 佐井村教育委員会 2004『青森県佐井村 糠森遺跡』
 桜井清彦・鈴木克彦・高橋龍三郎 1985『青森市玉清水遺跡発掘調査概報』『考古学ジャーナル』No.252 ニューサイエンス社
 三戸町教育委員会 2000『沖中遺跡・沖中(2)遺跡発掘調査報告書』三戸町埋蔵文化財調査報告書第1集
 浄法寺町教育委員会 2001『上杉沢遺跡』
 浄法寺町教育委員会 2003『上杉沢遺跡』
- 関 豊 1992『平成3年度荒谷A遺跡調査の概要』『第8回岩手考古学会研究大会発表資料』(於:一戸町文化センター)
 大東町教育委員会 1997『中野台埋蔵文化財発掘調査報告書』大東町文化財調査報告第17集
 滝沢村教育委員会 1987『仏沢Ⅲ遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第5集
 滝沢村教育委員会 1991『湯舟沢Ⅱ遺跡PARTⅠ』岩手県滝沢村文化財調査報告書第16集
 滝沢村埋蔵文化財センター 2008『仏沢Ⅲ遺跡発掘調査報告書』滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第3集
 田沢湖町教育委員会 1998『潟前遺跡—平成9年度発掘調査報告—』
 田野畑村教育委員会 2007『館石野Ⅰ遺跡第9次～14次調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第14集

- 田野畑村教育委員会 2011『和野新墾神社遺跡 和野ソマナイ遺跡』田野畑村文化財調査報告書第18集
 東和町教育委員会 1999『安俵6区Ⅳ遺跡発掘調査報告書』東和町文化財調査報告書第20集
 東和町教育委員会 2000『安俵6区Ⅴ遺跡発掘調査報告書—遺構編—』東和町文化財調査報告書第26集
 東和町教育委員会 2004『清水屋敷Ⅱ遺跡発掘調査報告書—縄文編—』東和町文化財調査報告書第34集
 遠野市教育委員会 2006『張山遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第8集
 名川町教育委員会 2004『水上遺跡—水上遺跡発掘調査報告書Ⅱ—』名川町埋蔵文化財調査報告書第8集
 浪岡町教育委員会 2002『Ⅱ 平野遺跡発掘調査報告書』『平成13年度浪岡町文化財紀要Ⅱ』
 新里村教育委員会 1990『腹帯配石遺構群発掘調査概報Ⅰ』新里村文化財調査報告書第1集
 新里村教育委員会 1991『腹帯配石遺構群発掘調査概報Ⅱ』新里村文化財調査報告書第2集
 長谷川大旗・折登亮子 2023『酪農(3)遺跡』『考古調査ハンドブック24 環状列石』ニューサイエンス社
 八戸市 2009『新編八戸市史 考古資料編』
 八戸市教育委員会 1977『土坑墓・赤染人骨』緊急発掘調査概要 文化財シリーズ18
 八戸市教育委員会 1986『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査—丹後谷地遺跡—』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
 八戸市教育委員会 1988『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ—田面木平遺跡(1)—』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
 八戸市教育委員会 1991『風張(1)遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
 八戸市教育委員会 1997『牛ヶ沢(4)遺跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第71集
 八戸市教育委員会 2001『牛ヶ沢(4)遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第89集
 八戸市教育委員会 2002『是川中居遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集
 八戸市教育委員会 2004『牛ヶ沢(4)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集
 八戸市教育委員会 2006『是川中居遺跡5』八戸市埋蔵文化財調査報告書第111集
 八戸市教育委員会 2008『風張(1)遺跡Ⅵ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第119集
 八戸市教育委員会 2012『史跡は川石器時代遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第135集
 八戸市南郷区役所建設課 2007『荒谷遺跡』八戸市南郷区埋蔵文化財調査報告書
 八幡平市教育委員会 2017『松尾釜石環状列石—1953年発掘調査の記録—』
 花巻市教育委員会 2006『立石遺跡発掘調査報告書』(大迫町埋蔵文化財報告第24集)
 花巻市教育委員会 2009『稲荷神社遺跡発掘調査報告書』花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
 平賀町教育委員会 1974『青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書 甕棺墓、石棺墓、土墳墓』(葛西勲 著)
 平賀町教育委員会 1981『堀合Ⅰ遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第9集
 平賀町教育委員会 1983『木戸口遺跡発掘調査報告書』平賀町埋蔵文化財報告書第12集
 平賀町教育委員会 1984『大師森遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第14集
 平賀町教育委員会 2005『大師森遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第36集
 平川市教育委員会 2007『大師森遺跡』平川市埋蔵文化財報告書第2集
 弘前市教育委員会 1981『高長根山遺跡発掘調査報告書』
 弘前市教育委員会 2010『大森勝山遺跡発掘調査報告書』
 洋野町教育委員会 2019『西平内Ⅰ遺跡ハンドボーリング調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第4集
 洋野町教育委員会 2020『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書 環状列石の確認に係るトレンチ発掘調査』洋野町埋蔵文化財調査報告書第9集
 洋野町教育委員会 2023『南戸類家Ⅱ遺跡試掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第15集
 福岡町教育委員会 1965『岩手県福岡町 堀野遺跡』
 文化財保護委員会 1953『大湯環状列石』埋蔵文化財発掘調査報告第二
 水沢市教育委員会 1981『杉の堂遺跡—第3次発掘調査概報—』岩手県水沢市文化財報告書第4集
 水沢市教育委員会 1982『杉の堂遺跡—第4次発掘調査概報—』岩手県水沢市文化財報告書第5集
 宮古市教育委員会 1995『崎山貝塚』宮古市埋蔵文化財調査報告書44
 宮古市教育委員会 2001『近内中村遺跡—第1次～第7次発掘調査の概要—』
 宮古市教育委員会 2006『菅ノ沢遺跡発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財調査報告書69
 盛岡市教育委員会 1989『盛岡市埋蔵文化財調査年報—昭和62年度—』
 森吉町教育委員会 1999『平成10年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 上悪戸B・C遺跡 姫ヶ岱A・B・C遺跡』
 森吉町教育委員会 2001『平成10・11年度 埋蔵文化財発掘調査報告書—森吉ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査 上八岱A遺跡・上八岱B遺跡・水上ミ遺跡』
 森吉町教育委員会 2003『平成13年度 埋蔵文化財発掘調査報告書—森吉ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査—二重鳥C・G遺跡』
 森吉町教育委員会 2004『二重鳥B・C・H遺跡—森吉ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査—』
 横手市 2007『横手市史 資料編 考古』
 陸前高田市教育委員会 1992『門前貝塚』陸前高田市文化財調査報告第16集
 早稲田大学文学部考古学研究室・田野畑村 1997『館石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』早稲田大学文学部考古学研究室調査報告
 渡部清志 1997『東北地方北半における配石墓の成立と展開』『古代文化』第49巻第2号、第3号

表8 配石遺構集成 (*註の内容は、本文第V章末に)

No.	県	市町村	遺跡名	立地	時期 土器型式	大	配石の特徴	掲載 文献	備 考
1	青	外ヶ	宇鉄	海段	大洞 C1 ~ A	石棺墓。組石。配石下坑。配石土坑。組石、立石、蓋石。日時計。	宇鉄 96	後者玉象嵌土製品 2基	
2	青	中泊	縄文沼	丘陵	大洞 C2 式?	「集石遺構」6基。二類。大洞 C1 式期(安山岩)と大洞 C2 式期(小石集石)	小泊 91		
					二枚橋式?	配石遺構1基。1号。堅穴住居覆土中。4×2mの範囲		2号集石住居壁沿う?	
3	青	蓬田	山田(2)	海段	円筒上層 a 式	「立石遺構」1基。堅穴住居床面「石棒」(楕円形礫)正立(掘方あり)。床上約10cm	県教 11	A区第2号(9号堅穴住居)	
					?	「立石遺構」2基。A区1号(石棒状。被熱。掘方なし)。C区1号(台石、掘方あり)。			
4	青	青森	山野峠	峠	後前葉前半	東側斜面。石室6基。石室内1~3個体の土器。5体の土器から人骨	喜田 34	文献未見、葛西 75による	
					後前葉前半	西側斜面。組石石棺墓6基列をなして。石棺の傍らから狩猟文土器	江坂 83	青森県史による	
					後前葉前半	西側斜面再調査。新たに石棺墓1基	青森 83	採石対策石棺墓移転目的	
5	青	青森	稲山	丘陵	後初~前葉	「環状列石」。造成中央広場(中央に配石墓3基)周囲に多数の配石、集石	青森 04	総括報告書。周囲フラスコ土坑	
6	青	青森	玉清水(2)	丘陵	晩期前葉	組石1基。3×1m。土壇墓(壙口に黄粘土)群の上。大型石棒(一部立石)	桜井 85	遺構内遺物極少。調査 23m	
7	青	青森	三内丸山(2)		中期末??	並行する土壇墓列の一部に不整形ブロック状配石8基。配石下坑(ほぼなし)	県教 77	配石一部口状	
8	青	青森	三内丸山	斜面	中中~後葉	「環状配石墓」(直径4m程度)の列石。中央土壇墓)7基。配石遺構6基	県教 00	第14次調査。列状配置	
9	青	青森	山吹(1)	丘陵	? 中期??	配石遺構1基。2×1m程度のハ字状。中央硬化面。下坑なし?	青森 91	被熱痕なし	
10	青	青森	小牧野	台地	後期前葉	環状列石(外帯径35m。切土盛土。列石一部三列)。小牧野式配列(石垣状組石)	青森 96	全体形丸みを帯びた方形	
					後期前葉	配石遺構17基。9基環状列石を取り囲み、住居壁?円~方形の「環状配石」多		のち8基は環状列石の一部に合	
					後期前半	「集石遺構」(10cm前後の小礫の集合体)1基。5×1.5m(不整形。粗密あり)		環状列石隣接(約10m)	
					後期前半	直線状列石(環状列石南の三列目?)。配石4(下坑1)、集石1、小牧野式配石1	青森 01	ほか集石3の追加報告書割愛	
					後期前半	環状列石内広場から遺物の出土ほとんどなし。構成礫の重量、構築作業検討	青森 06	総括報告書	
11	青	青森	平野	丘陵	後期初頭?	石棺墓2基。「集石遺構」3基。SS02 二基?、埋設土器伴?。SS03 掘方	浪岡 02		
12	青	鱈ヶ	餅ヶ沢	丘陵	中期末?	石棺墓2基	鱈ヶ 85	文献未見、下記文献による	
					後期初頭?	石棺墓3基。一部赤化した壁石(赤色顔料の付着?)。周囲11号配石遺構	県教 00		
					後期初頭?	石棺墓1基。他3基と位置異なる。			
					中末~後前?	配石遺構10基。9号30m以上?(雑然。一部弧状)。2、6、7号下坑あり		6号埋設土器。中期未多	
13	青	鱈ヶ	大曲	段丘	中末~後前?	配石遺構。8m以上。全容不明。	岩木 68	報告書では「大曲 I 号遺跡」	
14	青	鱈ヶ	建石(3)	段?	後期??	Aトレンチから「環状配石遺構」(約1m、中央焼土)=好跡? ※遺跡名は青森県史	岩木 68	報告書では「大曲 III 号遺跡」	
					後期??	Cトレンチから「集石遺構」(約50cm、下坑?) (図写真なく詳細不明)		遺跡名は青森県史による	
15	青	鱈ヶ	大平野	段?	晩期??	II号遺跡。「環状配石」(径70cm)中心に同心円二重構造の配石遺構	岩木 68	住居? I号遺跡から集石?	
16	青	鱈ヶ	前森	扇状	後期前半?	※青森県史に「集石遺構」	岩木 68		
17	青	弘前	十腰内(1)	丘陵	晩期	「2号集石遺構」(2×2m程度、下坑なし)。二重石囲炉(6号堅穴住居)	県教 01	1号は平安時代	
18	青	弘前	十腰内(2)	丘陵	後期中葉?	「集石遺構」3基。12×6m内に散在するが一部列石2(一つは弧状)	岩木 68	報告書では十腰内遺跡	
					IV群以降	第6トレンチD区「集石遺構」		遺跡名は青森県史による	
19	青	弘前	大森勝山	丘陵	晩期??	環状列石(49×39mの楕円形、整地、77基の組石、多数の円盤状石製品)	岩木 68	組石一部環状。背後岩木山	
					晩期??	集石遺構2基。一つは晩期初頭? もう一つは下坑あり			
					晩期前半	時期・周辺空間利用の確認。環状列石周辺から約250点以上の円盤状石製品	弘前 10	史跡指定のための確認調査	
20	青	弘前	高長根(2)	丘陵	後期	「石組遺構」	弘前 81	報告書未見、青森県史による	
21	青	弘前	薬師	段?	晩期??	「集石遺構」群(一部好跡)	岩木 68		
22	青	弘前	小森山東部	山麓	晩期前葉	※青森県史によれば集石遺構複数、報告書写真に「列石」	岩木 68		
23	青	黒石	長坂(1)			配石遺構2基。全体を調査していないため形態不明	黒石 85	報告書未見、青森県史による	
24	青	黒石	花巻	段丘	後期初頭?	石棺墓1基から連続する不整形三角形状(2.8×2.6m)の配石	黒石 83		

No.	県	市町村	遺跡名	立地	時期 土器型式	大	配石の特徴	掲載 文献	備 考
25	青	平川	木戸口	丘陵	後期	大	直線状列石(約6×1.5m)。平安住居構築の際に破壊された可能性	平賀 83	
26	青	平川	太師森	丘陵	大洞B式～		弧状? (範囲外続)。約11m。6号竪穴遺構内。竪穴壁に沿う。「祭祀施設」	平賀 84	竪穴住居の壁か
27	青	平川	堀合(1)	丘陵	中末～後前?	不	※大規模配石遺構検出前。「遺跡の中心部より大部外れた部分」	平川 07	鉄塔建設。625㎡。縄文前中期
28	青	平川	堀合(3)	丘陵	後期前葉		「環状列石」は弧状列石と複数の組石。日時計。石棺墓。中央に土器棺墓2	平賀 81	確認。太師森山。造成。註1
29	青	黒石	一ノ渡	段丘	後初～前葉	不	石棺墓12基。三列だが12号は列外。棺内人骨、歯、石鏃。「改葬墓」	平賀 74	5、11、12号1m未満
30	青	平川	大面	高段	後期		「積石塚土壙墓」(配石土坑)1基。土坑直径約70cm略円形。「改葬墓的」	県教 84	東側25mに土器棺墓群
31	青	西目	水上(2)	段丘	後初～前葉		石棺墓4、配石土坑1基。1号石棺から複数人骨(6以上? 焼骨でない)	平賀 84	「墓類ほぼ一列」
32	青	西目	砂子瀬	段丘	中末～後前		V32組石。石敷状。底辺約3m×高さ約148mの長台形。10個の小ブロック?	平賀 84	一部列。墓域への「祭壇状」
33	青	西目	川原平(6)	段丘	後期		上記含め組石57・集石5・立石3基(下坑多・フラスコも)。列石2基	平賀 84	花弁状、3.5×1.5m長方形も
34	青	西目	川原平(1)	段丘	後初		配石遺構23基。「集石遺構」(小礫群集)2基。礫群1基(34×15m散在)	平賀 84	配石・「集石」下坑有無両方
35	青	西目	大川添(3)	段丘	後末		石棺墓25基。遺跡中央にあり、分布三群に分かれる。二群の周囲配石遺構	平賀 84	居住域の間。詳細な検討
36	青	西目	大川添(4)	段丘	後後～晩期		配石遺構60基。石棺墓A群に52、B群に5基。列石、A群20、B群3基。雑然連続	平賀 84	巨大立石。報告書に詳細な検討
37	青	大鰐	上牡丹森	丘陵	後後～晩期		半島西部。5基。SQ1、2.3×1.8m範囲に大型礫内側小型礫。SQ4、2.3m疎ら列	平賀 84	屋外配石。1、3号配石土坑?
38	秋	小坂	小坂	段丘	縄文時代?		半島東。2基。50cm以内疎ら、配石下坑なし	平賀 84	配石下坑なし
39	秋	小坂	大岱II	段丘	中末～後初?		1基。0.7×0.7mハ字状? 「掘方」あり ※遺構外狩猟文土器	平賀 84	中末～後期前葉集落
40	秋	小坂	中小坂	段丘	後末		「石棺状配石」。SQ14、18、01も? 三基隣接。SQ18は連結した複合配石	平賀 84	遺跡西端
41	秋	鹿角	大湯	段丘	後後～晩期		上記以外の配石遺構14基。規模形態多様だが、全て配石下坑なし。	平賀 84	時期限定されるものも
42	秋	鹿角	高屋館跡	段丘	後後～晩期		「日時計組石遺構」2基、配石下坑。SQ21、27(近接)。放射状置石、外周縁石	平賀 84	坑底、玉や石匙
43	秋	鹿角	天戸森	段丘	後後～晩期		上記周囲を中心に配石遺構15基(SQ21以外下坑)。配石多様だが立石多い	平賀 84	遺跡西北端基部
44	秋	鹿角	案内II	段丘	後中葉以降?		東捨場地区。4基。包含層中、不整形・雑然、配石下坑なし	平賀 84	個々の遺構はより時期限定
					後中葉以降?		北東捨場地区。1基。包含層中、配石下坑なし。約1.3×0.4mの二列の配石	平賀 84	
					後中葉以降?		北捨場地区。1基。包含層中、配石下坑なし。1.8×1.6m範囲の雑然とした組石	平賀 84	
					後中葉以降?		6基。SQ303～308。配石下坑なし。規模1～2m。不定形	平賀 84	
					後中葉以降?		上記以外の配石遺構25基。下坑あるなし。104複列の放射状。207隅丸長方形	平賀 84	
					後中葉以降?		SQ02。直線状15m。川に沿う? 礫は疎ら。配石下坑なし	平賀 84	
					後中葉以降?		SQ01。弧状列石(直径3.5m)。配石下坑なし	平賀 84	
					後中葉以降?		組石10基?(1、2号連続?)。配石下坑なし。直径約2.5mの環状1基	平賀 84	
					後中葉以降?		「環状列石」。組石5基(「日時計組石」1)。	平賀 84	
					後中葉以降?		配石5基。SQ01(下坑)・05、02(下坑)・04(下坑)・03の三カ所に離れる	平賀 84	
					後中葉以降?		SQ04。一辺2.5～3mの三角形形状に礫「敷き詰め」。被熱痕、配石下坑なし	平賀 84	
					後中葉以降?		配石2基。SQ02、05。小規模(1m以下)小礫組石? 被熱痕、配石下坑なし	平賀 84	
					後中葉以降?		野中堂と万座(40m超)。内帯外帯間日時計組石。図化と組石分類、下坑調査	平賀 84	
					後中葉以降?		一本木後口配石遺構群(野中堂250m北東。40m以上弧? 列石に沿う組石群)	平賀 84	
					後中葉以降?		万座の北東、配石列、「環状配石遺構」群。環状列石それぞれ南西「配石遺構群」	平賀 84	
					後中葉以降?		環(環?) 状展開掘立柱建物群、配石遺構9基(直線列石はか)はその内側に	平賀 84	
					後中葉以降?		配石遺構21基。多様(下坑も)。2～4号一連のもの?(4×3.5mの範囲)	平賀 84	
					後中葉以降?		配石遺構1基。5.1×3.3mの範囲。下坑なし	平賀 84	

No.	県	市町村	遺跡名	立地	時期 土器型式	大	配石の特徴	掲載 文献	備 考
45	秋	鹿角	玉内	段丘	晩期前半		石棺墓。組石墓。配石下坑。配石土坑。組石、立石、蓋石。日時計。配石遺構1基。「日時計状」。直径2m円形に縁石、内側に放射状の置石、中央立石	阿部68 下坑不明。下記A地区隣接	
46	秋	鹿角	駒林	段丘	晩期前半		配石墓（礫縁取り?充墳?一部立石、耳飾出土）4基。配石遺構1基（立石）	県教88 SK05配石土坑?	
47	秋	大館	矢石館	段丘	縄文時代		「集礫遺構」1基（3～25cmの礫）。3.2×1.8mの矢印状（北向き）。下坑なし?	県教82	
48	秋	北秋	伊勢堂岱	段丘	晩期前葉		組石棺墓5基。「棺端に立石、棺側に積石」「立石の他、環状組石を伴つものも」	奥山54 直線列石2基（「石棺群区画?」）	
49	秋	北秋	狐岱	段丘	後期前葉		環状列石3基（Aメロン状。掘立柱建物）。ほか配石遺構51基。SQ563特徴的	県教99 立石遺構。SQ101は住居?	
50	秋	北秋	深渡A	段丘	前末～中末		環状列石Dの発見。4基の時期関係の推測。配石遺構	北秋11 史跡指定のための確認調査	
51	秋	北秋	深渡	低段	晩期後葉		配石遺構6基（詳細不明）。組石棺墓12基、蓋石、円盤状土製品が周囲から	大野90 範囲確認調査。A区。下記文献も	
52	秋	北秋	地藏岱A	段丘	晩期後葉		配石遺構1基。約6×1.5m隅丸方形の半分状。一部二～三列。50cm前後の川原石	県教90 範囲確認調査。B区	
53	秋	北秋	森喜家ノ前A	段丘	中期末～		SI29。堅穴住居複式炉側の壁とその外側約1m離れて沿う礫列。約3mの隅丸方形	県教06 低位段丘。「廃絶後に配石」	
54	秋	北秋	天津場C	段丘	後晩期		「石棺」再調査の結果、土坑が連結し周囲に柱穴→上屋を伴う中世の炉。類例あり	県教99 最低位段丘。調査後埋戻保存	
55	秋	北秋	向様田B	段丘	後晩期		「石棺」再調査の結果、土坑が連結し周囲に柱穴→上屋を伴う中世の炉。類例あり	県教06 「石棺」現地保存不可で再調査	
56	秋	北秋	向様田C	段丘	後晩期		SI2001。堅穴住居跡の壁に礫が巡る。3.9×3.3mで複式炉。「廃絶後に配石遺構へ」	県教06 氾濫原に検出された唯一の住居	
57	秋	北秋	向様田A	段丘	晩期前半		組石1基。0.45×0.33m楕円形、底に平石。浅い掘り込みに構築（掘方?）。	北秋06	
58	秋	北秋	向様田D	段丘	晩期前半		「配石遺構」1基。SQ429。0.9×0.7mに礫疎ら。浅い掘り込みあり? 配石土坑あり?	県教06 「中期後葉の住居炉?」	
59	秋	北秋	水上ミ	段丘	晩期前葉?		「配石遺構」1基。SQ5569。0.7×0.7mの範囲に礫、抜き取り痕。他に配石土坑あり?	県教10 炉?	
60	秋	北秋	二重島C	段丘	後晩期		「礫の詰め込まれた土坑」 ※文献未見のため詳細不明	県教08 県埋(2007)による	
61	秋	北秋	漆下	段丘	後晩期		土坑を伴わない配石17基。配石土坑多数。「配石」意図的か不明瞭	県教03 遺跡東部配石多、西部土坑多	
62	秋	北秋	橋場岱A	段丘	後晩期		土坑を伴わない配石2～3基。直径4m列石含む。配石土坑?	県教03	
63	秋	北秋	橋場岱C	段丘	後晩期		配石土坑32基以上。「環状配石遺構」大規模雑然だが、一部石罫炉、組石状	県教03 配石遺構のうち石罫炉状22基	
64	秋	北秋	橋場岱B	段丘	晩期前半		配石土坑12基。土坑なし配石27基。「配石に伴って石剣類出土4例」	県教09 「石罫炉状なし」。雑然とした印象	
65	秋	北秋	橋場岱F	段丘	晩期前半		配石遺構1基。2.5×1.8mの範囲。「不整な掘り込み内に充墳」。石棒、石剣類破片	県教05 組石状	
66	秋	北秋	橋場岱D	段丘	晩期前葉		配石土坑?1基（SK129）。配石遺構SQ127は石罫炉（約1.8×1.3m）?	県教10 「立石遺構」SQ101は柱穴?	
67	秋	北秋	橋場岱E	段丘	後晩期		※文献未見のため詳細不明	森吉01 漆下(県教11) 第1～2表による	
68	秋	北秋	日廻岱B	段丘	後晩期		※文献未見のため詳細不明	森吉03 漆下(県教11) 第1～2表による	
69	秋	北秋	日廻岱A	段丘	後晩期		※文献未見のため詳細不明	森吉04 漆下(県教11) 第1～2表による	
70	秋	北秋	日廻岱C	段丘	後晩期		「集石」1基。約1.4×1mの範囲に概ね拳大の礫不整形に集中。礫は5割以上石器	県教11 土器破片など「廃棄した結果」	
71	秋	北秋	日廻岱D	段丘	後晩期		配石土坑80（袋状も）、配石28基。SQ225幾何学的（5×2.8m）。218～220列石	〃 SQ223弧状は住居壁? 副葬品	
72	秋	北秋	日廻岱E	段丘	後晩期		SM800 石種階段状遺構。斜面急こう配に約16mの列石。一部二列。浅い掘方	〃 扁平礫を水平に配す。小又川へ	
73	秋	北秋	日廻岱F	段丘	後晩期		「配石遺構」1基。0.9×0.7m略楕円形。「石罫炉想定したが、焼土等検出されず」	北秋07 配石下坑、掘方なし。石罫炉?	
74	秋	北秋	日廻岱G	段丘	後晩期		3.5×1mの長楕円形。厚さ0.32m。4面の配石? 配石下坑、掘方なし	北秋07 埋没沢に構築?	
75	秋	北秋	日廻岱H	段丘	後晩期		SQ61、64。組石?2基。規模1.5m以下。不整形。配石下坑、掘方なし	北秋08	
76	秋	北秋	日廻岱I	段丘	後晩期		SQ60。組石?北側は散在。規模2m前後の範囲。不整形。配石下坑、掘方なし	〃	
77	秋	北秋	日廻岱J	段丘	後晩期		SQ65。組石? 規模1m程度。配石下坑、掘方なし。時期は出土土器から	〃 出土土器は青木畑式新期?	
78	秋	北秋	日廻岱K	段丘	後晩期		SI22。「壁際に配石を有する住居」1棟。外側に開いたコ字状。0.8×0.6m	北秋06 柱穴を伴う。出入口?	
79	秋	北秋	日廻岱L	段丘	後晩期		「小規模な配石遺構」→写真等なく詳細不明	県教97 範囲確認調査	
80	秋	北秋	日廻岱M	段丘	後晩期		「小規模な配石遺構」→写真あり	県教97 範囲確認調査	
81	秋	北秋	日廻岱N	段丘	後晩期		「土坑を伴わない配石」。SQ2325配石遺構。約4.2m直線状ほか。配石下坑あり	県教05 「楕円形途中の礫が抜けた?」	
82	秋	北秋	日廻岱O	段丘	後晩期		土坑を伴わない配石。6基。小規模散在	〃	
83	秋	北秋	日廻岱P	段丘	後晩期		「配石を伴う土坑」11基? 配石も土坑も多様。SK2500～2505、2517、2525等	〃 後期初頭環状集落	

No.	県	市町村	遺跡名	立地	時期 土器型式	大	配石の特徴	掲載 文献	備考
69	秋	北秋	姫ヶ岱A	段丘			石棺墓。組石墓。配石下坑。配石土坑。組石、立石、蓋石。日時計。		
70	秋	北秋	姫ヶ岱D	段丘	縄文時代?		※文献未見のため詳細不明 「配石遺構」1基。SQ10 柱穴状掘り込み上に疎らに配石?	森吉99 漆下(県教11) 第1～2表による 県教00 中期末～後期初頭土器最も多い	
71	秋	北秋	姫ヶ岱C	段丘			※文献未見のため詳細不明	森吉99 漆下(県教11) 第1～2表による	
72	秋	北秋	桐内A	段丘	?		「配石遺構」1基=SQ145(直径60cm程度)は石囲炉?	県教02	
73	秋	田沢	湯前					田沢98 報告書未見、詳細不明	
〃	〃	〃	〃	〃	後期		範囲確認調査で「環状配石遺構」2基検出。「特殊な住居?」	県教99	
〃	〃	〃	〃	〃	後期前葉?	線	(ほぼ直線列石(下坑無)8? SQ173 最大長11m、一部雑然組石。配石土坑14?)	県教00 SI202住居壁半周配石	
74	秋	秋田	松木台皿	段丘			※配石遺構4基の説明報告書にない?	県教86 上面配石土坑あり	
〃	〃	〃	〃	〃	中期後葉?		※環状集落中央広場に配石土坑(SK62)ほか?個々の土坑の記載なし?	県教01	
75	秋	大仙	上ノ山II	段丘	前期後半		配石遺構3基(下坑なし)。中央部遺構群中心にSQ219(1.5×1.5mの範囲に環)	県教88 最大SQ241は3.2×1.9mの範囲	
76	秋	横手	手取清水	段丘	?		配石遺構1基。SQ237。45×40cm範囲に組石? 5～15cmの礫。SK200 土坑近接	県教90	
77	秋	横手	小田IV	段丘	?		配石遺構」6基。50cm以内の小規模で礫少なく、下部柱穴状2基。出土遺物なし	県教94 配石土坑、立石を伴う柱穴状も	
78	秋	横手	平鹿	低段	晩期前半?		「配石遺構」14基のうち4基下柱穴状?その他小礫疎ら。配石土坑SK3222	県教98 覆土中礫多土坑多し	
79	秋	横手	長連寺	扇状	C1～A式?		配石遺構」11基。規模・形多様。一部下坑。SQ006 扇状2.1×1.2m 縁石置石。	県教83 SQ001径5m前後弧状	
80	秋	横手	才の神	段丘	後期後葉		直径約5mの「環状配石遺構」が長さ約40m(調査区幅約8m)の配石群中央に	横手07 配石下部土坑も。石棺状も	
81	秋	由利	象湯	段?	大木8b式期		配石土坑3基。立石。石棒(73.5cm)が斜めに立った状態で出土。掘方未確認	県教80 立石は土坑長軸端	
82	秋	象湯	ヲフキ	丘陵	前期後半?		配石土坑3基? SK18 立石、副葬品石匙。SK08も立石? SK25 上面組石?	県教90	
〃	〃	〃	〃	〃	縄文時代?		「配石遺構3基」。柱穴状土坑に立石? 「中近世の柱穴の可能性」	県教01	
〃	〃	〃	〃	〃	後期後半		I区。不整形組石(下坑無)12基以上(SQ13 複合?)。配石土坑数基(SK89)。	県教03	
〃	〃	〃	〃	〃	縄文時代		皿区。不整形組石(下坑なし)2基(SQ3001 長さ4m)。	〃	
83	青	佐井	糠森	海段	十腰内I b 主		配石のみ4?。配石下坑多数、配石、覆土中位下位底面も。底面直上石囲炉様配石	佐井04 「掘立柱建物群」、中央広場	
84	青	むつ	水木沢	低段	?		配石2基? (1,2号連続?) 配石下坑(フラスコも)。別の墓塋(人骨片)1基底配石	県教77 前末～中前集落主。後期前半も	
85	青	むつ	酪農(3)	海段	十腰内I式	?	「環状列石」(径20m。礫一周せず。下坑なし。内側削平)。埋設土器を伴う配(→続く)	長谷23 石遺構2基(巨礫)。報告書未	
86	青	東通	札地	海段	後期初頭?	帯	帯状2基。平面形不整形弧状。二重三重に積み重ねたり敷石状の部分も	江坂59 ほほ青森県史による	
87	青	六ヶ	大石平・II区	海段	「後期?」		礫散在。下坑なし	県教85 最下位段丘。遺構?	
88	青	六ヶ	大石平・III区	海段	?		礫と採取痕、長さ約18m弧状。中央にも同様のものがブロック状に、一部配石下坑?	〃 最下位段丘。遺構写真なし	
89	青	六ヶ	大石平・IV区	海段	後期		12×8mの範囲に1m程度の小規模な組石12基。配石下坑なし。立石。安山岩	県教86 「吹越烏帽子岳に向かっている」	
90	青	六ヶ	大石平・V区	海段	後期前葉		約5mの直線状列石。改変? 「皿区と一連のもの」→「直径25m前後の環状列石」	県教87 一部配石下坑。30cm程度の礫	
91	青	六ヶ	大石平・X区	海段	?		先端曲がる約6mの直線状列石と隣接する石囲炉状配石、約3mの直線状列石	県教87 一番高。石囲炉状1.02×0.81m	
92	青	六ヶ	大石平・XI区	海段	?		組石2基(片方配石下坑あり)	県教87 遺構全体区等に「3号配石」	
93	青	六ヶ	富ノ沢(2)	海段	後期初頭?		「配石遺構」1基。3×2.5mの範囲に不整形散在。配石下坑なし。近くから土器片	県教91 最下位段丘。遺構?	
94	青	六ヶ	上尾駈(2)	海段	?		「配石2」。1号「2個の石(扁平1は台石?)」。2号大小礫散在で配石下坑なし	県教79 102号遺跡。2号は遺構でない?	
〃	〃	〃	〃	〃	?		「配石遺構」。組石? 1.05×0.9m円形5個礫。礫38～24cm。配石下坑なし	県教88 最下位段丘。遺構?	
〃	〃	〃	〃	〃	後期前葉??		「配石遺構54基(環状列石)」。一部組石だが概ね散在。採取痕。一部配石下坑	〃 II 最下位段丘。「環状集落」?	
95	青	六ヶ	弥栄平(4)	海段	?		「石棺墓」1基。一部被熱。隣接して土坑墓?(上面から甕沢式「甕棺」か粉々出土)	県教87 下位段丘	
96	青	六ヶ	沖附(2)	斜面	?		配石下坑1、組石(下坑無)1基。	県教86 甕沢式集落跡。切断壺、狩猟文	
97	青	六ヶ	弥栄平(1)	海段	?		組石1基。大礫(52×36cm)の周囲に礫を配す。配石下坑なし	県教86 甕沢式埋設周囲。他調査で人骨	
98	青	六ヶ	弥栄平(2)	海段	?		組石?1基。1.68×1.05mの長楕円形の範囲。付近に土坑(「関係不明」)	県教78 礫小さく、集石に近い	
〃	〃	〃	〃	〃	?		「集石遺構」。3×1.5mの範囲に散在。「意図的な配置を示さず」。配石下坑なし	県教84 遺構ではない? 中末～後前主	

No.	県	市町村	遺跡名	立地	時期 土器型式	大	配石の特微	掲載 文献	備 考
99	青	五戸	館町	段丘	後期前葉?		石棺墓。組石墓。配石下坑。配石土坑。組石、立石、蓋石。日時計。	倉戸98	報告書未見、青森県史による
100	青	八戸	沢堀込・A区	斜面	後期前半?		径約3.5mの円形に内部3基の土坑の周りに配石。中央土坑間に土器棺	倉戸98	報告書未見、青森県史による
	青		沢堀込・B区	斜面	後期前半?		「集石」1基。約80×50cmの範囲。石組? 配石下坑なし。被熱数個	倉戸99	石組の間から土器片出土
	青		沢堀込・C区	斜面	?		配石下坑3~4基。石組坑内落ち込みあり。周囲に焼土や柱穴状ピット。「集石」?2基		「集石」→「石組散乱」?下坑なし
101	青	八戸	丹後谷地	段丘	?		「集石」7基。配石下坑なし。一部被熱		調査区は谷等狭み連続せず
102	青	八戸	田面木平(1)	段丘	後期		3.1×2.6m台形状の範囲約350個の扁平な自然石。配石下坑なし。一部被熱	八戸86	類例→長谷堂貝塚SQ06註2
103	青	八戸	風張(1)	丘陵	後期前半		「第1号集石遺構」1。50×35cmに8cm程度の扁平礫集中。配石下坑無。被熱無	八戸88	早期の集石と地点異なる
	青				後期以前		「集石遺構」3基。3×3m以内。10cm程度の小礫密集。不整形。下坑なし	八戸91	遺跡中央農道部分調査区西端
104	青	八戸	是川中居	低段			「集石遺構」1基。3×3m以内。10cm程度の小礫密集。不整形。下坑なし	八戸08	老人ホーム調査区中央
	青				弥生前期		集石遺構1基	八戸77	文献未見のため詳細不明
	青				晩期後半~		B区。配石遺構(確認のみ) ※文献は、八戸12文献表1によるが詳しい記載なし	八戸02	
105	青	八戸	牛ヶ沢(4)	丘陵	?		K区配石遺構1基(立石? 下坑あり)。O区配石遺構1基(2.1×1.5m敷石状)。	八戸06	両方とも盛土整地後
	青				?		「配石」。組石1基。1×0.5mの梯子状。長軸両端立石。配石下坑なし。立石炉隣接	八戸97	炉の一部? 蛭沢式土器多め
	青				?		「石組」1基。0.3×0.3mの十字状。焼土、配石下坑なし		石囲炉?
	青				?		「集石」2基。90×55、70×60cmの範囲。礫20cm以下? 破碎礫多。被熱等不明		早期土器出土僅か
	青				縄文時代?		「2号配石」。組石。3×1.4m不整形。10~130cmの礫(30~50cm多)。配石下坑なし	八戸01	
	青				後期中葉~?		「3号配石」。1.8×1.2mに10~40cmの礫92個密集。住居覆土中	八戸01	「集石炉?」
	青				縄文時代?		2m前後の間隔で並んだ組石3基。2~0.7mの範囲で不整形。調査区の高位置	八戸04	配石下坑なし
106	青	八戸	荒谷	低段	晩前葉前後?		6基の組石?直線状に並ぶ。配石下坑なし(集石2下にはあり? = 137号土坑)	八戸07	B区
	青				晩末~弥生前		「環状」。組石?群。配石下坑一部対応。周囲に小柱穴群、遺置川系壺。「緑石好む」		A区。挟入柱状片刃石斧
107	青	南部	西張(2)	低段	後前~中葉		「集石遺構」1基。9.7×5.8mの範囲に礫が11のブロックを形成。小礫。下坑なし	県教98	切り株周囲。早期集落跡も
108	青	南部	西張(3)	低段	早期		「配石遺構」1基。約1.6×1.5mの範囲に安山岩の礫が「V字状に配され」。礫は疎ら	県教96	「礫を台石とした作業場」
109	青	南部	水上	丘陵	後期初頭?	不	全容不明。17m以上。一部弧状、直線状。「組石」? 一部石垣状。近くに焼土	名川04	「小牧野式配列」? 註3
110	青	三戸	沖中	沖段	後期前葉		組石5基(下坑4)。下坑ないのが最大規模(1.5×1.2m)で他と大きく離れる(46m)	三戸00	報告書該当部分のみ実見
111	青	三戸	泉山	低段	大木10式期		組石2基? 配石下坑、第2号墓壙とはズレ。	県教76	
	青				晩期		「敷石遺構」。環状列石」に沿う。拳大の礫の不規則集合体で、下部土坑検出		捨て場の一部?
	青				中期		「環状列石」。約2/3範囲外続く。約8mの直線状列石。一部組石状		「城山、北上山系望む展望」
	青				~晩期前半		? 上記「環状列石」に接続。約50m離れる。連続した列石というより組石が点在	県教95	調査範囲内全長約25m
112	青	三戸	関	低段	後期前半?	環	径30m ※青森県史p.596による		在家平遺跡とも
113	青	階上	野場(5)	丘陵	中後~後初		配石9基(7~18号=配石下坑無は一連と判断)。下坑あり5(3フラスコ)。立石	県教93	南区の101号は配石炉か
114	青	階上	藤沢(2)	海段	縄文時代?		2.2×1.1m 楕円形に疎らに礫。一部黒色付着物、黒色変化。配石下坑なし。磨石出土	県教11	中位面。煮沸用の集石も検出
115	青	階上	道仏鹿糠	海段	後期以降		「集石遺構」。組石?下土坑状の掘方」。全て砂岩	県教17	中位面。遺跡内煮沸用集石も
116	岩	洋野	西平内I	丘陵	蛭沢式期?	?	屋際。内帯と外帯?二つの弧。内帯を覆う整地層。外帯は組石墓群? 掘立柱建物	県埋17	階上。後期初頭集落上構築?
	岩					環	内帯環状列石(径30×26m)。列石付属するトゲ状の石列。外帯58号隣接組石	洋野19	ハンドボレーリング調査
	岩						環状列石、整地層の広がり確認を目的としたが、調査面積少なく全容不明	洋野20	トレンチ調査(5つで29m)
117	岩	洋野	鹿糠浜I	丘陵	後期前葉?	?	大部分調査範囲外。環状? 礫は疎。一部直線並ぶ。範囲内配石下坑無。堅穴近く	県埋21	崖近く。西平内I遺跡から6km
118	岩	洋野	南戸類家II	丘陵	後期前葉?	?	? 列状?(全容不明)。散漫だが、一部組石?	洋野23	試掘トレンチ625m(風力発電)
119	岩	軽米	長倉I	丘陵	後~晩期?		「集石」1基(小礫が2×0.5m。「遺構でない?」。「立石」1基(板礫散在)	県埋00	立石「掘り込みなし?」
120	岩	軽米	板子屋敷3	丘陵	後期後半?		堅穴住居居土上下に配石。上は半径1.5mの半円。下は40cm前後の小礫組石状	県埋08	上配石、被熱、付近焼土・土器

No.	県	市町村	遺跡名	立地	時期 土器型式	大	配石の特微	掲載 文献	備 考
121	岩	軽米	大日向Ⅱ	丘陵	?	大	石棺墓。組石墓。配石下坑。配石土坑。組石、立石、蓋石。日時計。	泉理 86	
〃	〃	〃	〃	〃	→	〃	配石遺構1基。1.5×0.6m組石状。下坑なし。晩前期葉埋設土器隣接	泉理 95	03・04下坑? 04は5m
〃	〃	〃	〃	〃	縄文時代	〃	6基。SH05中期末、06後期後～晩前期、03・04晩前半、01・02弥生前半	泉理 98	あまり集石らしくない
122	岩	軽米	君成田Ⅳ	丘陵	縄文時代?	〃	「集石遺構」4基。65cm以下の小規模。下坑なし。早期の集落はあるが、(→緑)	泉理 83	炬? 縄文後前期葉等集落
123	岩	軽米	千本松	丘陵	後期前葉	?	0.8×0.8m程度のハ字状。礫3。掘方、焼土、炭化物、被熱未確認	軽米 20	確認調査。330㎡。全容不明
124	岩	九戸	道地Ⅲ	丘陵	晩期中葉	?	「環状配石」。疎だが組石? 一部1m超す巨石露頭。配石下坑未検出	泉理 83	チャート質粘板岩。C2式後半?
125	岩	九戸	鎌Ⅱ	丘陵	? (時代も)	〃	「集石遺構」。1.8×0.8mの範囲で弧状に雑然とした小礫の集合体。配石下坑無	泉理 84	被熱。「板状の小石主」。粘板岩
126	岩	九戸	田代Ⅳ	丘陵	中期中～後	〃	配石下概ね土坑(坑壁沿う)。立石3(下坑1琥珀細片)? 下坑1耳飾土製品	泉理 95	土器埋設遺構(硬玉2) 1
127	岩	二戸	川口Ⅰ	段丘	後期前葉	〃	直径約4m環状、調査区外続く。配石下、柱穴状土坑。住居状遺構隣接	泉理 07	住居壁と思われる
128	岩	二戸	寺久保	丘陵	?	〃	50×50cmの隅丸方形。焼土無	泉理 96	石囲炉。後期初頭集落跡
129	岩	二戸	堀野	段丘	?	〃	組石多数、下坑なし。トレンチ調査で全容不明	福岡 65	S28,37年草間後一氏調査
130	岩	二戸	荒谷 A	段丘	中期中～後?	〃	「配石土坑」1基。直径約1m、深さ36cm、底三段。上部に礫集中(図なし)	泉理 83	中期中～後葉集落跡
〃	〃	〃	〃	〃	中末～後初	?	? 外帯約50×40mの楕円形。内部に礫集中(図なし)	関 92	調査原因店舗建設中止
131	岩	二戸	下村 B	段丘	中末～後前?	?	? 11m列石調査範囲外続く。一部組石。配石下、土坑ないもの多い。註4	泉理 83	溝区画? 荒谷 A 遺跡南隣接
132	岩	二戸	馬立Ⅱ	丘陵	蛭沢式期?	〃	平面形鼎立具状(4×3.5mの円形に開口部)。角礫列石。溝状陥し穴に切られる	泉理 88	(焼土も含め) 住居の縁石か
133	岩	二戸	上杉沢	段丘	晩期中葉	〃	「配石遺構」一か所。「集石遺構」一か所。堅穴住居配石炉(「上杉沢石(→緑)	浄法 01	閉炉」等) 目立つ
〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	「集石遺構」1基(写真図版7)	浄法 03	昭和60年度調査区
134	岩	二戸	吉田館	丘陵	後期後葉	〃	堅穴住居の壁に沿って2基→別々の住居の斜面下方、上方。「土留め?」。	泉理 08	中世城館の下段高位面
135	岩	二戸	柿ノ木平Ⅲ	丘陵	? (時代も)	〃	全容不明だが4以上。小礫の列石状集合体。掘方無。配石下坑未検出	泉理 85	調査範囲外続く
136	岩	一戸	上野 B	段丘	後前～中葉?	不	10×7m以上。調査範囲外続く。配石下坑なし。遺物混然と出土	一戸 83	故意ではない? 捨て場の一種?
137	岩	一戸	田中 2	段丘	中期末? ?	〃	「石組遺構」1基。石組下土坑(1.1×0.8m程度不整楕円形)	〃	土坑は「石の掘方」
138	岩	一戸	田中 1	段丘	中～後期?	〃	5×4.5mの範囲。雑然として概ね疎だが密な部分も。配石下坑なし。斜面下方	〃	故意ではない?
139	岩	一戸	馬場平 2	段丘	中期後半? ?	〃	「立石遺構」1基。「IV層中に掘り込まれ直立」※写真、微細図面なく詳細不明	一戸 83	中期後半集落(8a～b式期主)
140	岩	一戸	御所野	段丘	中期後～末	〃	中央部の配石遺構群とその周辺盛土を中心とした集落。東西二群間空白地	一戸 93	巨石。立石。組石下未調査
〃	〃	〃	〃	〃	大木 10 新?	〃	南側三か所、V区堅穴建物群周辺二か所、GA70トレンチ南側に四か所配石遺構	一戸 15	総括報告書。時期は上記も?
141	岩	田野	和野新墾神社	海段	後初～前葉?	不	15m以上の列石?調査範囲外続く? 一部組石状? 配石下、土坑対応せず	田野 11	報告書記載不明瞭。螢沢式主
142	岩	田野	館石野 I	海段	後期前葉	蛇	列石 2 基。1 号列石(立石を単位とした組石遺構群を連結。下坑)	早稲 97	等高線沿う。小牧野式石積
〃	〃	〃	〃	〃	～十腰内 I a	蛇	3 号列石の確認。1 号列石の全容確認(蛇行 80m 以上)。配石土坑検出	田野 07	2号列石組石湯舟沢Ⅱ類似
143	岩	宮古	崎山貝塚	〃?	中中～後前	〃	中央広場立石(検出面上 1m。掘方)。大型石棒埋設 1 基。配石遺構 11 基	宮古 95	環状集落
144	岩	宮古	菅ノ沢	扇状	後初～前葉	?	12m以上の列石調査範囲外へ続く。先端約 3×2mの環状。下部遺構なし	宮古 06	整地造成。立てて配石
〃	〃	〃	〃	〃	弥生後期	〃	配石下土坑 1 基。90×70cmの楕円形、調査範囲外続く	〃	時期←底面土器片+遺構重複
145	岩	宮古	近内中村	扇状	後期後半	〃	直径5mの「環状配石遺構」中央土器埋設石囲炉。配石下坑 5 基?	宮古 01	概報のみ。「環状・」住居?
〃	〃	〃	〃	〃	晩期前半	〃	列石と組石。重なるように獣骨ブロック(ツキノグマ牙垂飾品 8 点出土)。石皿立てて	〃	上杉沢型石囲炉。菅ノ沢隣接
146	岩	宮古	田鎖車堂前	沖積	大木 9a 式～	線	列石 3。二条の並行する直線(間 1.2m 前後)。片側 13m で片端が集石 10 に続く	泉理 20	
〃	〃	〃	〃	〃	中末～後初	〃	「集石」15 基(下坑あるなし)。列石上記他 4 基(一部立石。一部列石)	〃	
147	岩	宮古	腹帯	段丘	中後～後前	〃	改變と小規模調査のため全容不明。大型立石。焼土、被熱無。炭化物微量	新里 91	検出のみ。配石古くから周知
148	岩	八幡	越戸Ⅱ	丘?	縄文時代?	〃	25×25cm程度の「炬址状配石遺構」。焼土、被熱無。炭化物微量	泉理 81	石囲炉と思われる。中期末?
149	岩	八幡	曲田Ⅰ	扇端	後・晩期	〃	「集石遺構」3 基(下坑 1 → 無頭石棒出土)。1 基「溝を流れる水を堰止める施設」?	泉理 85	
150	岩	八幡	松尾釜石	丘陵	晩期前葉?	環	配石 11? 二重環状(中央炬?) 4? (径4m程度3、13ml)。立石。配石下坑無?	八幡 17	二重環状は堅穴住居? 岩手山

No.	県	市町村	遺跡名	立地	時期 土器型式	大	配石の特徴	掲載 文献	備 考
151	岩	滝沢	仏沢Ⅲ	扇状	前期初頭?		石棺墓。組石墓。配石下坑。配石土坑。組石、立石、蓋石。日時計。 配石遺構18基。1号配石(5.4×3.2m)堅穴壁上に・焼土)。ほか配石下坑多	滝沢87	組石緩やか。焼土は炉か
〃	〃	〃	〃	〃	前期前葉		「配石墓壙群」(写真のみで、文章記載なく詳細不明)	滝沢08	
152	岩	滝沢	湯舟沢Ⅱ	低段	後期前葉	不	「環状列石」(26×16m。(1)状。列石と組石からなる。「内側土坑200以上」)。	滝沢91	配石遺構3基。保存。岩手山
153	岩	盛岡	向館	段丘	中期後葉～?		約7m直線列石。周囲に組石?1基、焼土、炭化物分布。配石下坑無。埋没沢内	泉理94	検出遺構群から50m
154	岩	盛岡	上米内	低段	後期中葉		RH01配石遺構。直径5.8m。列石内部分石	泉理95	住居?
〃	〃	〃	〃	〃	後期?		RH02配石遺構。4×1.5mの不整帯状(敷石)	〃	写真図版123に「RH04遺構」あ
〃	〃	〃	〃	〃	晩期前葉		RH03配石遺構。3.5×2.5mの不整形。「東寄り石棒の破片多く出土」	〃	るが本文中に記載なし
155	岩	盛岡	落合	沖段	後期		配石遺構5基。配石下坑ありなし。直径3m円形、2.5×1.6m楕円形ほか	盛岡89	1、2次調査。年報のみ?
〃	〃	〃	〃	〃	後～晩期		配石墓	〃	1次調査。年報のみ?
156	岩	盛岡	川目A5次	段丘	後前～後葉		配石遺構群4面。配石遺構54(下坑8)基。多様。RH186帯状(弧)	泉理12	厳密な定義認定
157	岩	盛岡	萩内	沖積	後晩期		配石土壙・貯蔵穴1.460基(ほとんど上部配石だが、フラスコ形など貯蔵穴様も)	泉理82	T136土坑組石然。付近大型土偶
158	岩	盛岡	湯沢	扇状	中末～後初		配石遺構5基(下坑一部)。8mの弧状、2.9mの直線列石、1.7mの組石状も	泉理81	
159	岩	花巻	稲荷神社	低段	後期中葉		「方形配石住居跡」(平地式)11棟。配石・「列石遺構」14基(2下坑)	花巻09	下坑覆土中焼土?配石坑?
160	岩	花巻	立石	低段	後初～晩中	?	高位段丘屋に沿って弧状配石遺構帯。単位の分かるのは11基(下坑4)	大迫79	1、2号日時計状組石(下坑あり)
〃	〃	〃	〃	〃	後晩期		配石遺構21基(後10、晩9)。「弧状敷石遺構」(後期。14.4×2m。外縁に立石列)	花巻06	上調査区から100m。盛土保存
161	岩	花巻	観音堂	中段	中末～後初		配石遺構地帯調査区(約25m×10m)。配石遺構6基(下坑未確認)	大迫86	範囲内容確認調査(トレンチ状)
162	岩	花巻	安俣6区Ⅳ	沖積	後初～中葉		「環状列石」5基(6～4.5m。2石囲炉)。「集石遺構」21基(下坑なし?)	東和99	住居か
163	岩	花巻	安俣6区Ⅴ	沖積	後期		「環状列石」3基(4.8～3.5m。1石囲炉)。「集石遺構」5基(下坑なし?)	東和00	「湯水期の住居?」
164	岩	花巻	清水屋敷Ⅱ	沖積	後期前葉?		配石遺構80基(下坑なし)。大沼の中島に立地。AG03(7.3×6.7m環状)	東和04	石囲炉17基。「祭祀域」?
165	岩	北上	大橋	段丘	晩中葉中心		配石遺構5基(盛土平坦面。3基下坑。2号に大型石棒)。「列石」1基(3m)	泉理06	列石は住居壁?
166	岩	北上	本宿	低段	縄文時代?		配石5基。SX001(径約1m円形)配石下坑	北上92	
167	岩	北上	柳上	中段	中末～後初		配石遺構19基。下坑4。2m(ほとんど1m)以下で小規模。形・組み方多様	泉理95	
168	岩	北上	樺山	丘陵	中期			北上68	1～3次調査結果。註5
〃	〃	〃	〃	〃	?		上段集落で検出。1基。土坑上部組石?	北上90	道路拡幅に伴う調査
〃	〃	〃	〃	〃			遺跡全体の1/4程度を調査。これまで37基の配石遺構確認	北上96	史跡環境整備のための確認調査
〃	〃	〃	〃	〃	中末～後初?		集落下方。配石36+5。日時計状。立石、中央・縁。石皿立石。配石下坑ない例も	岩田21	これまでの調査まとめ。図示
169	岩	遠野	張山	段?	後期初頭?		「弧状列石に伴う?」配石遺構2基(1下坑)。組石。H・126に大型立石?	遠野06	61住居壁配石、E22墓立石
170	岩	大槌	崎山弁天	斜面	後期中葉～		組石(1×1m程度。掘り込み)2基。ほか集石2か所(3×2mと全容不明)	大槌74	貝塚検出
171	岩	大槌	赤浜Ⅱ	谷底	後前～中葉?		配石遺構7基(下坑主)。全て並び、7号以外等高線に沿う列石主。6号護岸状	泉理18	7号は住居?館石野I遺跡類似
172	岩	大船	長谷堂貝塚	丘陵	後前～?		「敷石住居址」(後期前葉。埋甕)。配石4基。1号(晩期末。配石土坑)。	泉教72	4号(5×0.4m集石列)
〃	〃	〃	〃	〃	後晩期?		配石土坑1基(RH01上面配石。晩期末～弥生初頭)	泉理99	上面配石の残骸(後代の改変)
〃	〃	〃	〃	〃	中～晩期		配石遺構6基(中期3、後期2、晩期1)。下坑あり4	泉理01	
〃	〃	〃	〃	〃	中期中葉～		列石遺構1基(晩期末。5m弧状)。配石遺構5基(中期中葉～1、中期末2、	泉理04	中期末～1、晩期末～1)
〃	〃	〃	〃	〃	中後～後初?		配石8、敷石住居? SQ06(定型狭小扇状?)、10整然並列。立石。配石下坑無?	泉理20	16、17次調査(市道改良)
173	岩	陸前	門前貝塚	丘陵	中後～後中	?	「配石遺構1群」。一部弓矢状(7.6×4.9m。弓の部位により礫の形異なる)	陸前92	3.4×1m帯状、配石土坑
174	岩	奥州	杉の臺	低段	晩期前葉		A地区。「配石墓」3基。配石下米確認。礫3m以内に散在	水沢81	範囲確認調査
〃	〃	〃	〃	〃	→		上記下坑調査(1基のみ土坑検出)。B'地区。配石土坑1基(C1式期。→)	水沢82	〃。0.7×0.5m倒卵形に集礫
175	岩	一関	中野台	段丘	中末～後初?		「環状列石」1(直径6m前後一部弧のみ)。「集石遺構」24(一部下坑あり)、	大東97	「立石遺構」6基
176	岩	一関	上野平	丘陵	後期初頭?		「集石遺構」2基。3m程度。礫散在。下坑なし	泉理00	

VI 総括

今回の西平内 I 遺跡調査結果をもとに遺構分布のあり方、場の機能について見ていくが、まずそれらの前提として、出土遺物による遺構構築時期の判断を確認する。

〈遺構の時期〉

2020～22年度調査での出土遺物は第16図に示した縄文土器等でほぼ全てである。文様構成がわかる土器の中で横位に展開する渦巻文が施された資料(同図No.5)で見ると、3本組の沈線文が用いられ胴部文様帯が狭まる特徴から、十腰内 I 式新段階(児玉1999)に相当し、三陸道調査区 D 群 V 類(岩手県埋文2017)の範疇に入る。一方、三陸道調査区では十腰内 I 式直前段階とされる D 群 III 類から IV 類にかけての土器が主体であり、外帯組石墓群も概ねこの段階の構築と判断される。南丘調査区はやや後出の要素を持ち北丘から拡大して構築された遺構群の可能性がうかがわれる。

〈外帯組石墓群の構造〉

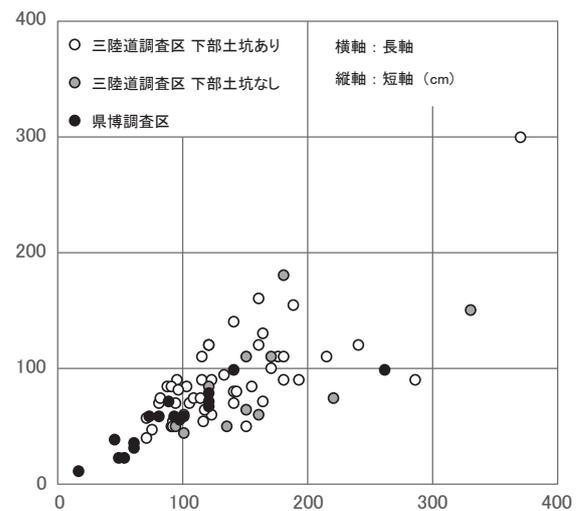
三陸道調査区の「外帯配石遺構群」では、62基中の3/4にあたる47基で配石下部土坑を確認しており、組石墓の集合体と捉えられる。その配置は全体として見れば環状列石南側から20～30m離れ弧状に分布する。細部を見ると必ずしも均整のとれた環状(弧状)とはならず、環状列石中心の真南(第18図A地点付近)に集中し、一部が西斜面の急崖に接する落ち際に広がるようである。

一方、今回実施したボーリング調査では、三陸道路線の南西側に接する礫反応の濃密な分布を確認した(B地点)。発掘による検出ではなく不正確だが、礫反応点の集中が複数認められており、同様の組石墓が分布する可能性が高いと思われる。その分布は前述のA地点から標高60m等高線に沿って带状に連続しており、A地点から西側で組石墓群が2列に分岐し、二重の組石墓群となっていた可能性があり得る。

上記の組石墓群は北丘の斜面部に立地して

おり、鞍部を隔てて南丘斜面と向き合う。この南丘北側斜面下部(D地点)では2021・22年度に組石遺構合計16基を確認した。狭い範囲に集中する状況は三陸道調査区内の組石墓群と類似する。分布域の標高も61～62m付近を中心としており、三陸道調査区と緩い谷を隔てて対峙する位置関係となっている。

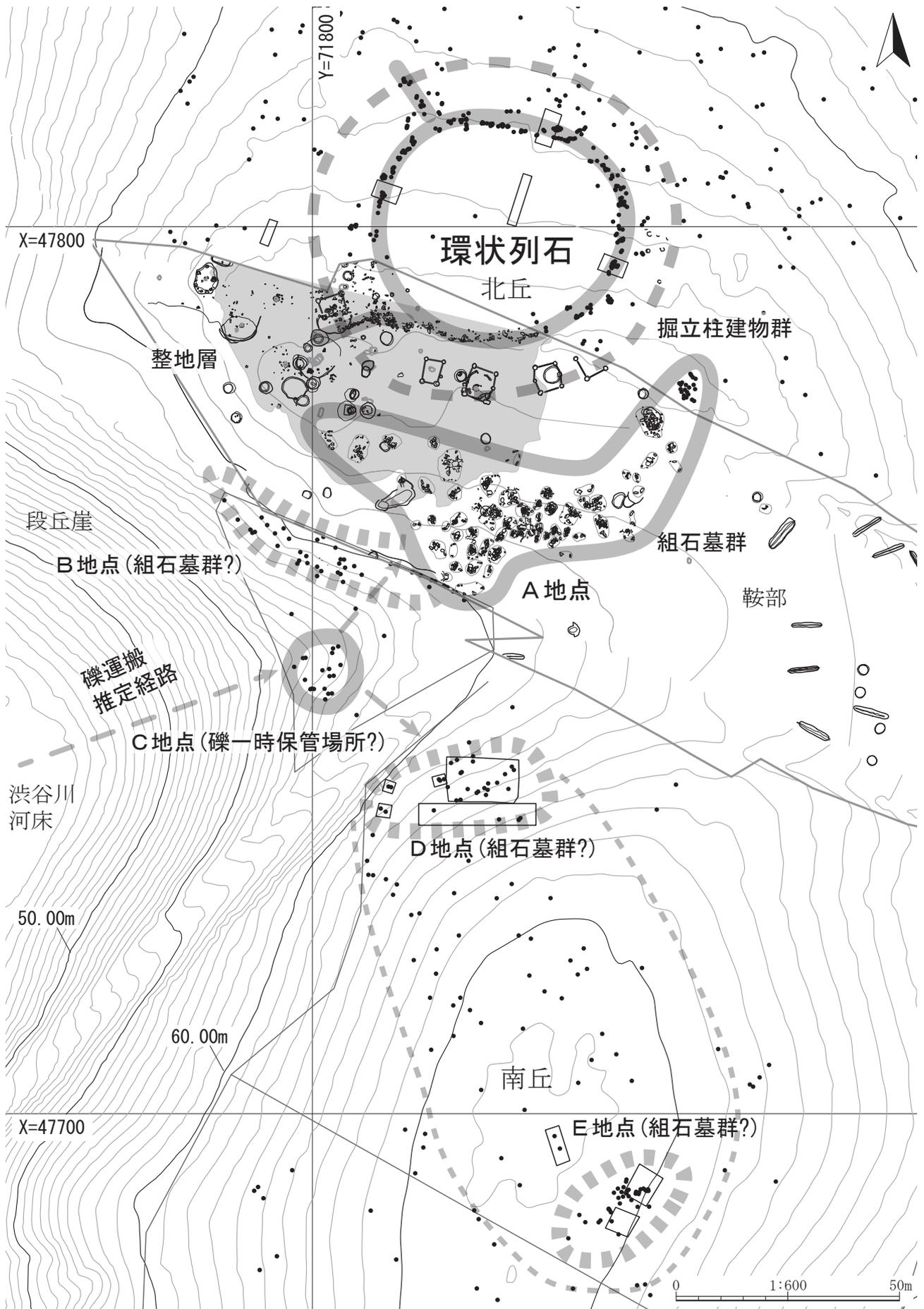
ただし、遺構規模としては第17図に示すように長軸1m未満が半数以上を占め全体に小ぶりであり、三陸道調査区で下部土坑が確認されなかった組石遺構(図中の灰色ドット)の規模に近似する。また、礫の組み方、集中度合いにはばらつきもある。小型のものは単に複数の礫が密接しているものを組石遺構と認識したおそれもあるが、20-1、21-1・2・3・6・10、22-4・5組石といった大型かつ規格的な形状を持つ遺構は、組石墓の可能性が高いと考えている。



第17図 組石遺構規模

〈南丘遺構群の構成〉

南北に向かい合う組石墓群が確認されていることから、北丘の環状列石に相当する構造物が南丘頂部に存在するかどうか、環状列石は複数なのかという点が遺跡全体の構造を考える上での重要なポイントになる。2020年度調査ではこの点を視野に入れて南丘頂部から南斜面にかけての試掘調査を行った。結果は20C区における組石墓1基の検出にとどまり、現時点では環状列石は北丘の1基と捉えている。一方、南丘頂部(E地点)から北斜



第18図 西平内 I 遺跡の構造推定

面（D地点）にかけては礫反応点の分布が連続する。この一帯にも組石墓が点在しD・E地点をつないでいる可能性があり、北丘の「墓域」と異なる、南丘「墓域」の存在が示唆される。

〈礫運搬ルートと一時保管場所〉

これらの組石遺構群、またその可能性を持つ礫反応点とやや違う様相を示すのがB地点の南側斜面で15mほどの範囲に礫反応点が集まる場所である（同図C地点）。傾斜10～15度の斜面上部、渋谷川に面した段丘崖に食い込む谷状地形の谷頭にあたり、平坦面は確認されずB・C地点と同様の組石墓が分布するかどうかは疑問がある。他の地点に比較し地面の勾配が急であること、また他の組石墓群が凸地形に立地するのに対し、C地点は谷地形の中にあって凹地形であるという点が異なる。

一方、この場所は渋谷川河床から環状列石を含む遺跡主要部へのアプローチルートとの関連を想定できる。遺跡西側は全体に急傾斜の段丘崖に囲まれる中で、この部分のみわずかに傾斜が緩く勾配25°程度となっていることがその理由である（第2・18図）。

環状列石、組石遺構群に使用された礫の多くが、第Ⅲ・Ⅳ章で記載したように渋谷川河床に存在する花崗岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩、砂岩の垂角礫で構成されていることから類推して、石材の運搬ルートにこの谷状地形が選ばれ、C地点の礫集中は運搬路上部での石材一時保管場所であった可能性はないだろうか。

発掘による検証を経ていないため現時点では仮説に過ぎないが、C地点から北丘の環状

列石、組石墓群、南丘の組石墓群の双方へアクセス可能な場所という点も見過せない。今後の調査では石材調達と運搬方法を視野に入れる必要がある。

〈整地層〉

三陸道調査区北半から北丘の洋野町教委調査地点にかけて広がる整地層1・2については、南丘各調査区では一切確認されなかった。組石墓群、環状列石を封印するかのよう広がる整地層の存在は本遺跡を特徴づける要素の一つだが、南丘に分布しないことを踏まえると、特に環状列石との関わりが強いように思われる。

なお、整地層下部の炭化物による年代測定結果では縄文晩期以降の実年代が得られており、第Ⅳ章4節に記載したように、現時点では整地が行われた年代は不明とせざるを得ない。

〈遺跡範囲〉

最後に本遺跡の主要部分の範囲について確認する。南丘から南側に連なる尾根とその両側斜面を対象として、ハンドボーリング調査を2020・22年度に実施した。尾根上平坦面においては礫反応点の分布は更に調査対象地外に広がる可能性を持つものの、斜面での分布は途切れるようである。尾根上にしても反応は希薄であり、単独の礫が散漫に分布する状態である。典型的な組石遺構はE地点一帯を南限としているものと考えられることから、その南にある鞍部までが凡その遺跡主要範囲と捉えられる。北丘の環状列石北東斜面に分布する礫反応点の広がりについては、継続中の洋野町教育委員会調査結果によって具体的な状況が明らかになるものと期待される。

引用・参考文献

- 青森市教育委員会 2004『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』青森市埋蔵文化財調査報告書第72集
青森市教育委員会 2006『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』青森市埋蔵文化財調査報告書第85集
阿部昭典 2023「環状列石と関連遺跡の調査研究の概略」『考古調査ハンドブック 24 環状列石』ニューサイエンス社
岩手県埋蔵文化財センター 2017『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集
金子昭彦 2020「十腰内Ⅰ式土器文化における配石の意味」『岩手考古学』第31号
児玉大成 1999「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』第11号
児玉大成 2009「縄文時代における環状列石の石材運搬について」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』14
小林克 2019「東北部環状列石研究の現段階」『物質文化』99
千田正博 2021「沿岸地域の様相」『環状列石の誕生』岩手考古学会第52回研究大会資料集
濱田宏 2023「岩手県洋野町西平内Ⅰ遺跡の調査」『考古調査ハンドブック 24 環状列石』ニューサイエンス社

Ⅶ 西平内Ⅰ遺跡の意義

熊谷常正

仙台と八戸を結ぶ三陸沿岸道路は、東日本大震災の復興事業と位置づけられ、県内各地で建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が全国の支援を受けて開始された。岩手県の北東端、洋野町でも複数の遺跡で発掘が始まった。そのうち青森県境に近い西平内Ⅰ遺跡で大規模な配石遺構を発見したと聞き、2014年夏に初めて現地を訪れた。

国道45号から山側の町道に入り、細い林道を抜けると、八戸方向に建設路線がまっすぐ伸びていた。車を降り路線沿いに数百m歩くと、小高い丘の上で発掘が進められていた。調査区の斜面にはいくつもの組石遺構が密集し、圧倒された。丘陵上部の平坦面には列石が確認できた。驚いたのは、列石などを覆う大規模な整地層が広がっていたことである。その後も何度か訪れるたびに、さまざまな発見があった。丘陵上部の列石はボーリング調査によって路線外にのび、環状を呈することがわかった。列石の下から住居跡が、列石の周囲では掘立柱建物跡も検出した。遺物は少ないが、縄文後期前葉を主とした遺跡であることも年代測定値と併せて判明した。

「環状列石」の初出は、1919年の長谷部言人による大船渡市細浦上ノ山貝塚の報告(『人類学雑誌』34-5)だという。だが、これは埋葬人骨を伴う遺構で、「人骨の直に右方に、大小凡十個の石塊が点々環状をなして配置されて居る。少し楕円形で長い方の径は略人骨と平行し、石の中央を過る線を仮定して測れば人骨の後頭から趾尖に至る長さ約110糎と略同大である。」と小規模で、北海道の環状石籬とは異なっていた。

これに対し、大山柏は1941年に「然し乍ら本遺跡を仔細に観察すると果たして環状石籬であるか否か、其の根本に問題を蔵する。(中略)甚だ小形であり石狩音江の最小石籬より更に過小である。(中略)だから他の石籬と

は全く別扱にすべきものである。この点は報告者にも用意があり、殊更に環状石籬とは云わず、態と環状列石と称したものらしい。』(『史前巨石建造物』『史前学雑誌』13-1,2)と、疑義を表している。

だが、「態と称した環状列石」は、次第に定着・拡散していく。とりわけ文化財保護委員会によって行われた国営発掘の報告である『大湯町環状列石』(1953年)の影響が大きかった。確かに同報告の例言には環状列石の名称は「必ずしも適当なものでないことがわかったが、一応史跡指定当時の名称を踏襲」したと慎重な姿勢がみえる。「第三章 組石遺構」を執筆した後藤守一も、苦渋の上で環状列石としたという経緯を語る。

このように環状列石は、それまでの環状石籬との関連を検討せずに用いられた用語であった。やがて環状列石は、さまざまな配石遺構を包括し、曖昧な概念のまま人口に膾炙されていった。

また、1953年6月の大湯町環状列石指定書(文化財保護委員会告示第47号)には、野中堂・万座とも「円形の石組又は菱形の石組等の複合によって構成されたもの」と記す。石列ではなく石組に着目していたのである。環状列石の提唱者・長谷部が発掘に関わったこともあろうが、戦後という時代、客観的で民主的な価値観に基づく文化財保護法や考古学による新たな歴史の構築を期待された「国営発掘」だからこそ、祭祀遺跡というファジーな性格より石組という根拠に基づいた墓地遺跡という見解が求められたのかもしれない。当時の集落遺跡研究の遅れもあって墓地遺跡説が次第に主流となっていった。

大湯で「稀有のもの」と評された環状列石は、1970年代以降、北海道・東北だけでなく関東地方などでも事例が増加した。だが、北東北三県に限ってみても大湯のように組石墓が主となって環状を呈する例は極めて少ないようだ。青森市小牧野遺跡、北秋田市伊勢堂岱遺跡など多くの環状列石は、石列が一条あるいは二・三条巡ることが基本となっている。

また、出土土器や年代測定値などから大湯

が時期的に新しいことも判明してきた。『特別史跡大湯環状列石総括報告書』（2017）で述べているように、万座・野中堂の環状列石には部分的に石列があり、特に野中堂外帯では石列の外側に接して組石群が確認できる。大湯も当初は石列を巡らしていたが、多数の組石墓が取り込まれることで大きく変化したとする阿部昭典の指摘（『環状列石研究の争点と現状の課題』『環状列石』ニューサイエンス社）に注目したい。

『西平内 I 遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋文報告 673 集）では、環状列石を内帯、南斜面の組石群を外帯とする。

環状列石は洋野町教委の確認調査により、直径26～30mの楕円形を呈すると判明した。突出する石列が2箇所以上、掘立柱建物跡と思われる柱穴群も確認している。掘立柱建物跡は、他遺跡では環状列石外縁で検出されており、内帯と外帯の間には設けられない。つまり環状列石はこれで完結し、一条の石列を基本に下部土坑などは伴わないようだ。

一方、外帯とされた組石群は、環状列石南側に幅10m長さ25mほどの集中箇所がある。平面図では環状列石に揃う弧状配列に見えるが、これは斜面であることが関係する。むしろ、今回の調査でこの南斜面は渋谷川に下る沢頭の北側にあたり、対峙する南側斜面でやや小振りながら組石群を複数検出したこと、さらにボーリング調査で環状列石北側の平坦面では確認できず、一方、急斜面であるが路線内の組石群の西に石が分布することなどから、組石群は沢を挟んでまとまると考えられる。この組石を埋文報告書では墓とは断定はしていない。類似例に二戸市堀野遺跡の組石があげられるが、調査を担当した草間俊一は再葬と関わる積石墓との見解を示している（『岩手県福岡町堀野遺跡』1965年）。縄文後期前葉の北東北は、再葬と関連する甕棺墓、石棺墓をはじめ多様な葬制がとられていたことを踏まえるなら、やはり墓とするのが妥当だろう。

このように西平内 I 遺跡は、平坦面に石列

を囲繞し区画性を表象した環状列石、沢頭を挟んだ斜面に対峙する組石群、このふたつが関係しあった遺跡といえよう。大湯を踏まえるなら、組石が石列に組み込まれる以前の状態を示しているのだろうか。

そして、上下二枚の整地層である。上層は時期的に疑問も残るが、下層の年代測定値は環状列石の年代と矛盾はない。当初、環状列石全体を覆うと思われたが環状列石の南西側に限定されるようだ。とはいえ全体の土量は膨大であり、供給源も遺跡内では確認できない。類例も管見がなく、目的は不明ながら環状列石の廃絶に関わる遺構と理解したい。

環状列石から突出する石列の下部で発見された住居跡から、環状列石造営前に集落が存在したこともわかった。また他の住居跡や掘立柱建物跡は環状列石を囲むよう配置されていることにも注目したい。環状列石の造営にあたって、どのような場が選択されるのか、造営理由も含めて重要な事例になろう。

加えて、環状列石や組石群の石材供給地として渋谷川の河床がほぼ確実なこと、調査区から大量に出土した小円礫も環状列石など場の利用に関わる遺物と思われ、海岸で採取し、搬入されたのであろう。西平内 I 遺跡周辺では、洋野町教委によって分布調査が行われ、また三陸自動車道関連などの発掘事例が蓄積されている。周辺地域を含めた縄文後期前葉の動静を辿ることも必要だろう。

2020年12月、西平内 I 遺跡を横断して三陸沿岸道路が開通した。環状列石の場所は数m削平された。しかし、三陸道の北側に環状列石、南側に組石群が残存していることが確認できた。本遺跡発見の端緒は北側の町道付近での土器片採集だったという。そこから三陸道を越え南北350mほどにわたり平坦面が広がっている。遺構の復元、遺跡範囲などにとどまらず、環状列石研究に大きく資する遺跡として、保存・活用に向けた今後の取組みに期待したい。

写真図版



北側調査区 (E→)



19A区 (Aトレンチ) (SE→)



19B区(Bトレンチ)(SW→)



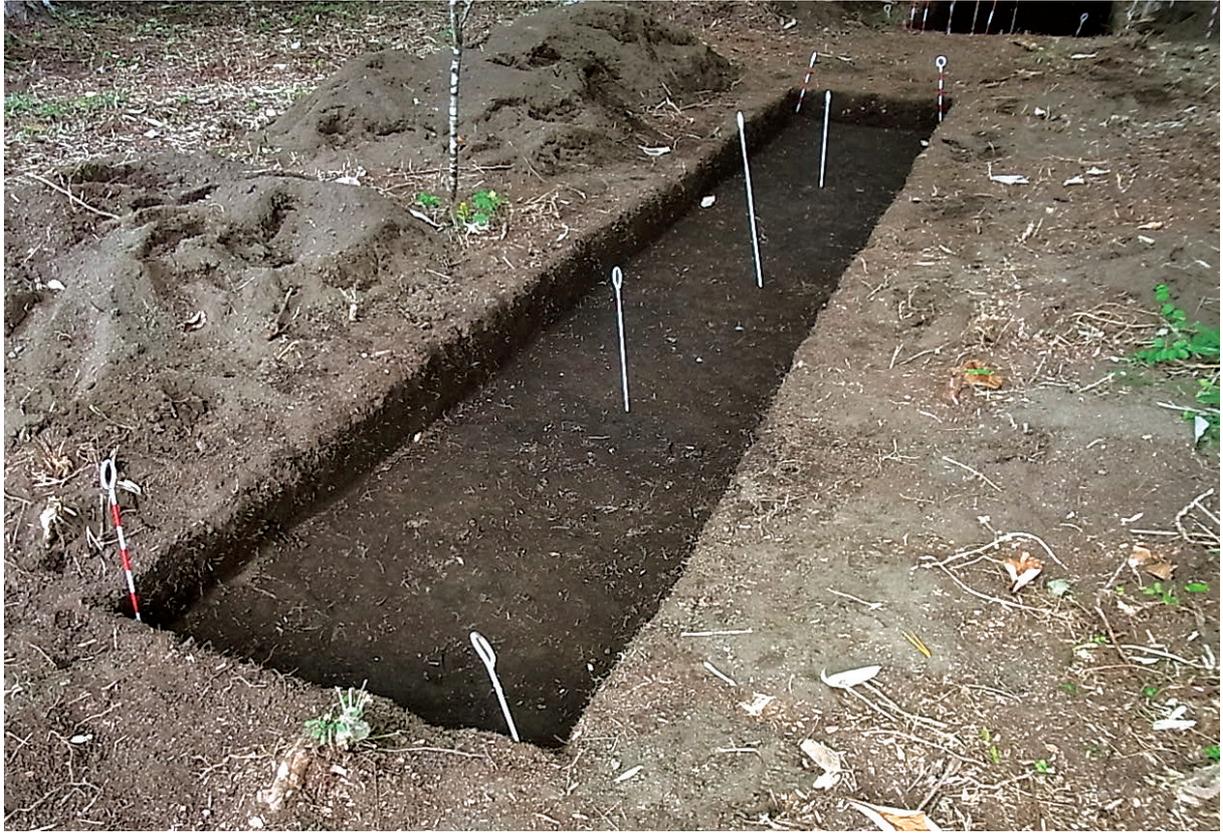
19C区(Cトレンチ)(W→)



19C区(Cトレンチ)断面(NW→)



19C区(Cトレンチ)焼土粒・炭化物検出(N→)



19D区(Dトレンチ)(S→)



19E区(Eトレンチ)(N→)



掘削作業状況



整地層1炭化物採取層位



ボーリング調査状況
(黄色の杭が礫反応点)



20A区(Aトレンチ)(NW→)



20C区(Cトレンチ)作業状況(NW→)



20C区20-01組石検出(NW→)



20-01組石(S→)



20-01組石 (NE→)



20A区南壁基本層序 (NE→)



ボーリング調査状況



ボーリング調査状況



町教委調査区 炭窯検出



21A区全景(E→)



21A区南東部(NW→)



21A区北西部(SE→)



21-01・02・03組石(E→)



21-01組石(N→)



21-02組石(N→)



21-03組石(NW→)



21-04組石(N→)



21-05組石(NW→)



21-06組石(NW→)



21-07組石(N→)



21-08組石(N→)



21-09組石(N→)



21-10組石(N→)



21-11組石(N→)



土器集中1 (W→)



土器集中2 (N→)



土層断面BB' (SW→)



作業状況(調査着手)



作業状況(組石群精査)



作業状況(組石群精査)



作業状況(組石群精査)



作業状況(遺構写真撮影)



西側斜面旧道掘割



22A調査区(E→)



22-01組石(N→)



22-02組石(N→)



22-03組石(N→)



22-04組石(N→)



22-05組石(NE→)



22-05組石(NW→)



ボーリング調査実施状況



ボーリング調査実施状況



現地説明会



※縮尺不定

写真図版 23 出土遺物 (1)



1



2



4



3



5



6



7

※縮尺不定

- 1 : 20C 区出土礫
- 2 : 20D 区出土礫
- 3 : 20D 区出土礫 (凹石状)
- 4 : 20D 区出土礫
- 5 : 20B 区出土円礫
- 6 : 20C 区出土円礫
- 7 : 20D 区出土円礫

報告書抄録

ふりがな	いわてにおけるかんじょうれっせきかんれんいせきちようさほうこくしよ							
書名	岩手における環状列石関連遺跡調査報告書							
副書名	洋野町西平内 I 遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	岩手県立博物館調査研究報告書							
シリーズ番号	第 37 冊							
編著者名	高木晃・金子昭彦・米田寛・濱田宏・熊谷常正							
編集機関	岩手県立博物館							
所在地	〒 020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷 34 TEL (019)661-2831							
発行年月日	2024 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡) ※はボーリング調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしひらない いせき 西平内 I 遺跡	いわてけん 岩手県 ひらのちよう 洋野町 たねいち 種市 だい 37 地割 ちない 地内	03507	IF48-0041	40 度 25 分 38 秒	141 度 40 分 47 秒	2019.09.02 ～ 2019.09.13	29	学術調査
						2020.09.07 ～ 2020.09.18	31	
						2020.11.09 ～ 2020.11.11	※ 3,000	
						2021.09.06 ～ 2021.09.17	40	
						2022.09.06 ～ 2022.09.09	39	
						2022.11.14 ～ 2022.11.20	※ 4,370	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西平内 I 遺跡	集落跡	縄文後期前葉	組石遺構 17 基 土坑 1 基	縄文土器 土製品 石器	環状列石の南側に組石遺構群の分布を確認			
要約	三陸道関連緊急調査と洋野町教育委員会調査により確認された環状列石が立地する尾根筋の南側を対象とした調査の結果、南側尾根筋に組石墓群が数カ所のまとまりとなって分布する状況が判明した。							

岩手県立博物館調査研究報告書第 37 冊
岩手における環状列石関連遺跡調査報告書
—洋野町西平内 I 遺跡発掘調査報告書—

令和6年3月29日発行

編 集 岩手県立博物館
〒 020-0102 盛岡市上田字松屋敷 34
電話 019-661-2831

発行所 岩手県教育委員会
〒 020-8507 岩手県盛岡市内丸10-1
電話 019-629-6180
(公財) 岩手県文化振興事業団
〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸13-1
電話 019-654-2235

印 刷 株式会社五六堂印刷
〒 020-0021 盛岡市中央通三丁目16-15
電話 019-654-5610